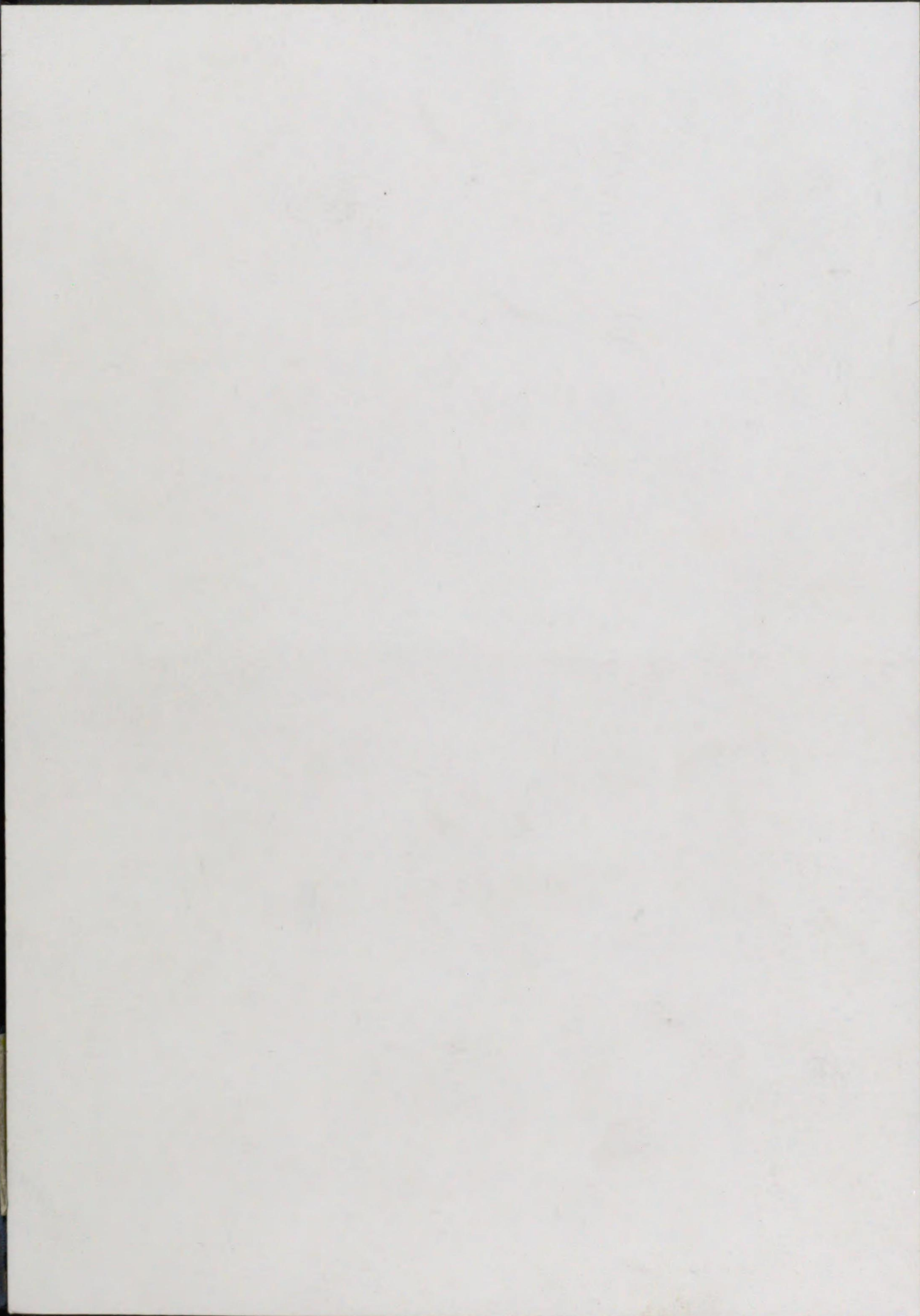


703

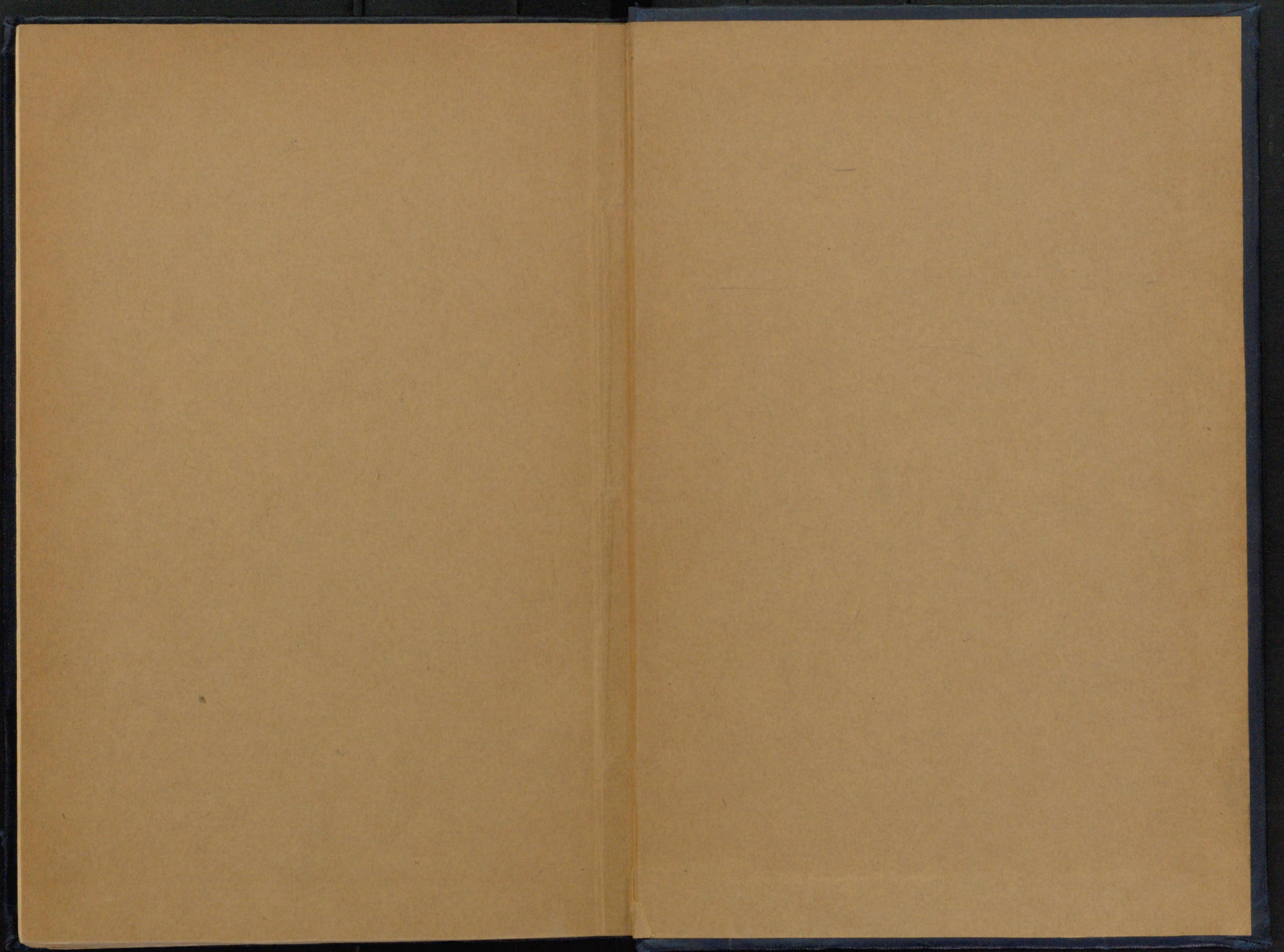
703-93



1200501582919









72  
12

31

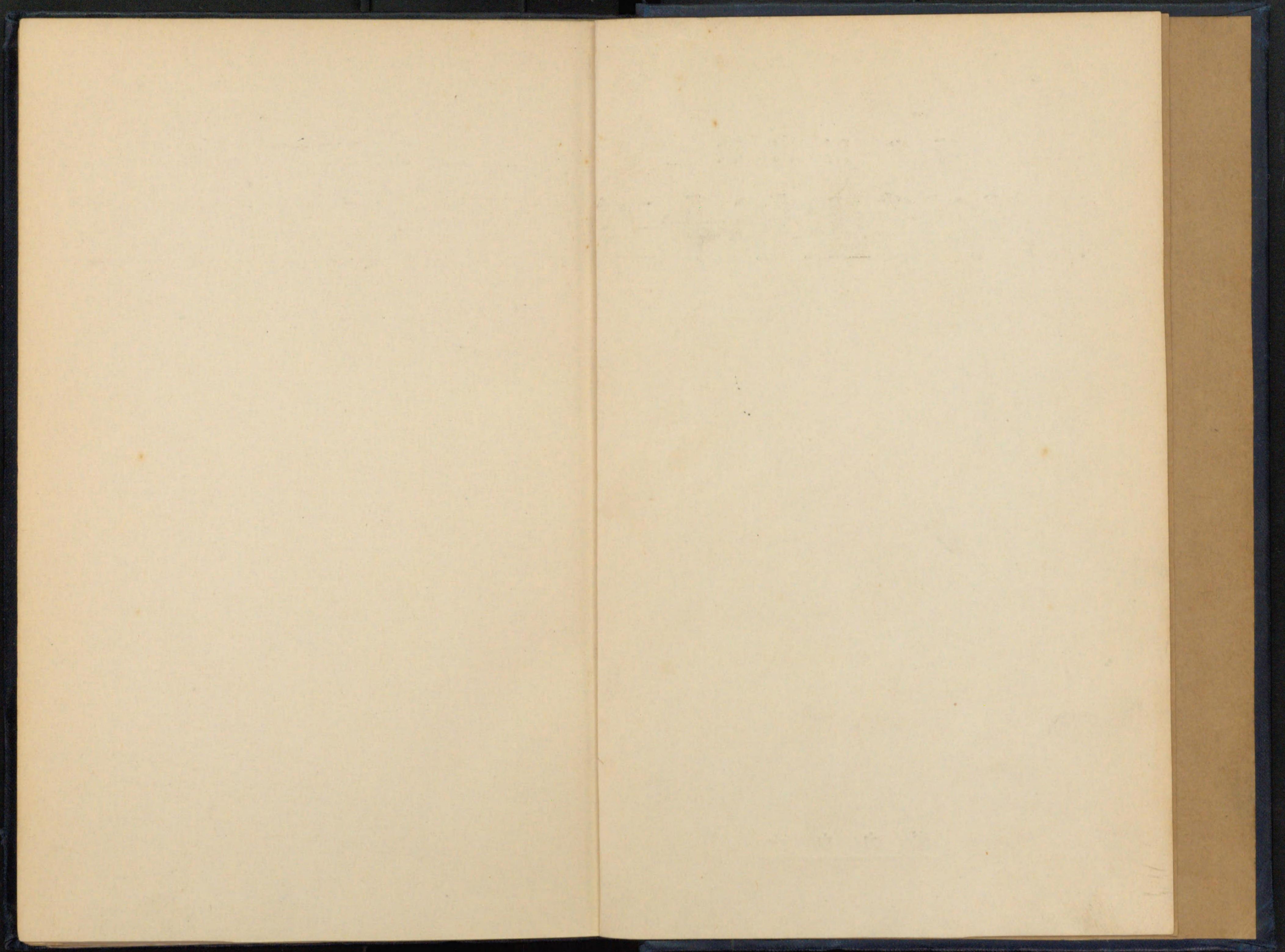


著 雀 雨 田 秋

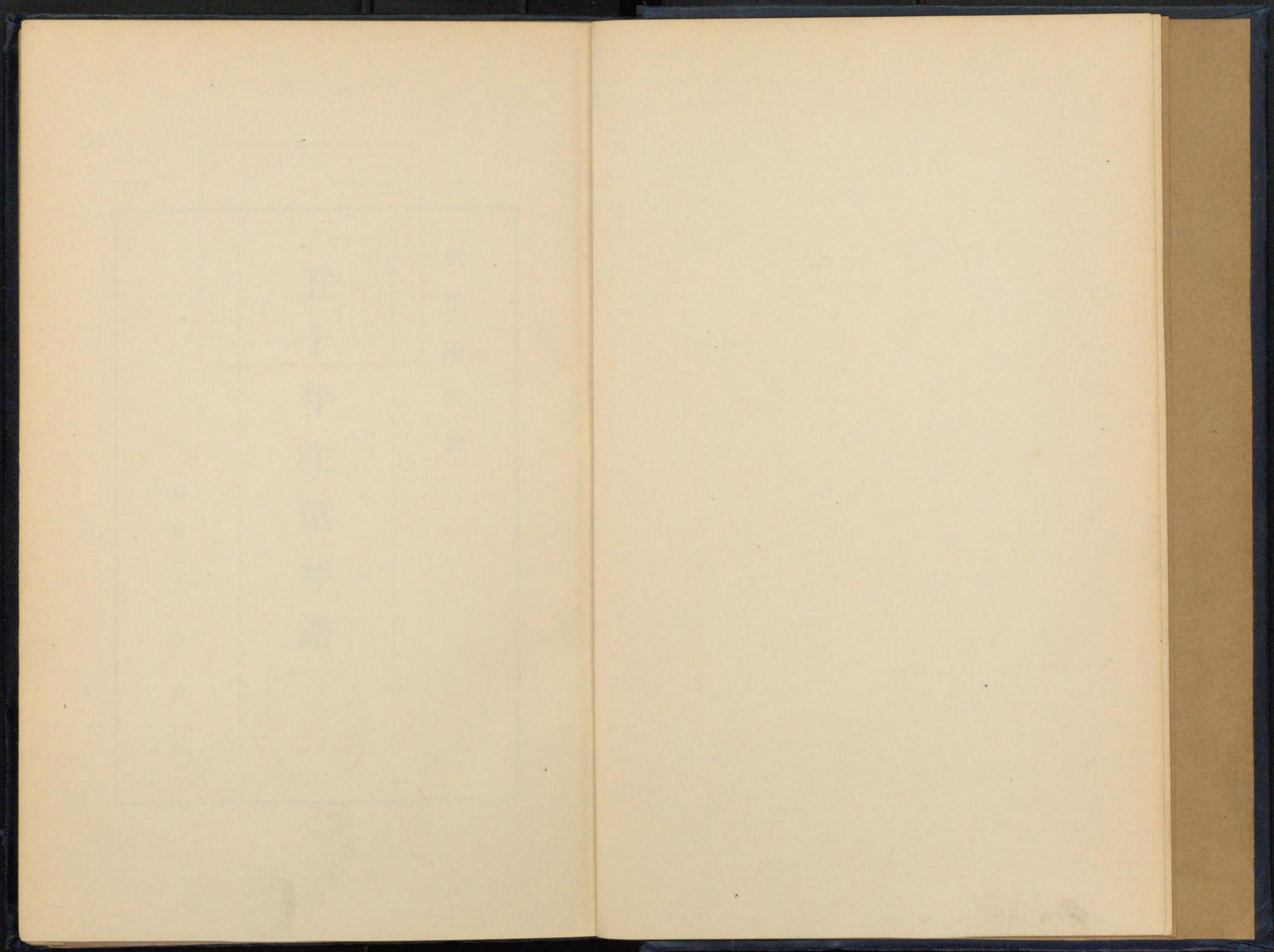
# 譜 年 活 生 年 十 五

社 力 ウ ナ



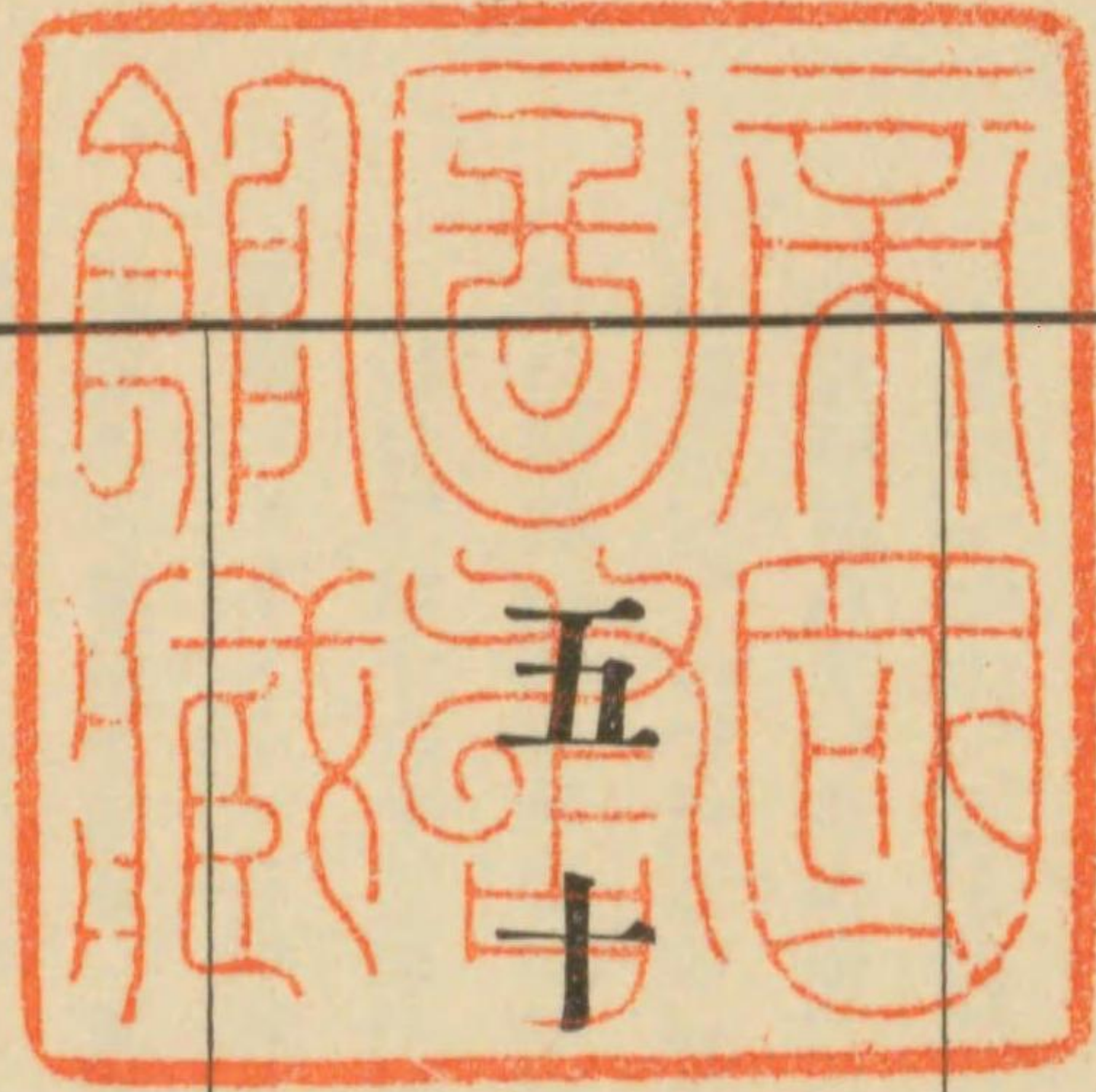








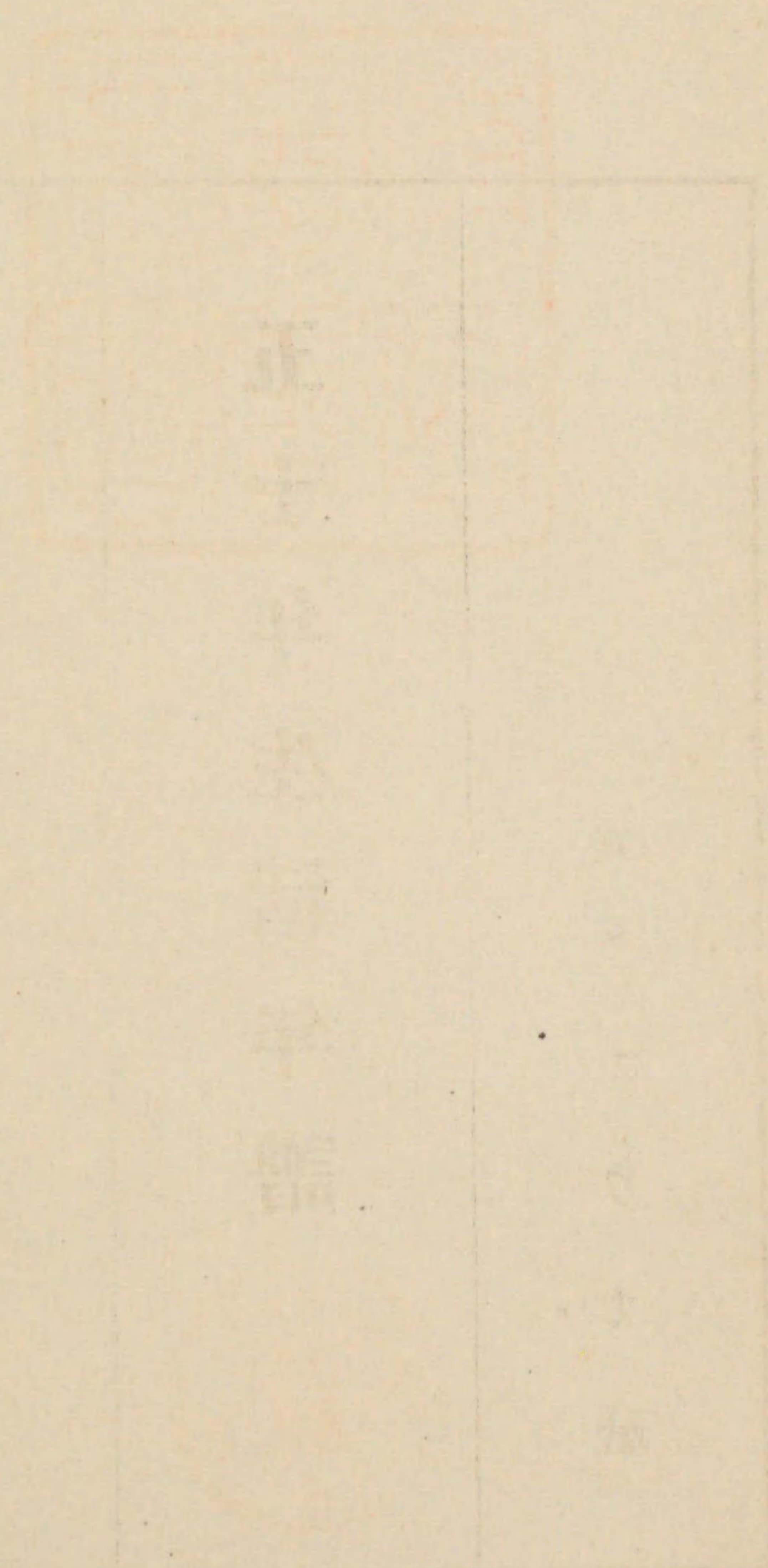
秋田雨雀著



五十年生活年譜



東京ナウカ社





703-93

## 序

私は一九三三年の夏、ある必要上から、自分の「手記」といふものを書かなければならなかつた。その時、職務上、私に「手記」の執筆を命じた人は、「あなたは作家として大變物を書かない人ださうだが、その代り手記だけは熱心に書いてください。」と笑ひながら私にいつた。私も笑ひながらその執筆を約束した。私の前に不自由ながら小さな文學の形式が産れて、その中に私の貧しい生活の過去が色々な姿をもつて現はれて來た。この形は面白い、いつかこの「手記」の形で自分の生活を記録して見たいと思つた。この小さな生活記録「五十年生活年譜」はいはゞその「手記」の繼續と見ることが出来る。

私は明治十六年に生れ、明治四十年頃から創作生活に入つた小さな作家の一人である。所謂「マイノル」な作家である。然し、それだけに、文學及び演劇の本流といふものを或は横から或は下から、或は相剌した矛盾の面から見ることが出來たやうに思ふ。これは幸福であつたらうか、不幸であつたらうか。私はこのことを不幸と思ふより幸福と思ふ方が多いのである。なぜなれば、もし私は日本の文壇、劇壇の所謂本流にゐたとしたら、或は





その人達と一緒に大手を振つて否定的な道を歩いてゐたかも知れないからである。

私は、然し、日本の文學の三つ時代、即ちロマン主義時代、自然主義時代、進歩主義文學の時代を通じて少數の作家、批評家に教へられることが多かつた。私は感謝の氣持でその人達にこの小さな記録を捧げたいと思ふ。また、私の同時代の人々が自分の記録を作製したり、同時代を回顧したりする場合に、この年譜が幾らかでも役立つて呉れれば、この上もない幸福だと思ふ。

最後に、この年譜では、記述に客觀性を持たせるために、一切人物の敬稱を省いた。年譜編輯の事務的な仕事は、上田進に一任した。

一九三六年 三月

雜司谷にて

秋田雨雀

### 五十年生活年譜目次

- I 創作期まで（明治十六年—四十年）……………（一）
- II 舞臺上の自然主義時代（明治四十年—大正三年）……………（三）
- III 苦難と觀念主義時代（大正四年—大正六年）……………（四七）
- III デモクラシイ時代（大正七年—大正十年）……………（六七）
- V 自然の大脅威時代（大正十一年—大正十二年）……………（八七）
- VI ヘビヤン時代（大正十三年—昭和元年）……………（一〇七）
- VII ソヴェート時代（其一）（昭和二年—三年）……………（一三五）
- VIII ソヴェート時代（其二）（昭和二年—三年）……………（一四〇）
- IX 國際文化時代（昭和三年—四年）……………（一五五）
- X 文化鬭争と逆流時代（昭和五年—六年）……………（一六八）
- XI 逆流時代（昭和七年—八年）……………（一八二）
- 附録 幽閉記録……………（一九八）

挿繪（ブブノワ女史、有島武郎）

各時代の著者（寫眞十二葉）



五十年生活年譜



正十年小野川

# I 創作期まで

(明治十六年—四十年)

A 郷里

明治十六年(一八八三)一月三十一日

私は青森縣南津輕郡黒石町大字前町二十番地に生れた。こゝは津輕藩の支藩、一萬石の小城下で、ネアタ祭と林檎の生産地として有名な町であつた。父は玄庵といつた。養兄永三、妹ふち(死亡)ちや(青森縣立女子師範教諭盛清幸に嫁す)の兄妹があつた。私の生れた時、父は眼疾のために失明してゐた。従つて父は彼の生涯を通じて私の顔を見ずに暮した。父は十六歳の頃まで小野川といふ手習師

匠の寺小屋に學んでゐたが、失明後は漢法の醫學や、オランダ式の産科學等を學習して、私の生れた時は地方で最も信賴された産科醫であつた。(その頃は盲人でも産科醫たることを得た。)私の地方では、私の父のことを「おぼこの神様」とあだ名してゐた。「おぼこ」といふのは赤兒の地方名である。母はまつといつて、木村といふ當時町では一流の、然し没落しかけてゐた封建商人の娘で、私の生



れた時は、あばた顔の可なり醜い女であつた。恐らく顔が醜いので盲人の父に嫁合はされたのであらう。感情的で、迷信的で、従つて宗教的で、色々な出来ごとを豫知するやうな習慣があつた。地方語の「いた子(巫女)」に類した性格をもつてゐた。私は父親のやゝ科學的な、冷靜な性格と、母親の感情的で、迷信的な要素とを四分六分に受けて、その時代／＼にその何方かがより多く頭をもたげてゐたやうに感ずる。

記録によると、私の生れた年には、文學の方面では假名垣魯文、竹の舎主人、宇田川文海、須藤南翠、柳亭種彦、爲永春江、南新二等が盛んに戯作風の作物を書いてゐる時代で矢野文雄の「經國美談」宮崎夢柳の「高嶺の荒鷲」等の政治小説の公けにされたのもこの年であり、世界的に見ると、ツルゲエネフやワグネルやカアル・マルクスがその偉大な遺産を残してこの世を去つたのもこの年である。

#### 明治二十年(一八八七) 五歳

この頃、北山平九郎といふ隣家の主人がよく私の家に入出入してゐたが、この人は大酒家で熱心な天主教の信者であつた。私の父も酒を好んだので、よく二人は飲みつくらをした。私はこの老人が宣教師のフランス人の來てゐる間は酒をやめてゐるが、その歸つた後で一週間も十日も酒を飲みつゞけて、おしまひにはおい／＼聲をたて、泣いてゐるのを見たことがある。白い顎鬚をはやした、一寸ロシヤのムジークを思はせるやうな老人であつた。私は五六歳の頃フランス人が來ると、きつとつれて行かれて、氷砂糖を口に入れてもらふので、その人の來るのを待遠しく思つたのを憶えてゐる。そのフランス人はせつかちな人で、始終バイブルを手にして家の中をあつちこつちと歩いてゐた。初めて世界地圖を見せてもらったのもそのフランス人からであつた。

#### 明治二十一年(一八八八) 六歳

この年、私は黒石町尋常小學校に入學した。もとの寺小屋の息子小野川懋、後ではローマ字の詩を書いたり、エスペラントをやつたり、自由律の和歌を初めたりした鳴海要吉(うらはる)などと同級生であつた。小野川は非常な秀才で、幼年期から漢詩などをつくつたりしてゐたが、後年大學の専科を出て九州のある中學の教師をしてゐたが、三十歳の頃上京、間もなく發狂して親戚に當る弘前のある寺院の離れ牢の中で死んでしまつた。發狂後、私は離れ牢の中で彼に面會した時の印象を、「秋と狂人」といふ對話の形で描寫したことがある。

鳴海も小學時代に俳句などをつくつてゐたが、彼の性格は小野川とは全く異つてゐて、可なり近代的であり、藝術上の革命主義者であつた。この二人に比較すれば、私は最も平凡な、内氣な表現力のない少年であつた。然し、父が失明してゐたので、私は父の爲めに漢法の醫書や、産科學書などを讀



まされた。また、父は月並の俳句をやつてゐたので、その代書を命ぜられた。父の俳句は私の代書したのだけでも數千句に及んでゐるが、失明者であるせいか、何處か變則的であつた。色の感覚が缺けてゐたためかも知れない。父は俳句を「心眼」といつた。

### 明治二十八年

(一八九五) 十

三歳

この頃、私は町

(第 一)

の高等小學にゐた  
日清戰爭時代で、  
松崎大尉や原田重  
吉の功名談が、傳  
説的な魅力をもつ



明治三十年、十五歳の著者

て私達少年の頭腦  
を支配してゐた。  
學校では木製の銃  
を體操場に並べて  
學生に毎日軍事教  
練を施してゐた。  
中西といふ教導團  
出の軍曹が體操教  
師で、時々生徒に

野外演習などをさせた。この體操教師は、後年上京して、私達と自炊生活をしながら法律學校を卒業して判事になり、地方では名裁判官といふ評判をとつてゐたが、今では青森で辯護士をしてゐる。

この時代に私達は何んな氣持で生活してゐたか殆んど忘れてしまつてゐたが、最近私はそれについて小さな文獻を發見した。それは、高等小學時代に私達をつくつてゐた回覽雜誌であつた。それによると、私は驚くべき軍國主義者で、日本は武力によつて世界を征服してしまはなければならないといふ作文を書いてゐる。私はそれを見せられて顔が赤くなつたが、然し同時にこのやうな×××、今日でも世界到るところ××××××××××××××××××××××××。日清戰爭前後、私達の町では明笛や月琴が急に流行しだした。私も明笛を一寸稽古したのを憶えてゐる。明笛の穴に張る薄皮をとるために、私は一生懸命に竹を割つて手を切つたことがある。村の若衆達が、月琴をかき鳴しながら町へ入つて來るのを始終見たものである。この頃最もはやつた曲は「九連環」といふ支那曲であつた。これに反して、町の土族の子弟達は横笛を吹いてゐた。彼等は藩公のお廟屋や、町の下を流れる淺瀬石川の橋の上や、夷館といふアイヌの城趾の上などで横笛を吹いてゐた。この横笛と明笛の對立によつてだけでも、私の生れた小さな城下の二つの文化の流を知ることが出来る。

この頃、士族の子弟と町家の子供達がよく喧嘩をしてゐた。ある時、私は町家の子供達の先鋒に立つて進んだが、町家側が敗走して私は士族側に捕虜になつたことがある。然し、先方の隊長が私の同級生だつたので、すぐに免されて歸つた。この頃西洋林檎の苗木が澤山に移植されて、林檎の接木が



盛んに行はれてゐる。士族や商人が果樹園を經營し初めてゐる。

明治三十年（一八九七）十五歳

私はこの年の四月、弘前市の青森縣第一中學校に入學した。この學校は、まだ全く封建主義の中にあつた。生徒の言葉も同じ地方の言葉とは思へない程亂暴なものであつた。生徒の大部分は士族の子弟達で、それに青森第五聯隊の將校の子弟達なども加つてゐたので、封建主義と××××××××の空氣で一杯になつてゐた。私はこの五年間を不快な氣持で送つた。學生の間には男色の戀風が盛んに行はれてゐて、この惡風のために年長者は無氣力になり、年少者は卑屈の氣風を養つた。

明治三十三年（一九〇〇）十八歳

この頃、第八師團が新設された。私達は朝早く未明に弘前驛に到着した師團の兵士を出迎へた時の印象を忘れない。曉方の灰色の空氣を無言の兵士の足音が破つて来る。時々、何處からとも知れない甲高い號令が人間の流の上に傳へられる。色々な兵種の兵士が朝霧の中に姿を現はして来る。長い砲車の列の後に、黄色の胸章をつけた騎兵の馬蹄の音が高く響き渡る。これが、明治二十八年代の、實際勢力に對する××の××××××××××××××××であつた。

私達は此頃から、毎日單調な喇叭の音に惱まされながら勉強をした。その頃私と同宿の若い士官達の中に小金井といふ中尉がゐるが、これは小金井良精博士の弟で、日露戰爭で戦死をしてゐる。快活でユーモラスな男であつたが、ある朝この男が落馬をしたといふ噂さが市中に傳つた。彼が夕方兩股をひろげ、劍をがちやく／＼させ、大笑ひをしながら下宿へ歸つて來た時の光景をはつきり思ひ浮べる事が出来る。

明治三十五年（一九〇二）二十歳 中學卒業

私はこの年中學を卒業した。私はこの中學では學課に殆んど興味を持たないで暮した。たゞ僅かに札幌大學を出た農學士がゐるので、博物學に對して多少の興味をもたせられた。私はこの教師からダルキニズムの輪廓を學んだ。數學の教師は、黒板に對して計算をしてゐるばかりなので、最後まで興味を持たなかつた。私は中學の上級の頃、バイブルをよく讀んでゐた。封建主義に對する反抗心からであらう。卒業間際に私は初めて近代日本文學に接する機會を持つた。私の先輩で、東奥義塾（珍田捨己などを出したキリスト教的私塾）に學んでゐた益子愛太郎といふ男が、徳富蘇峯の「文學斷片」や二葉亭の「浮雲」などを讀んでゐたので、それに刺戟されて次第に文學に親しむやうになつた。藤村の「夏草」や「落梅集」などは鳴海要吉の手を経て讀むことが出來たが、文學上のローマン主義の世界は私に全く新しい世界を暗示して呉れた。



この中學の上級生に、宇野要三郎といふ青年がゐるが、この男の家は大きな酒造家で、私の家は  
その眞向ひにあつた。宇野要三郎は後で東京地方裁判所長になつて、私達を判く側の人になつてゐる  
のも興味がある。

B 上 京

明治三十五年——四月

郷里ではまだ冬の風が吹いてゐるが、東京はもう立派に春だつた。私は馬渡驍(會計検査院の官吏)  
といふ同級生と一緒に上京したのだつた。私は従兄の木村鐵太郎(哲郎)に迎へられて、鐵道馬車に  
初めて乗せられた。馬は時々尻尾をあげてうんこをしてゐた。然し、鐵道馬車はその時の私達にとつ  
ては驚嘆すべき文明の利器だつた。

私は小石川竹早町の修養社といふ青森縣人だけの寄宿舎に入れられた。私はこゝに約一年ほどゐた。  
私は東京専門學校(この年早稻田大學となつた。)の文科に入學するつもりであつたのを、父は醫者  
にしようとして一高の試験を受けるように命じた。ところが、第一日の體格検査(身長と體重の不足)  
で不合格になつたのを幸に、私は早速早稻田の文科に入學してしまつた。私はこの寄宿舎から早稻田  
へ通つた。

こゝで私はこの寄宿舎(修養社)の様を記して置く必要がある。この寄宿舎は財団法人で、郷里  
の富豪や子弟の父兄達の寄附によつて出來たもので、學習室が二十ほどに、五十疊敷ほどの集合室が  
あつて、その集合室の正面奥には近衛篤麿の額と、本田庸一(青山學院長)の綱領が掲げられてゐた。  
この一事によつても、この寄宿舎の學生指導の方針がほゞ想像がつくであらう。私はその當時ある友  
人に「封建主義とキリスト教主義とのアマルガメーション」だと悪口をいつたことがあるが、これが  
この時代の學生教育に共通した傾向であつたやうにも思ふ。

修養社々長は本田庸一で、別に舎監は學生から擧げられてゐた。私の入つた時は高橋堅(今の一高  
教授)が舎監であつた。舎生の先輩には、中學での先輩であつた宇野要三郎がゐた。田中おんちや  
(二番目の子供の意)といふテニスの上手な青年がゐるが、これは後でフランス大使になつた佐藤尙  
武であつた。田中家から佐藤家(愛鷹)へ養子に行つたのであつた。田中おんちやは美貌な青年で東京  
で育つた子供だけに立派な江戸辯をつかふので、私達はいつも一目を置いてゐた。彼は高等商業の學  
生でボートの選手でもあつた。この頃田中おんちやと反對に、ひどく亂暴な工藤忠といふ男が一人ゐ  
たが、これは六尺大の男で、後で馬賊の群に投じたといふ噂があつた工藤鐵三郎(滿洲皇帝の護衛



長で、滿洲國陸軍上將) だった。私はこの寄宿舎の生活には、初めから少しも興味を感じなかった。私は次第に生活の中心を失ひ、妙に反抗的ないら／＼した青年になつてゐた。私はこの頃齋藤緑雨の隨筆などを耽讀してゐたのを記憶してゐる。

明治三十六年(一九〇三) 二十一歳

寄宿生活が次第に耐へないものになつて、私はこの年の春頃、同郷の友人平田補吉兄弟達と、小石川同心町に自炊生活を初めた。私達はこれを「同心窟」と名づけてゐた。同宿者は、小學時代の體操教師で法學生の中西西三、平田補吉、平田泰吉、工藤義公、穴水泰勝、西谷捨吉、鳴海慶三、(要吉の弟でアメリカで客死) 及び自分であつた。平田補吉は、平田小六の叔父で、立派な體格の所有者で、宗教や文學に相當興味を持つた男で、私達の間では最も將來ある人物だといはれてゐたが不幸にして夭死してしまつた。弟の泰吉は、兄とは全くちがつた性格で、メランコリーな男で、人生をいつでも横の方から眺めてゐるやうな男であつた。彼は今隠れたる支那通である。穴水は、少し頭腦の粗野な男であつたが、妙に星に興味のある男で、晴れた晩にはいつでも星座をながめてゐた。私はこの男と星座のことで喧嘩をして、あやまつて彼のオルガンを足で蹴つて氣絶をさせたことがあつた。私はこの頃妙にエクセントリックな男であつた。西谷は商人出の人で、ひどい吃音者であつたので、その頃

有名になつた樂石社で吃音の矯正をやつてゐた。私達はよく皿小鉢をたゞきながら吃音矯正の眞似をしたものだつた。工藤は溫和な青年で、今農林省の技師をしてゐる。

早稻田の豫科では、私は二三人の友人を得た。片上天弦(伸)は、この頃既に新體詩などを書いてゐた。相馬御風も和歌を明星などで發表してゐた。同級生には、片上、相馬のほか楠山正雄、生方敏郎、會津矢一、白柳秀湖、水谷竹紫等がゐた。上級生には、吉江孤雁(喬松)、西村醉夢(眞次)小川未明、窪田空穂、水野葉舟等がゐた。學校では坪内博士は英詩を、安部磯雄や内ヶ崎作三郎は英語を、志賀重昂は地理を講義してゐた。

私はこの年始めて、本郷中央會堂で社會主義者の演説を聽いて非常に啓發されるところがあつた。私は、これまで觀念的世界觀で社會を見てゐたので、全くちがつた世界につれて行かれたやうな氣がした。初めは一寸反撥させられるやうな感情を得たが、その論じてゐるものを押しつめて行くと、いつも一つの問題に落ちついて行くので、私は喫驚してしまつた。例へば「××」「生活」「幸福」「平和」「平等」といふ私の最も惱んでゐながら解釋出來ないでゐたものを、こゝでは鋭いメスのやうなもので解釋して示して呉れてゐた。講演者は、安部、幸徳、西川、堺、木下等であつた。聽講者の大部分は、一高、大學、専門學校の學生であつた。そして演壇の一方には、臨監者が腰かけてゐて、盛ん



に××を××してゐた。その度に數千の聴講者は熱狂して叫んでゐた。またこの頃、私はブルジョア自由主義者の島田三郎や足尾鑛毒事件で活躍した田中正三の演説をきいたことがある。また、私はある尊敬する牧師が「われ戦ふが爲めに來れり」といふバイブルの言葉を引照して××××の演説をしたのをきいて席を蹴つて歸つたのを憶えてゐる。

生活の中心を失つてゐた私は、この頃から急に元氣づいて來た。私は「同心窟」の友人にかくれて社會主義の演説をきいて歩いた。私は、この年初めて、日本にも國際的な労働運動の存在してゐることを知つて、非常な驚きを感じた。私は中央會堂、錦輝館、青年會館等で當時の社會主義者の熱心な聴講者の一人となつてゐた。(後期の日本社會運動の指導者は、大抵この時代の聴講者であつたことを私は後になつて知つた。) 明治三十七、八年の日清戦争の頃から盛り上つて來た日本の支配力は、この十年間に一つの決定的方向をとつて進んでゐたことが感ぜられる。日露開戦説がブルジョア・ジャーナリズムの上に盛んに反映して來てゐた。この年の十月、萬朝報の黒岩涙香が、非戦論をすて、開戦説を主張したので、幸徳、堺、つゞい内村鑑三は萬朝報を退社してしまつた、十一月には、「平民新聞」が創刊された。私達學生は、強い衝動を感じながらこの年を送つた。

#### 明治三十七年(一九〇四)二十二歳

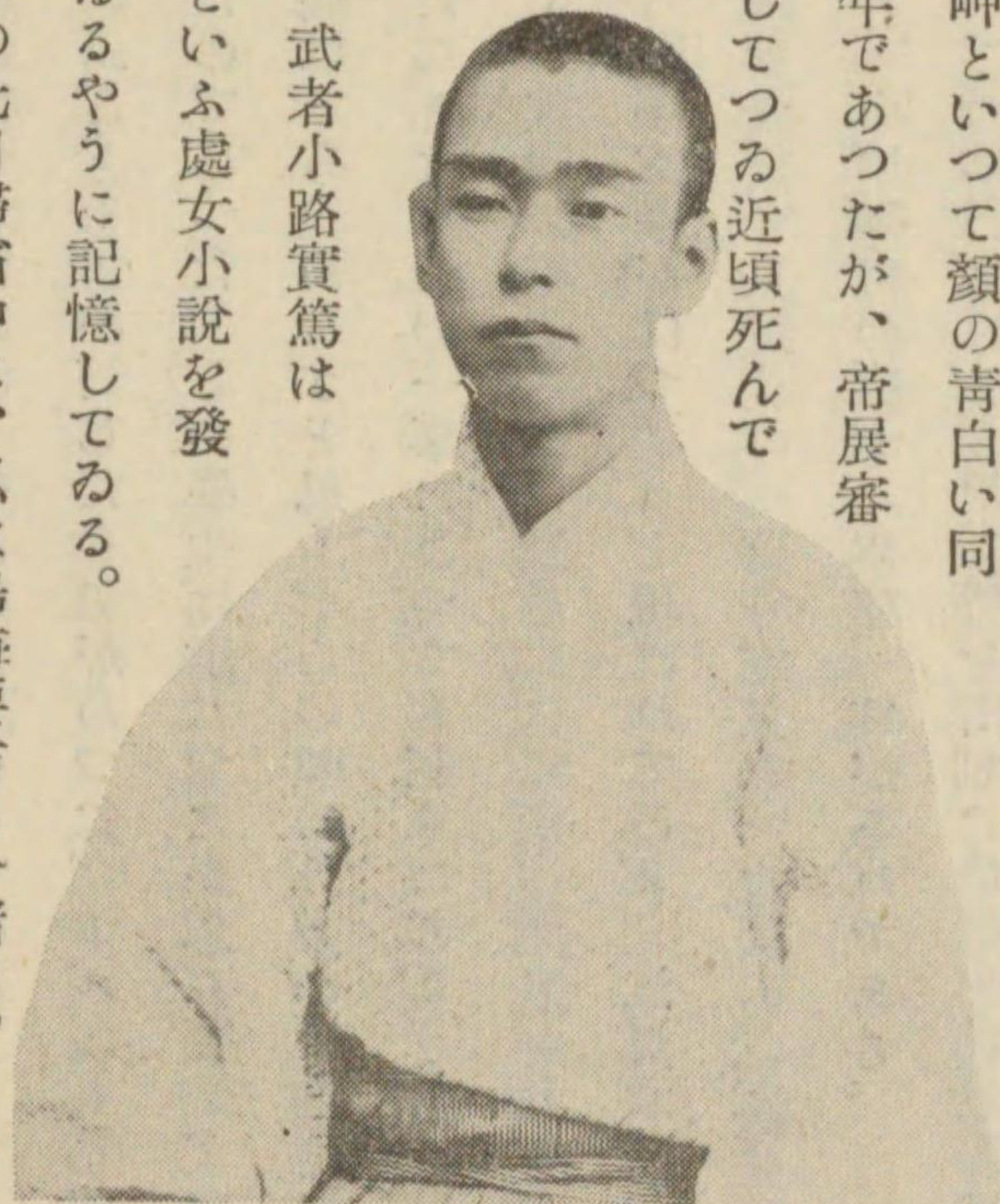
一月の初め、私達は大學の校庭で火にあたつてゐた。(この頃、早稻田大學は昔の私塾の性質から營利會社に變ずるために、盛んに普請をしてゐた。)すると、誰かゞ、レオ・トルストイから手紙が來たといふことを言ひだしたものがあつた。トルストイは××××に反對して、日本の同志に手紙をよこしたのであつた。その學生は誰だつたか忘れたが、多分安成貞雄で、そして、その手紙の受取人は安部磯雄であつたらうと思ふ。この頃の日本の平和運動は、社會主義と人道主義とごつちやなものであつたことは、この一事によつても判るであらう。

二月には宣戦が布告され、三月には旅順の閉塞が行はれてゐる。東京市中は戦争の話で持ちきりであつた。戦争文學がぼつ／＼と現はれてゐる。江見水蔭の「動員令」小栗風葉の「豫備兵」巖谷小波の「軍國女氣質」泉鏡花の「留守宅見舞」水蔭の「決死隊」田口掬汀の「旅順攻撃」國木田獨歩の「愛國者」小川煙村の脚本「旅順」等がそれである。

私は、この年の三月に「同心窟」を出て、早稻田鶴巻町の松葉館といふ下宿に引移つてゐる。この下宿は、武者小路實篤の叔父の家で、主人は武者小路某といつて、のんびりした公卿様のやうな顔をした老人であつた。私はこの家にゐる内に、最初の詩集「黎明」を自費出版をしてゐる。なぜこの年に



詩集を出版する氣持になつたのか、今では全く思ひ出せない。この幼稚な詩集には、出征する兄と、それをとどめる弟との會話を劇詩の形にしたものが一篇入つてゐる。この詩集の装幀をした畫家は、葛谷龍岬といつて顔の青白い同郷の青年であつたが、帝展審査員としてつる近頃死んでしまつた。



明治三十七年、二十二歳の著者 (第二)

同じ頃、武者小路實篤は「荒野」といふ處女小説を發表してゐるやうに記憶してゐる。この年の七月歸省中に、私は鳴海要吉と一緒に、また此年の八月に、片山潜が萬國社會黨(第二インターナショナル)の第六回大會に出席するため日本を去つてゐる。片山潜は、初めキリスト教的社會主義者であつたが、アムステルダムでプレハ

ーノフと會見してから、正統社會主義者として三十九年に歸國してゐる。

明治三十八年(一九〇五)二十三歳

號外の鈴の音が毎日東京の街に響きわたつてゐる。一月には旅順が陥落してステツセルが降服書を乃木大將に送つて、兩將軍の會見が行はれた。國民が熱狂してゐる。三月には奉天が陥落してゐるが日本軍の死傷者は四萬、ロシア軍の死傷者九萬に達してゐる。五月には、バルチック艦隊が、對馬沖で上村艦隊のために全滅させられてゐる。

九月にはポーツマスで講和條約が締結されたが、戦争熱で夢中になつてゐる國民は、反動勢力に助長させられて暴動化してゐる。

この年から文學の方面では、ロシア文學の紹介翻譯が著しく殖えてゐる。プーシキン、レルモンツフ、ガルシン、トルストイ、ツルゲエネフ、アンドレイエフ、ゴーリキイ等が翻譯されてゐる。ロシア文學の研究、紹介は、日本文學の素朴な寫實主義に方法的修正を加へて行つてゐる。田山花袋、島崎藤村、徳田秋聲、小栗風葉等が、創作の世界に新しいリアリストとしての歩みを進めて來たのもこの頃である。

私はこの年の冬に、雜司ヶ谷に移轉してゐる。創作欲望はまだ生れてゐない。凱旋のお祭騒ぎをよ



そに、私は盛んに讀書を初めてゐる。シエイクスピーア、シエリイ、キエーツなどで養はれた私の頭の中に、頬髭のいかめしいイブセンが無理に押し込んで來たのもこの頃であつた。私は學校へ行かずに毎日學習院の原で勉強をつゞけた。

明治三十九年（一九〇六）二十四歳

毎日、ロシアの捕虜が目白驛を通過してゐた。大勢の男女は、侮蔑の氣持で目白驛へ押しかけて行つた。鬚むしやなロシアの捕虜達は、列車の窓から顔を出して見物人にあいさつをしたり、中には舌を出してふざけたりするものもあつた。見物人は、「あれだからロシア人は戦争に負けるのだ」といつたが、然し、實際としては、ロシアの捕虜を憎む氣持を誰も持つてゐなかつたやうだ。

私はこの四月に學校を出る筈だつたが、出席數が規定に充たないといふ理由で、原級に止められた。私は可なり失望を感じたが、この一年を最も有効に使はうと決心した。白柳秀湖もおなじ理由で私と一緒に原級にとゞまつたやうに記憶する。白柳は、この頃まで學校へ尾行者をつれて來てゐたので私達の興味をひいた。彼は同級生の内では最も早く社會主義的思想に影響され、既に同志の一人として部署についてゐた。従つて彼は小ブルジョア的な早稻田の學風にはあきたらなかつた。私は白柳とは餘り多く話をしなかつたが、いつでもお互に同感を持つてゐたやうに感ぜられた。

この頃、島村抱月は、早稻田では一番フレツシユな講義をしてゐたので、私はいつでもこの講義に出でゐた。私は前年ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の英文學史を聴講してゐたが、英文の筆記がとれないので弱つた。同級生で筆記のとれたのは、片上伸位るのものであつたらう。島村抱月の文學の講義は柔軟性があり、新鮮味があつて一番多くの聴講者をもつてゐた。この時代から、早稻田の文科では、坪内系統の學生と島村系統の學生とが、はつきり分れてゐたやうに感ぜられる。（後で、島村抱月が文藝協會から分離して藝術座を組織した時、早稻田出身の文士の間に分裂を生じたが、その素因はこの頃から醸し出されてゐたやうにも思はれる。）これは道德的な意味を含むものでないことは勿論である。

私はこの年、自分より年長の箭田きぬと結婚した。箭田はその夫を日露戦争で失つて、老母と二人で雜司ヶ谷で貧困な生活をしてゐた。この家は、舊い名主の家で、老母は夏目金之助（漱石）を九歳まで養子として育てゝゐたが、夫との離別によつて金之助を實家の夏目家にかへしたのであつた。この老母は、三多摩一の富豪といはれた榎戸源三の長女で、おなじ名主關係の小金井小次郎（近代の俠客）に背負さつて歩いたといふ面白い經歷を持つた女であつた。勿論そんなことは私の文學的生活に何等の關係のないことではあるが。



明治四十年（一九〇七）二十五歳 創作に入る

110

私はこの年、恩師島村抱月のところへ小さな創作を持つて行つた。その頃同級生の中村星湖や、橋高廣（警視廳検閲掛長で後の神樂坂署長）などを初めとして、四五十人の學生が原稿を持ちこんでゐたので、彼の行李はいつでも一杯になつてゐた。私の原稿が途中で行李からはみ出したので、それを一番上に載せかへたために、それが一番先きに讀まれて、四十年六月の「早稲田文學」に掲載されることになつた。（中村星湖は既に處女作「少年行」等を發表してゐた。）

私の處女作は「同性の戀」といふので、男性同志の戀愛を描いたもの、文體は島崎藤村などの影響を受けたものらしいが、全體の構想は幼稚で、今では殆んど讀むに耐へないものである。私は同じ年の七月に雑誌「趣味」に「アイヌの煙」を發表してゐるが、之は、アイヌの部落を訪ねた青年が、アイヌ族の滅亡を慨くといふ筋で、描寫は非常にセンチメンタルなものであるが、この小さな作物は、後のアイヌを取材とした私の作物と強い聯關性を持つてゐるものである。私は同じ月の「文庫」に「驛路」を發表してゐる。又同じ年の十一月に「文庫」にモウパスサンの「通夜」を翻譯してゐる。なぜ私はモウパスサンを譯してゐるかといへば、この作物は普通のモウパスサン物とちがつてゐて哲學者シヨペンハウアが死んで入齒が床板に落ちたので、びつくりしたといふ筋にひどく興味を感じたからである。（つゞく）

## Ⅱ 舞臺上の自然主義時代

（明治四十年——大正三年）

明治四十年（一九〇七）二十五歳 つゞき

私はこの年に處女作「同性の戀」のほかに「アイヌの煙」「尼の風呂」等の短篇小説を發表してゐるが、まだ自分は作家として立つて行けるとも思つてゐなかつたし、行かうなどとも思つてゐなかつた。いつも何か別なところに自分の天職があるのだと空想してゐた。

然し、九月の初めに、自分の尊敬してゐた島崎藤村のところから「面白い仕事が見つかったから、一寸おいでください」といふ葉書を受つたので、私は淺草新片町に藤村を訪ねると、それは十月から創刊される小山内薫の「新思潮」の仕事を手助けして見る氣はないかといふのであつた。私は生活を得た喜びを感謝したが、同時に、自分にそのやうな仕事が出来るか何うかといふ不安に襲はれた。私はこの頃、ひどくエクセントリックな青年で他人の仕事を手助けるやうな調和性を持つてゐなかつた。

十月から新思潮（後期のものとは直接的な關係はない）の仕事が初まつた。小山内は、其頃二十七歳位の顔の青白い美貌な青年であつた。彼はその頃まで日本橋中州の眞砂座で興業してゐた伊井蓉

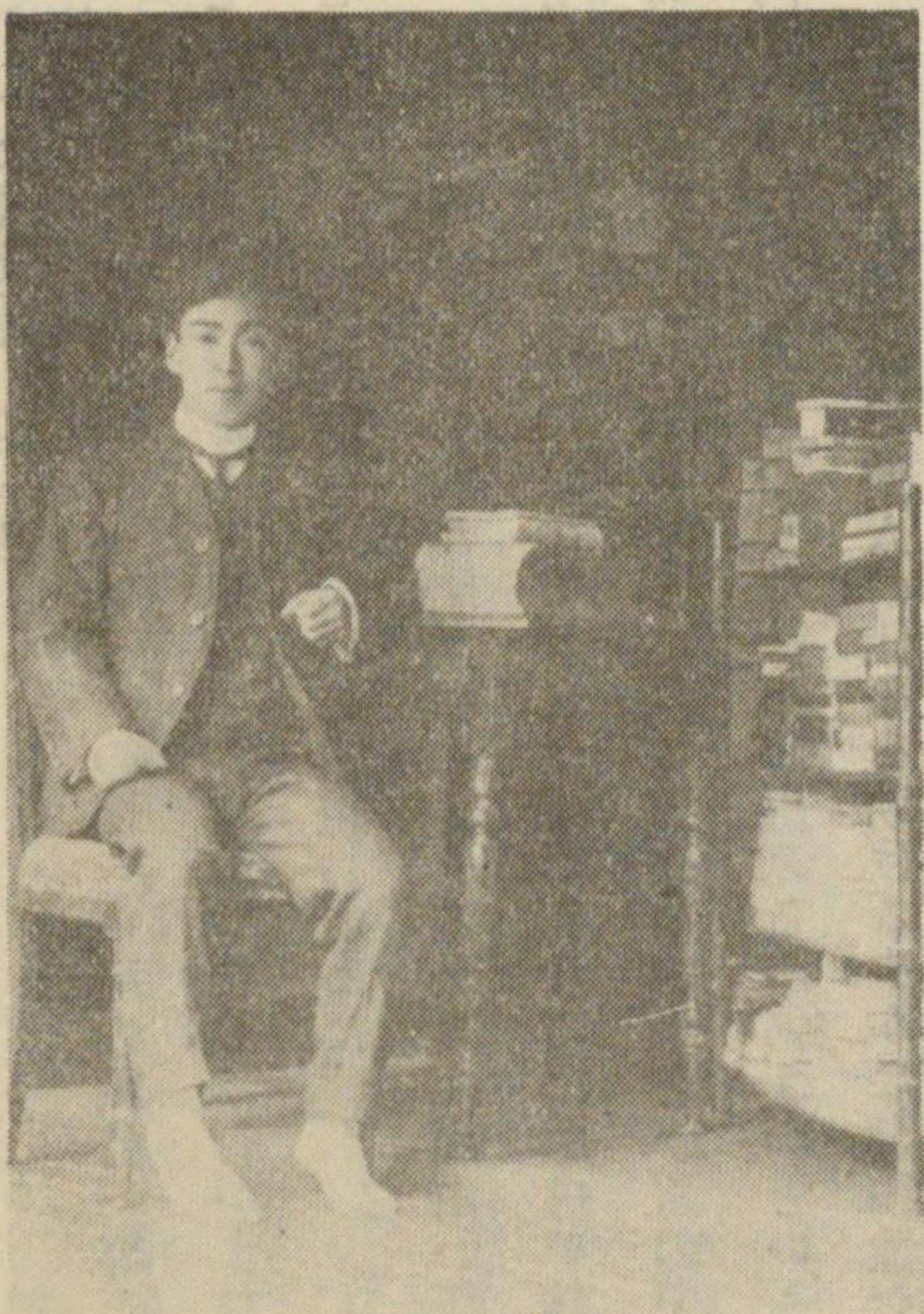


峯の仕事を手付けてゐた、伊井は晩年フアツシオ的傾向を最も早く持つた俳優であつたが、當時は、新派の統率者の一人で、演劇革命家らしい抱負を持つた男であつた。小山内の演劇革命の技術的刺戟は確かに伊井に負ふところがあつた。

然し、小山内は、

この頃すでに、新派に對して絶望してゐた。そして新しい時代の演劇運動は、新しい文學運動の上に打ち建

(第三)



明治四十年、二十五歳の著者

てられなければならぬと主張してゐた。「新思潮」の仕事はいはゞ、その運動への準備でもあつたらう。「新思潮」の出资日期は、長谷川しづの親戚にあたる

木場邊の旦那で、雑誌の編輯所は大川端に近い濱町河岸の、ちよつと妾宅のやうな二階建てで、潮文閣と呼んでゐた。小山内は、この頃よく久留米がすりの對の着物を着て、少し猫背のやうな恰好をしてゐた。聰明で好學の青年であつたが、何處か不健康さをもつてゐるやうな印象を與へた。時々熱して來ると、口ばたから唾液を垂れるやうな癖があつた。

「新思潮」は思ひきつて高踏的な雑誌で、表紙は、當時としては珍しいマール紙で、中はラフ紙を使つてゐた。表紙にはギリシヤ神話を題材にした名畫を寫眞版にして出してゐた。此頃は自然主義全盛期で、凡てが、簡素で直情的で非幻想的である事を傾向としてゐる時に、こんな雑誌をつくるといふ事は、それ自身に、何か當時の日本文壇に對する一つの抗議的意義が示されてゐる様に感ぜられた。この雑誌には北原白秋、吉田白甲、草野紫二、佐藤迷羊、長谷川時雨女などが翻譯または創作を發表してゐた。小山内自身は、チエホフの長篇小説「決闘」を連載してゐた。また、この雑誌には野口米次郎の英詩が載つたり、岩野泡鳴の「新體詩史」が連載されたりした。私はこの雑誌の呼物の一つであつたイブセン會の記事を受け持たされた。私は、イブセン會ではその月の研究作物を讀み、簡単な梗概を書き、會の當日には書記役をつとめさせられた。これは私にとつては最も好意ある仕事であつたし、後年戯曲制作に興味を持たせられた動機ともなつたものである。

私は、イブセン會で柳田國男、田山花袋、岩野泡鳴、正宗白鳥その他の文壇諸先輩に逢つたが、これが日本の文學者といふものゝ集團生活をほんとうに見せられた最初だといつていい。私は文學者といふものは、何處か親しみの持てない人種だとその時思つたが、今日でもこの感情を清算し得ないで



る。これは、單にブルジョア・リアリストとしての自然主義文學者ばかりではなく、長い時代を通じて、日本文學者の一つの屬性であるやうに私には感ぜられる。自然及び社會に對する盲目性といつていゝか、不謙遜さといつていゝか、私には適當な言葉を見つけ出せない。

社會的にいへば、この年は足尾、別子等に大暴動の起つた年であり、幸徳秋水が、アメリカに於ける亡命アナルヒストの影響を受けて急激な直接行動論者となつて歸つたがために、日本の社會運動に分裂對立の行はれた時であつた。この事は、後の小ブルジョアのインテリゲンツィアのあらゆる社會活動に一つの傾向を與へ、従つて進歩的文學者に對しても、直接間接にその影響を與へてゐた。

#### 明治四十一年（一九〇八）二十六歳

私は「新思潮」の記者として働いてゐたが、この雑誌は三月で廢刊になつてしまつた。私は再び世間の中に放り出されてしまつた。私は何か堅いもので向ふづらを撲ぐられたやうな感じがした。生活を得るためには私は何かをしなければならなかつた。そのためには、物を書いて行くより仕方がなかつた。私はこれまで餘り重要視しなかつた文學の世界へだん／＼とひきずりこまれて行つた。私は貧乏をしながら一生懸命に讀書をした。私はこの頃、ドストイェフスキイの「罪と罰」の英譯書を手にして巢鴨監獄の草原で讀み耽つてゐたのを記憶してゐる。この頃は二葉亭四迷の最もよく働いてゐた時代で、私は彼の譯したゴーリキーの「二狂人」ゴーゴリの「狂人日記」アンドレイエフの「血笑記」などを愛讀してゐた。殊に「血笑記」は私を最も強く刺戟したものの一つであつた。一體に文學といふものをほんとうに尊重するやうに私を教育して呉れたものは、やはりロシヤ文學であつた。他の國の文學は私達に喜びを與へたことはあつても、それは單に娛樂物としてゞあつたが、ロシヤ文學は私達に生活の意義といふことを投げつけて呉れた。他の國の文學では、森鷗外によつて、シュニツレル、エデキント、ヘルマン・バル等が翻譯されてゐた。飯田旗軒のゾラの「巴里」の發賣を禁ぜられたのもこの年であつた。この時代の森鷗外の文壇的功績は記憶されなければならない。彼は日本に於ける自然主義文學の勃興期には大して活躍してゐなかつたが、自然主義が爛熟期に入り、自家中毒を起しかけてゐる時に、これに刺戟を與へ、この運動を演劇活動の上に移行させたものは彼であつた。日本に於ける舞臺上の自然主義運動は森鷗外の持つてゐた一種の推進力によつて強められたものであつた。

この年の夏頃、島村抱月の好意により、私は早稲田文學社編輯の文藝百科辭典の編輯員の一人となつた。この編輯には、相馬御風、楠山正雄、生方敏郎、服部嘉香等がゐるが、楠山はその編輯主任で



あつた。楠山はインツイクロビデリストの一つのタイプで、毎日コツ／＼カードの整理に没頭してゐた。私はこゝでも殆んど仕事といふ仕事はせず暮した。

私はこの年、生田葵山の「都會」の公判を傍聴したのを記憶してゐる。生田葵山は比較的早く生活力を失つたが、彼は硯友社末期からの寫實主義者であつた。彼が二月の文藝俱樂部に寄稿した小説「都會」が姦通事件を取扱つたもので、それが風俗を壞亂するといふ理由で起訴されたものであつた。檢事は「姦通は實在する事實である、然し、事實であるからといつて、それを是認し、稱揚するやうな態度は許し難いことである。」と論告し、辯護士は、「文學は社會の反映である。社會が濁つてゐる時には、文學もまたそれを反映するのが當然である。文學はその社會を描く事によつて、寧ろその社會に反省を與へるものである。」といつて辯護したが、この裁判では生田葵山は罰金刑に處されたやうである。ゾラの「巴里」といひ、この作物といひ、日本の檢閲及び裁判が文學の内容に立入つて干渉の手を伸べた例として劃時代的なものであつた。

私は、この年「太平洋」(文庫)「暖國」(新思潮)味(文庫)酒屋(早稻田文學)故郷の人(趣味)おそのと貞吉(趣味)撮影(文章世界)二人の世界(新潮)等の短篇小説を發表してゐる。

この年の六月には、神田錦輝館で行はれた、山口孤劍の出獄歡迎會散會後のデモンストレーションで、民衆と官憲の衝突が行はれてゐる。この事件は赤旗事件として大きなショックをこの時代の青年達に與へた。山口は小肥りのした雄辯家で、一見鬪争力に満ちた青年であつたが、彼は天逝した。

私はこの年第一の女兒千代子を擧げてゐる。

### 明治四十二年(一九〇九) 二十七歳

この年は日本に於ける舞臺上の自然主義運動が意識的に初められた最初の年であつた。

一體、日本に於ける舞臺上のリアリズムの運動は、明治二十一年(一八八八年)の自由民權の思想に刺戟されて中江兆民、栗原亮一等を顧問として角藤定憲一派によつて初められた新派劇、明治三十九年(一九〇六)大隈重信を會長として、坪内博士、伊原青々園、東儀鐵笛、島村抱月等によつて初められた文藝協會等を擧げることが出来るが、前者は政治的鬪争力を失つたのと、藝術的創造力の缺乏のため、早くから社會的進歩性を失つてしまつてゐるし、後者は、統率者の趣味性のために、最初から充分の進歩性を持ち得ないでゐた。然し、この年に到つて初めて、意識的な演劇上の自然主義運動が芽生えて來てゐる。それは、文學上の自然主義運動の繼續としてではなく、寧ろそれに對する對立的、修正的態度で發生してゐる。その機運をつくつたものは、森鷗外のドイツ自然主義戯曲



の翻譯、藤澤淺次郎によつて初められた俳優養成所の創立、若き戯曲作家の輩出等であつた。

俳優養成所は市川高麗藏(幸四郎)、巖谷小波、小山内薫を顧問として、藤澤淺次郎を校長として初められたものであつた。この年の四月に俳優養成所は、小山内薫の舞臺監督でゲオルヒ・エンゲルの「革命の鐘」をやつたが、この芝居は私達青年をひどく刺戟したものであつた。この芝居の最後の幕は靴工の店で、そのキャタストロフはハウプトマンの「織匠」にひどく似てゐた、恐く産業革命時代を取扱つた作物ではなかつたかと思ふ。同じ年の十一月に自由劇場が初めて創立されてゐる。小山内薫及左團次によつて初められた自由劇場の創立は、單に舞臺上の自然主義運動であつた許りでなく、日本文學が自然主義の爛熟頽廢により自家中毒を起しかけてゐたものに對して施された有効な注射の様な性質をもつてゐた。自由劇場は當時の自然主義文學の指導者達を顧問としてゐたが、劇場の周圍に集つてゐた青年作家達や又當時の觀客の大部分は、寧ろ文學上の自然主義に對して對立的態度をとつてゐた。此時代の自然主義的文學は、その當時の社會欲求を殆んど反映し得なくなつてゐた。私達のある者は、この時代の自然主義文學を「老いたる壓政者」と名づけてゐた。ネオ・ローマンチズムの運動や人道主義文學運動は若き時代を代表して興りかけてゐた。それ等の欲求を取りあげて起つたのは自由劇場であつた。だから自由劇場は文學上の自然主義の運動を單純に繼續したものでなく、むしろ、その反對の力、即ちネオ・ローマンチズムの運動や、人道主義運動に刺戟され、支持されて促進されたものと見ることが出来る。

自由劇場の周圍にゐた若き作家を挙げると、吉井、本下、長田、谷崎(潤)等で、私もまたその一人であつた。また觀客の大部分は學生層であつた。小山内薫が自由劇場第一回公演に際して、舞臺の上から觀衆に對して與へた挨拶の言葉に、三階の觀客を尊重するやうな調子があつたといつて、ある自然主義作家が、小山内は「きざ」であるとか、「學生に阿ねるものだ」といつたのを私は聞いた。然し、この事は當時二つの對立した時代の存在してゐたことを物語るものである。小山内はブルジョア自由主義として、劇場ピオロギストとして三階の大衆に呼びかけることは當然なことであつたらう。

私はこの年「墓」(新聲)「乳」(秀才文壇)「行雄さんの日記」(新文林)「午後の出來事」(秀才文壇)「二人の旅人」(現代)「朝の港」(秀才文壇)「盲目の子」(新潮)「十日の夜」(秀才文壇)等「記念會の前夜」(早稻田文學)「暗室」(趣味)の二つの戯曲を發表してゐる。

明治四十三年(一九一〇)二十八歳



私は文藝百科辭典の完成後、早稲田學報の仕事を手傳ふことになつた。文藝百科辭典では、私はロシア、ポーランド、ペルシャ等の文學の解説梗概を書いたほか、何等技術的な仕事をなし得なかつた。

早稲田大學學報といふのは、早稲田大學校友會の機關雜誌で最も興味のない種類の仕事であつた。然し、私は此仕事をしてゐる内に、近代日本教育の企業的方面がはつきり解つてひどく面白く感じた。この學校は、最初は私塾的な性質を帯びたものであり、自由民權主義的教育を施す事を校旨としたものであつたが、此頃のこの學校は、全く企業會社化してゐた、そしてその企業會社が「大學」といふ看板によつて飾られてゐた。私は、學長や幹事が低脳な富豪の校友の前に、びよこ／＼頭を下げ、時としては草履まで揃へてやつてゐる光景を時々見せつけられたものであつた。この大學は、後で度々學校騒動を起してゐるが、その理由の大部分はこの企業を中心とした利益の爭奪戦であつたことは周知の事實である。勿論、私もそこに學んだものであり、二三の優秀な教師から得た精神的恩恵に對する感謝の念は今でも決して失つてはゐない。

私は此頃、度々大隈總長の談話筆記を命ぜられたことがあつた。大隈重信はもう八十歳に近い老年であつたが、元氣で、よく談話をした。談話をすることに熱情を感じるといふ風であつた。大隈は若い時代の容貌を見ると高慢、冷酷、野望といったやうな印象を受けるが、この頃の彼の容貌にはそのやうな要素は拭ひさつたやうに失せて、濃厚な一個の田舎爺のやうな印象を私に與へた。この頃の彼は失意の時代であつたが、大した不平もなく、また鬪争力も持つてゐなかつたやうだ。勿論、私達の見えた時代の彼は藩閥及び軍閥政治と完全に妥協してしまつてゐた時代であつた。彼の周圍を見てみると私達は人間は何んなにして、自分達の利益を保持し、發展させるために「偶像」をつくりあげて行くものかといふことが理解される。由來早稲田といふところは、大小の「偶像」をつくらなければ承知の出来ないところである。私はこの頃大隈伯が仁丹をしきりに嚙んでゐたのを見たことがある。

この頃、早稲田大學に橋靜二といふ男がゐた。この男は、後で高田早苗が文部大臣となつた時、秘書官になつた男であつたが、早稲田大學が企業會社になつてしまつてゐる時、「大學の自由」を唱導し、大學の「科學的經營法」を研究してゐた。私は内心彼の空想を笑つてゐたが、仕事に對する熱情と事務の才能には感心させられた、彼は後年アメリカでひどい貧窮の内に客死してしまつた。

この年の三月に、私は雜司谷の並木裏にひっこして來た羽中田といふ男に逢つてゐる。この人は外國語學校露語科を出て、暫くロシアのペテルブルグに留學して歸つた男で、ひどく熱情的な男であつた。この時は肺患を疾つてゐたが、並木裏の日當りのいい場所で小じんまりとした家を建て、養鶏



などをしてゐた。彼はロシア文學に對して深い興味をもつてゐて、クイブリンの「ヤーマ」の話やブンドレイエフの「人の一生」の話をして呉れた。「ヤーマ」といふロシア文字を机の上に書いては消し、書いては消してゐた。また彼は「人の一生」の初演の時、觀客の拍手で舞臺の上に表はれて一場の挨拶をした、若きアンドレイエフの印象などを病的な熱情さで語つて呉れた。

「日本ではロシアをたゞ文學や演劇の盛んな國のやうに思つてゐるが、然んなものぢやありませんよ。ロシア人は國民としてほんとうに悩んでゐます、今にきつとロシアは世界を驚かす時代が來ます。單に文學の問題ぢやありませんよ。」

と、羽中田は私の顔をぢつと見て言つた。私はこの男の強い印象を今でも忘れることが出來ない。然し、彼は何も仕事をせずに死んでしまつた。或はこの男が生きてゐたら、二葉亭以上の仕事をしてゐたかも知れない。

私は、この年に左のやうな創作を發表してゐる。

「父の友達」(新文林)「少年とピストル」(早稻田文學)「フレツマ」(秀才文壇)「第一の曉」(世界文藝)「海峽の秋」(早稻田文學)「最初の宿」(秀才文壇)「坂下の家」(三田文學)「トマトオの畑」(文章世界)「權三の死」(劇と詩)等

また、私達はこの年の十月から戯曲と詩だけの専門雑誌「劇と詩」を發行してゐる。この雑誌の執筆者は、人見東明、三木露風、三富朽葉、今井白葉、佐藤惣之助、福田夕咲、福士幸次郎等の詩人と楠山正雄、池田大伍、河野桐谷、中谷徳太郎等の戯曲作家であつた。詩人の連中はこの頃自由詩の運動を起してゐたが、これが日本に於ける自由詩運動の最初のものであつた。

このやうに、二三年間に、日本文學にとつては益々豊饒な土地が開拓されたが、私達は、同時にこの年に、幸徳秋水以下二十六名の思想家達が、大逆事件として檢擧されてゐるといふ社會的事實を忘れることが出來ない。この事によつても、私達は日本に於ける自然主義文學は社會の何れの側に於いて發達してゐたかを知ることが出來るであらう。この年日韓併合が行はれてゐる。

#### 明治四十四年(一九一一)二十九歳

この年の一月に、幸徳秋水以下二十四名に對する判決が確定し、幸徳以下十二名が死刑に處され、他は無期懲役に處された。新聞は毎日この記事で埋められてゐた。雜司谷の墓地にも、引取人のない處刑者が埋葬された。私はこの頃、毎日のやうに悪夢に襲はれた。

五月に、文藝協會によつてシェイクスピアのハムレットが帝劇で演ぜられた。土肥のハムレット



須磨子のオフィリア、東儀の墓掘り、上山浦路の王妃であつた。土肥のハムレットは、日本に於ける最初のレコードをつくつたものといはれたものであつた。

六月には、自由劇場は第四回を有樂座で公演した。この時は、メーテルリンクの「奇蹟」の他に三人の若い作家の創作を演じたので世間の注目をひいた。それは長田秀雄の「歡樂の鬼」吉井勇の「河内屋與兵衛」及び秋田の「第一の曉」であつた。この三つの戯曲の内で、自然主義的なものは、「歡樂の鬼」だけで、「河内屋與兵衛」は享樂主義的なもので、手法はローマンテックなものであり「第一の曉」は封建主義に對する呪詛的思想を描いたもので、これまたローマンテックなものであつた。然し三人とも、當時の自然主義文學に對して反抗的態度をとつてゐた點では共通なものであつた。

八月に、私は烈しいインフルエンザの後で肋膜炎を冒され、軽い發熱と胸部の疼痛に毎日苦しめられた。私は自分では、そんなに大事に思はなかつたが、親切な友人達にすゝめられて十月、十一月を箱根塔の澤で靜養することにした。私は長谷川しぐれ女の好意で、彼女のお母さんの計營してゐられる新玉の湯に投宿することになった。宿は早川から橋を渡つて間もなく、右側の家であつた。最初の夜は溪流の音でよく安眠出来なかつたが、二三日の内に、入浴後よく眠れるやうになつた。然し時々「死」の恐怖に襲はれて、安眠をしない時もあった。

長谷川しぐれ女は、その頃の若い同伴者であつた中谷徳太郎とよく箱根へ遊びに來たので、私もよく仲間入りをして遊んだ。中谷は、木場の生れで鋭い感覺を持つた男であつたが、どこか世紀末的な頹廢性をもつてゐた。その頃しぐれ女は、貧乏人や弱者に對する同情者であつたが、趣味は封建主義的で、従つて、文學の理解の領野が可なり狭い女性であつた。彼女は同伴者の中谷を駄々子をなだめるやうにあしらつてゐた。二人は時々喧嘩をしてゐた。

私は、毎日幾度も幾度も入浴しては、讀書に日を送つた。私は殆んど執筆を廢した。たゞ二月の間に「盲兒の幻想」といふ少年時代に逢つた不幸な盲目の子の幻想を描いた戯曲を脱稿したきりであつた。それでも、私は發病前に幸徳事件を反映したやうな戯曲「森林と犠牲」(劇と詩)のほか「池の邊」(文章世界)「市のマホメット」(スバル)「月光と貴族」(太陽)の三篇の戯曲を發表してゐる。

私は十二月の初めに見ちがへるほど肥つて東京へ歸つた。

### 大正元年(一九一二年) 三十歳

日本に於ける自然主義の運動は、文學の方面では全く頹廢期に達してゐた、そして若い時代は、それへの反動として、ローマンチズム、理想主義、人道主義の形として現はれて來てゐる。「スバル」



「白樺」「劇と詩」の同人達の中から出た若い作家達は、やうやく日本文壇の中堅的な位置を占めるやうになつた。然し、これ等の作家は、自然主義への反動といふ點だけで一致してゐたが、イデオロギー的には決して一致してはゐなかつた。そして、やがて分裂して、後の人道主義的傾向に統一されたと見ることが出来る。

自由劇場は第五回にハウプトマンの「寂しき人々」を上演して相當の効果を擧げたが今年の四月に第六回目をメーテルリンクの「タンターデルの死」、若き作家萱野二十一の「道成寺」によつてあけたが、これは甚しい失敗であつた。「道成寺」はロマンティックな作物で、ひどく難解なものであつた。自由劇場は、この年には經濟的に全く行きづまりの状態に達してゐた。そして正確な意味での自由劇場はこの年で終りを告げてゐる。この無形劇場の失敗の理由は、劇場自身が俳優を持たなかつたところにあつたと思ふ。劇場が職業的俳優を自由に動員出来なかつたために、小山内の計畫はいつでも俳優の都合によつて破壊されて行つた。然し、自由劇場の運動は、多くの劇場人や作家を刺戟した。近代劇や土曜劇場などの生れたのもそれであり、若い劇作家の輩出したのもそれによるのであつた。この年、文藝協會はズーデルマンの「故郷」やバーナード・ショオの「運命の人」などを演じてゐるが、この頃から文藝協會の中に思想對立と愛欲の問題で、分裂の徴候が現はれて來てゐる。ウイ

リアム・アーチャーが來朝したのもこの年であつた。

七月に明治天皇が崩御された。九月に御大葬が行はれた。乃木大将夫妻の殉死の報が異状な響をもつて市内に報道されてゐる。殉死に關する二三の批判がなされたが、正しい社會的、倫理的批判はとう／＼なされずに終つた。然し、この事件は、とにかく日本の社會に對して大きな激動を與へた。改元。大正元年となる。

この年の十二月に、小山内薫は演劇見學のためにヨーロッパに向つて出發した。この頃小山内は、自由劇場の失敗によつて苦汗を味つてゐた。彼は再擧を約しながら、リツクサツクを背負ひ、遠征兵士のやうな恰好をして新橋驛を立つた。私達は新橋驛で小山内薫のために萬歳を叫んだ。小山内がモスクワ藝術座でスタニスラウスキイに逢つたのも、この旅行中であつた。

私はこの年に「林檎園」(早稻田文學)「舊藩守と火事」(同)「十字架を負へるシモン」(讀賣)「鳩」(讀賣連載)「良太の春」(家庭の華)「星の下」(太陽)等の諸作を發表してゐる。

この年六月、私は第二の女兒あや子を擧げた。

大正二年(一九一三)三十一歳



この年、島村抱月と松井須磨子の事件が、私達の生活に大きな激動を興へた。島村抱月は、坪内博士を助けて文藝協會を起した創立者の一人であつたが、松井須磨子といふ女優のために、坪内博士及び他同人との間に感情の龜裂を生じてゐた。思想上の對立といふこともあつたであらうが、根本的には、人間の制御し難い感情の一つである愛欲の問題が、その對立を強めて行つたのであらう。島村抱月は須磨子の擁護者として、だん／＼孤立するやうな状態に押しつめられて來てゐた。島村はとうとうそれに耐へきれなくなつて、古い家庭から脱け出て、飄然として旅に出てしまつた。教授の職も協會の仕事も放棄してしまつた。島村は性格の上からいへば、紳士的で、やゝ冷靜すぎるといはれた人物であつたが、その人がこのやうに思ひきつた決心をしたといふので、彼の同情者や彼の教授を受けた若い作家達は、一勢に起つて彼を支持した。殊に、若い作家達は、俗論黨に對する正義派のやうな態度で、事情を調査するための査問會を、江戸川の清風亭に開いたことがある。同日、協會側もまた事情を聲明するための會合を開いた。この二つの會合で、早稻田系統の作家、批評家其他の人々は殆んど完全に二分された觀があつた。私達は勿論、島村抱月を支持する側に立つた。然し、この事件は、決して單純に俗論、正義論といつたやうなもので解決されるものではなかつた。結極、島村抱月と松井須磨子との關係を是認し、二人の藝術的活動を助けて行かうといふ人々が集つて一つの劇壇を組織した。これが即ち藝術座であつた。

私はこの年の春、演藝畫報に「坪内博士のために悲しむ」といふ論文を掲げて、文藝協會に挑戦した。それは文藝協會がマイエルフエルスタアの「アルト・ハイデルベルヒ」(「思ひ出」)を上演した時の態度の無責任を非難したのであつたが、その本旨は、坪内博士を圍む人々に對する挑戦であつた。このやうにして、この年の九月に藝術座は松井須磨子、澤田正二郎、鎌野誠一、中井哲、倉橋仙太郎等を俳優として、中村吉藏以下七名の幹事によつて結成された。私もまた幹事の一人としてそれに加つた。第一回の出物はメーテルリンクの「モンナ・ヴァナ」及び同じ作家の「内部」であつた。

藝術座の第一回の興行は、輿論がこの團體に向けられてゐたがために、可なりな成功を得た。然しこの演劇活動は、私達二三の者にとつては生活に對する悪い誘惑であつた。或る者は作家生活をやめて俳優となつたり、あるものは劇團の仕事に没頭したがために、生活の道を失つたりした。私自身もまた、その誘惑に負けた一人であつた。根柢のない、浮薄な熱情にかられて、私は書齋生活を出て劇團と共に阪神地方の興行に参加した。そのために、私は一家を支ふるだけの報酬も興へられず、創作もし得ず旅をつゞけた。このやうな、生活に對する抜け難い惰性は、長く後までも私を支配して私の創作力を滅殺して行つた。



また旅行中に私を最も苦しめたのも松井須磨子といふ女性の性格であつた。この女性は全く社會的訓練をもつてゐない女性であつた。強い表現力を持つてはゐるが、殆んど原始人のやうな我儘な女性で、事毎に若い男女の俳優と争つてゐた。若い俳優達は、その苦情を多くの場合、私のところへ持つて來た。私は毎日そのために苦しめられた。つるに、須磨子と若い男女の俳優達の間の對立は大阪で勃發した。この事件は、若い俳優達が芝居の終演後、牡蠣を喰べに行かうとしたのを須磨子が禁止したといふ小さな出來事からであつた。男女の俳優は夜中に起ち上つて、島村抱月に對して抗議したのであつた。これが所謂牡蠣船事件といはれるものであつた。私はこの旅行で、演劇の事業の困難なものであることを痛感した、然し、それでも、演劇に對する熱情を失つてはゐなかつた。

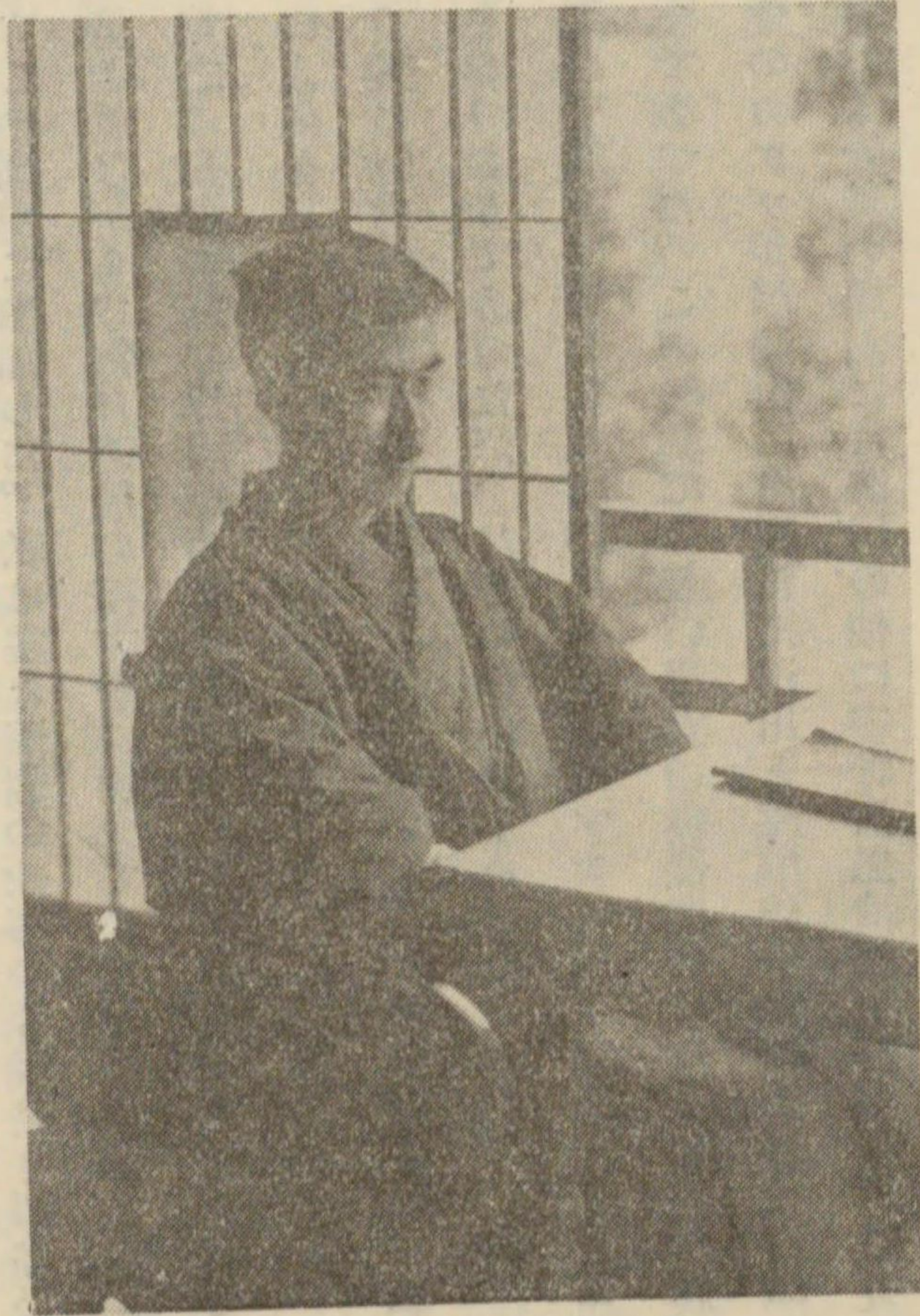
私は次第に創作力を失つて行つた。私は、この年、「長官と狂女」(新潮)「解放の喜劇」(早稻田文學)「死の傍觀者」(文章世界)「太鼓の死」(新潮)「飢渴」(文章世界)等の諸作を發表してゐる。然し、十月以後には何も書き得なかつた。

大正三年(一九一四)三十二歳

三月、トルストイの「復活」の稽古中に、藝術座の内部に異變が起つた。それは松井須磨子と澤田

正二郎とが衝突して、澤田は四五人の男女俳優と共に藝術座を脱退したことであつた。私は澤田等の主張を支持した關係上、彼等と共に藝術座を脱退してしまつた。私は島村抱月とは師弟の關係があつたし、彼に對する信頼の念を失つてゐるのではなかつたが、須磨子に對する人間としての反感からそれを決行したのであつた。

(第四)



大正二年、三十歳の著者

表現力の強い男であつた。彼は性格的には須磨子によく似てゐた。この同じく表現力の強

は、病的に近い程い二人の人間が、少しも社會的訓練を受けずに、同じ仕事の檻の中に投げ込まれたのであつた。鬭争しないのが不思議な位である。藝術座は武田正憲、横川唯治その他の俳優を入れて、三月に帝國劇



場で「復活」を上演した。この公演は経済的には非常な成功であった。

一方、藝術座を出た澤田、田中（介二）倉橋及び渡瀬淳子以下の俳優達は別に劇團美術劇場を組織した。私は舞臺監督としてこの團體に参加した。私は益々演劇の仕事から脱けきれない人間になつてゐた。私は生活の不安に脅されながら、毎日芝居の稽古場に通つてゐた。この頃、私達の團體には、楠山正雄、宇野浩二、鍋井克之、長瀬義郎、片岡鐵兵などが加つて來てゐた。宇野は、その頃内氣な、然しいつでも横から冷かに人生を見てゐるやうな青年であつた。片岡は、この頃二十一二歳で、三田の帽子を横丁にかぶつた、美しい少年であつた。彼は美術劇場の第一回に上演された私の「埋れた春」の藤之助といふ少年に扮するつもりであつたが、なぜか途中でやめてしまつた。

美術劇場は、四月に有樂座で旗上げをした。出物はハウプトマンの「平和祭」田中介二の「博多小女郎波枕」及び「埋れた春」であつた。この興業では若い男女の俳優達は可なり闘志に燃えてゐたが、其稽古中に彼等の間に戀愛のカツプルが澤山に出來た。澤田と渡瀬淳子、鎌野と大村鏡子などがそれであつた。殊に渡瀬淳子といふ女性の周圍には澤田の他に宇野浩二、三上於菟吉、日夏耽之助、坂本紅蓮洞等がゐたが、その間の事情は、宇野浩二が度々創作の形で發表してゐる。淳子は、新國劇時代に長く澤田と同棲し、正太郎といふ子供まで擧げてゐたが、澤田の死の前には色々な事情から離別さ

れて、澤田の死に際して、その棺側にも近寄れないやうな運命に置かれてゐた。私はこの頃の若い男女の間の複雑な交渉を考へる時、いつでも、「藝術は性慾の變形なり」といふ俗説を聯想する。

私は澤田のことを考へると、この時代に彼と行動を共にした倉橋仙太郎といふ俳優を思ひ出す。彼は大阪の男で、珍しいユーモリストであつた。彼が舞臺へ出ると、たゞ出ただけで滑稽な感じを人に與へた。倉橋は澤田の不遇時代に熱心に彼を助けてゐたが途中胸を痛めて全く演劇の世界からひつこんでしまつた。その後の彼は性格も一變して宗教的なユートピア主義者になつて、大阪の近郊に共同住宅を造つたり、水平社運動を助けたりしてゐた、私は一度寶塚への旅行中に、この男と會つたことがあるが、落ちついた感じを與へた。澤田は死の直前まで、この男を経済的に助けてゐたといふことを人から聞いた。

この興業後、美術劇場の俳優達は榎本清の新時代劇と合同して、有樂座に久米正雄の「牛乳屋の兄弟」ハウプトマンの「僧房の夢」を上演した。「牛乳屋」の兄弟は、多少シュニード・リアリズムの要素を持つたものであつたが、刺戟的な要素があつたので或種類の効果を擧げた。私はこの芝居にも舞臺監督の一人として參加した。

久米正雄や山本有三は、この頃絶えず私達と往復をした。久米も山本も大學の正帽を冠つてゐたや



うに記憶する。山本は高等學校時代に「穴」といふ鑛山を題材とした脚本を書いて、藤澤淺次郎の創作試演會時代に、小山内薫の監督で上演したことがあるが、この頃は殆ど創作をせず新派の樂屋入りをしてゐた。大學生とは思へないほどの苦勞人で、もう人生を見つくしたやうな顔をしてゐた。絶えずおつかぶせるやうに、正面から物を言ひ出す癖があつた。山本は大學から學んだより人生から學んだやうな男だつた。久米は山本に較べると大學生らしい男であつた。絶えず人と話をしながらペンで物を書く癖があつたが、彼はその間に何かプランをたてゝゐた。彼のたてたプランは別に新しいものではないが、大抵可能性のあるものであつた。彼はその點でもリアリストらしい性格の所有者であつた。久米も山本も、早く人生の苦痛を味つた男達だけに、社會的に進歩性をもつた行方をするだらうと、ある友人と語つたことがあつたが、二人ともブルジョア・チャーナリズム的な進み方をしたのは私達にとつてはやゝ意外であつた。然し、ブルジョアの觀點からすれば、日本の文學を、ブルジョア・チャトナリズムのために、立派に商品化させたのは彼等の功績であつたのであらう。

十一月に、新時代劇は北海道巡業に出ることになつた。これがまた私の生活にとつて大きな誘惑であつた。私はこの頃芝居の生活に對して可なり疑ひを懷いて、出来るならば再び書齋に歸つて、讀書と創作の生活に安住しようと希望してゐたが、藝術座時代からの俳優への友情關係は、何うしてもそれを決行し得なくさせてゐた。私は、またする／＼に北海道の旅へ出た。

東京は落葉をしたばかりであつたのに、東北地方はもう眞冬のやうな寒さであつた。私は芝居の衣裳に使ふ厚い外套（これはロシア風の綿の入つたシュニールパであつた。）を着て、熊の仔のやうな恰好をして一行に加つた。この一行には今の映畫監督をしてゐる村田實もゐたやうに記憶する。榎本清も澤田正二郎もその中にゐた。私は自分の生れた故郷の人々に逢はないやうにして、連絡船に乗り込んだ。新しい連絡ホームの出来ない時で、私達は小さなランチで本船に送られたが、その途中で俳優達がひどく船酔ひをして、へどを吐いたりした。暗綠色の波の上を走るランチの中では、俳優達は蒼白な顔をしてだまつてゐた。

北海道の土地はもう眞白に雪に包まれてゐた。私達は小樽、札幌、釧路、帯廣、池田、函館の順序で興業をして歩いた。私達は自分達の無智から、芝居の中にだにのやうに喰ひついてゐる封建遺物である浮浪漢に威嚇されてひどい目にあつたこともある。興業師の無責任から、一週間も十日も同じ宿にトヤを食つたこともあつた。給金不拂ひのために、二三の俳優にゆすられたこともあつた。私はこれらの經驗を決して無意味なものとは思はなかつた。私は自分が人生を甘く見てゐたことの良い報酬だと思つた。私は再び人生に立歸ることが出来た。



日本はこの年世界大戦に参加してゐる。(この項終り)

### Ⅲ 苦難と觀念主義時代

(大正四年——大正六年)

靈のダブレットの上に、われの爾に語るすべてを光のインキをもて書け。そして、もしそれが爾に出来ぬならば、その時爾の心の中からインキを造れ、もしそれも出来ぬならば、その時はわれの道に流した赤きインキをもて書け。實にこれは他のすべてのものより我に價高きものである、なぜなれば、この光こそ永久に續くべきものであるから——バツハ・ウーラー——

大正四年(一九一五) 三十三歳

私はこの年の日記の中に、ペルシャの豫言者の言葉を引照してゐる。この時代に私は色々な、内外的の苦難に遭遇した。そして、その苦難に處する道を科學の力によらずに、觀念的思索の上に求めようとした。私はトルストイ、スウェデンボルグ、ストリンダベルヒ、老子、ウパニシヤド、バツハ・ウーラー等の後を追うて歩いてゐた。私はこの時代を觀念主義時代と呼んでゐる。

私はこの年の二月に、新時代劇の一行と別れて、三月目でへとくになつて東京へ歸つて來た。雪の中の三月の生活から逃れて春の日光に輝いてゐる關東の平野を眺めた時の喜びは、牢獄から出て來



た人の喜びに近いものであつた。私は汽車の窓から過ぎ去つて行く野外の風景を眺めながら、北海道を舞臺とした「緑の野」といふ戯曲の着想などをしてゐた。

私は東京へ着いて翌日から、生活費を調達しなければならなかつた。私の家庭はこの三月、嚴格にいへば、半年の間殆んど定収入なしに暮してゐた。二人の私の兒は、餌をくはへて歸る親鳥を待つやうに私を待つてゐた。

私はこの旅行中に名目上ではあつたが數千圓の興業上の借財を背負うて歸つたが、實際上の責任者が責任を回避したために、殆んど毎日のやうに債權者の督促に苦しめられた。私は自分の愚劣を嘲り、人生の冷酷を怒つた。もし、この時代に二三の友人が私を激励し、私の生活に刺戟を與へて呉れなかつたら、私は或はある機會に自殺を遂げてゐたかも知れなかつた。

ワシリー・エロシエンコの私の前に現はれたのはこの時であつた。エロシエンコは、小ロシア、クールクス生れの盲目の青年であつたが、熱心なエスペランティストであつた。私は全く人生に絶望して極端にニヒリステックになつてゐた時、エロシエンコは盲人でありながら、世界のエスペラント運動のために熱心に働いてゐるのを知つた。私はすぐにエスペラントの勉強を初めた。私は三月ほどでほぼこの言葉を會得した。私はこの言葉を知つたお蔭で、人生を別な眼で見ることが出來た。そして澤

山の仕事は私の前に現はれて來た。

私はこゝで、日本に於けるエスペラント運動について一つの事實を記録して置く必要を感じる。日本のエスペラント運動は、黒板勝美、中村精男、小坂猶二、千布、大杉（榮）等の諸君によつて創められ進展させられたものであつたが、この運動の進展に對して長谷川二葉亭の功績は忘れてはならないものであつた。二葉亭は最も早く「世界語」といふパンフレット形の教科書を出版してゐた。この運動は、日露戦争後ロシアのトルストイヤンによつて日本に呼びかけられたものであつた。然しその呼びかけを日本に傳へた長谷川二葉亭自身は、その當時、既に國權主義者であり、征服主義的アジア主義者であつたことは色々な文献で私達は知ることが出來た。然し、この矛盾した過程を経てゐながら、日本に傳へられたエスペラント運動は、後では完全に日本の進歩的階級の手に渡されてゐることも興味あることである。

私はこの頃エロシエンコの関係で、バハイのアグネス・アレクサンダー女史に逢つてゐる。この女は有名なアメリカの歴史家アレクサンダー教授の孫にあたる人であつたが、純白な着物に紫の帯をしめた印象的な容姿をした五十歳に近い婦人であつた。バハイ教徒は「人種平等」「消費經濟の均等」「言語の統一」を主張してゐたので、アレクサンダーのところへはエスペラントが多く集つてゐ



た。望月百合子や神近市子なども時々彼女を訪ふた。女史は十二三歳の女の子のやうに房々した毛を前額に垂れて、口を大きく開いてバツハ・ウーラの豫言書の「隠語録」を讀んでゐたのを思ひ出す。

Pola Esperantisto (ポーランドのエスペラント雑誌) に、ポーランドの一青年士官が、旅順で日本の一將軍と戦争に關する會話をしたことが書いてあつた。

士官——人間は何故戦争をしなければなりませんか？

將軍——大きな平和のために。

士官——人間は兵備を全廢して、人間の勢力を他の有益な仕事に費すやうに努力しなければならぬと考へますが、將軍は兵備全廢の時代を想像することが出来ますか？

將軍——その時の確かに來ることを信ずる——然し今は其時ではない。

といつて將軍は神経質に室の中を歩き廻つた……。

ヨオロツパは今戦争の渦中に捲きこまれてゐる。多くのエスペランティストが戦死してゐるといふ報告があつた。エスペラントの創始者のザイメンホフ博士もまたポーランドのワルソウの近くで大砲の音をきながら死んで行つた。

この年、私の父は、業務上の非合法行爲の嫌疑で起訴された。父は盲目で既に六十三歳であつた。

彼は三十餘年間地方で産科の業務に従事してゐたが、ある婦人の墮胎事件に座して、起訴收容されたのであつた。第一審は有罪になつたが、直ちに控訴手続きをして八月には保釋になつた。私は十月四日に父を仙臺で迎へてゐる。父は義兄と共に一汽車早く仙臺に着いたので、私は停車場に迎へることが出来なかつた。父は眞白な鬚を生やして私のゐる室へ入つて來た。殆んど想像もしない不幸な事件のおかげで、一人の父と三人の子供達は、暫く目で睦まじく會食することが出来た。私達は出来るだけ高い聲で話をしたり、笑つたりした。父は始終黙つて私達の聲をきいてゐた。

廣瀨川の大きな谿谷を隔て、青葉城の高い石垣が見える。法廷の父は落ちついた態度で裁判長の訊問に答へるばかりだつた。事件としては、無論無罪か執行猶豫に當るものであつたが、檢事は相手被告の申立や調書の一部分を楯に、一ケ年もしくは一ケ年半の刑に處すべきものであると論告した。

その日の午後、私達兄弟は父をランチに載せて松島に向つた。そこには義弟の妻や子供達がゐた。父はランチの上で眼を閉ぢて俳句の想を練つてゐた。

十一月十日御大典の日。辯護士の勸告に従ひ、父の上告を取下げることにした。この日發令された恩赦令には次ぎのやうに記されてゐた。

「大正四年十一月十日前刑の言渡を受けたる者にして其執行に係るもの、刑執行猶豫中、執行中若



くは執行停止中のもの又は假出獄中のものは本令に依り其刑を軽減す但し其執行を遁るゝ者は其限りに在らず」

飽くまで無罪を信じてゐた父は、この上告取下げによつて、ある期間刑に服さなければならなくなされた。

私はこの年、戯曲「二個の生物」(文章世界)「糧のない熊」(新日本)戯曲「アンリシカ」(秀才文壇)戯曲「緑の野」(中央公論)等を公けにしてゐる。

### 大正五年(一九一六)三十四歳

私は下のやうな豫言者の言葉に力づけられたことを正直に記して置いた方がいゝだらう。その時の心境はその人にとつては歴史的な價値を持つてゐるものだからである。

わが不幸はわが戒めである。形の上では火であり、憎悪であるが、實際はそれは光であり、慈悲である……。

父は今中野監獄所にゐる。去年十一月二十二日に、養兄とともに父を板橋署へ送り届けた時の悲痛な感情を今も私には心の中にはつきりと彫りつけてゐる。

この頃、私はボリス・ザイツエーフを讀んでゐる。「靜かな曙」「死」「妻」などを讀んで見た。「靜かな曙」はその内でも一番心をひかれた。「妻」はウイゴラスな内的な妻を持つた主人の苦しみを描いたものだが、落ちついた筆で描いてある。この作家は私達と同年輩の男だが實に暗い感情を持つてゐる。この暗さはこの時代のロシア社會の行詰りの状態を反映してゐるのではないか、それとも彼の肺患から來る個人的、生理的現象だらうか? 何れにしても耐へがたい暗さである。ドストイエフスキイ、トルストイ、トゥルゲエネフのやうな大きな光を與へるロシア文學は殆んど生れて來ない。

私はこの年の三月に父を題材とした戯曲「最後の晚餐」を雑誌「太陽」のために脱稿してゐる。四月にはワシリー・エロシエンコと水戸の講演旅行に行つてゐる。この旅行は私には實に愉快な記憶を残してゐる。一行には畫家の竹久夢二も加つてゐたが、エロシエンコはエスペラントで女性問題を取扱つたロシア民謡についての講演をして、私はそれを通譯した。講演は公會堂、高等女學校、女子師範で行はれた。エロシエンコは「水戸は長い長い夢のやうな町だ」とロシアに通信した。エロシエンコは羊羹が甘いといつてむしやんこに食べたので、宿屋の拂ひが嵩んで困つた。

エロシエンコは、この年七月三日にシヤム及び印度に向つて出發してゐる。なぜシヤムに行くかと彼に質ねると、「私は東洋諸國、殊に弱小民族の生活を知りたいのだ」と答へてゐた。私達は中央ス



テーション（東京驛）で待つてゐると、エロシエンコは赤いトルコ帽をかぶつて、伊達といふ青年に手をひかれながらやつて来た。赤い帽子といへば、この頃私達は「赤い帽子の會」といふ會を組織して毎月一回何處かで會合してゐた。なぜ赤い帽子を選んだのかその理由もはつきりしてゐない。またこの會には一貫した思想があるわけでもない、中には可なり進歩的な青年もゐたが、フアツシヨ的青年も二三人はゐた。二三十人の人がエロシエンコを送つたが、その中にはアレクサンダー女史、竹久夢二、エスペラントの福田邦太郎などがゐた。「永久に死なゝいやうに！」と私はエスペラントでいさつをする、エロシエンコは鼻頭に皺をよせて笑つてゐた。

この頃、バリモント、タゴオル、ポール・リシャール等の外國の客が來てゐた。バリモントは殆んど日本の社會に觸れることなしに歸つて行つたが、タゴオルはお祭騒ぎに近い歓迎を受けてゐた。私は帝大と慶應の二回の講演をきいてゐるが、タゴオルはいつでも人類の文明を精神文明と物質文明とに二分し、西洋文明は物質的であり、東洋文明は精神的であり、日本は兩文明を調和させてゐると語つてゐた。そして日本人と印度人とは心と心で接近してゐる、日本人は西洋文明を模倣する必要がないといふのが彼の結論であつた。私はタゴオルの文明を精神的、物質的と二分する方法には何うしても賛成出來なかつた。印度の文明は印度の科學、政治、經濟の上に打ち立てられた文明ではなかつたか？

「赤い帽子の會」が主催者になつて、七月十一日に私達はタゴオルを横濱本牧の原別墅に訪ねてゐる。一行は二十七名で、中には中桐、北（令吉）、武田（豊四郎）吉田（絃二郎）牛山（充）等がゐるやうに記憶する。私達が原の別墅に着いた時は、タゴオルは齒の療治に行つて留守だつたが、やがて歸つて來て訪問者の質問を受けた。そこは小高い丘の上の支那風の建築物で、支那館と呼ばれてゐた。タゴオルは長いガウンのやうなものを着てゐたが、よく快活に話してゐた。私は今、訪問者が何を質ねたか、タゴオルはそれに對して何んな答へをしてゐたか、殆んど何も記憶してゐない。然し、牛山が信州の民謡を歌つたのがタゴオルをひどく喜ばせたのを知つてゐる。

八月には私は自分の顔によく似た二番目の娘あや子を疫痢で失つてゐる。この事件は殆んどびしゃんこになるほど私を打ちのめした。私は生死の問題を科學的に社會的に追及すべきであつたのに、自分の現實的な苦痛を忘れるために、經典などを無茶苦茶に亂讀した。ポール・リシャールはあや子の死について鄭重な吊詞を送つて呉れた。

私達は君の大きな悲しみを知つた、そして君に對する同情の念で一杯になつてゐる。——私達は生涯の内に度々死の悲しみを味ふ。なぜなれば「死」は何人をも除者にすることはないからである。然し、私は死は轉身であつて、決して終りではないことを信じてゐる。君はすべての苦痛の蔭



にあるものを見得る一人であることを私は信じてゐる……。

生死の問題については、私はこの年にもつと多くの経験をしてゐる。第一は神近市子の事件で、第二にはこの時代に最も多くの読者を持ち、ある意味で時代の寵児でもあつた文學者夏目漱石の死であつた。

神近は南方的な熱情をもつた、そしてこの時代としては最もインテレクチュアルな女性の一人で、私達のグループでは誰にでもよく愛されてゐた女性だつた。十一月九日の彼女に關するニュースは私達を驚かした。新聞報道によれば、彼女は戀愛の三角關係に悩んだ結果、八日の夜、その戀人である大杉榮を殺害する目的で短刀をもつて彼の咽喉を突いて果さず、捕縛されたといふのであつた。この事件は、社會運動者に對する意識的なデマゴークの性質をも加味して、可なり誇張して報道された。私は數日前神近の家を訪ふた時、彼女は戀人に贈るのだといつて、華美なメリンスの布團を縫つてゐたのを思ひ出した。彼女の戀愛の敵手は、これも南方的な女性の伊藤野枝であつた。神近は横濱根岸監獄にゐた。

この時代の日本の文壇は、小ブルジョアの反幻想主義的、否定的リアリズムである自然主義が自己崩壊を起してゐる時であつた。最初から自然主義運動とは別個に、封建趣味的、俳諧趣味的立場から、一種の寫實主義的様式を發見して行つたのは夏目漱石及びその一派であつた。自然主義はブルジョア社會の自己暴露に終始してゐたのに、夏目漱石はユーモアと皮肉をもつてブルジョア社會に接して行つた。ブルジョアの生産關係を反映した自然主義文學がブルジョアによつて愛されずに、ブルジョアの社會を反映し得なかつた夏目漱石一派の藝術が愛されたことは、日本ブルジョアジイの一時的の安定を示すものであつた。

私は十二月十日に夏目漱石の納棺の式を列してゐる。小宮、森田、野上、阿部、安倍、久米等漱石門下の人々に圍まれて納棺される夏目漱石の四角なココア色の顔と、前額にちぢれあがつた特長のあつた髪を今もはつきり思ひ出せる。釋宗演の偈を私は記憶してゐる。

會 斥 翰 林 學 士 名  
布 衣 拓 落 樂 禪 情  
卽 今 乘 興 遽 然 去  
餘 得 寒 燈 夜 雨 聲  
如 何 是 漱 石 居 士  
師 家 穩 座 處 劫 火



洞 然 毫 未 蓋 青 山  
白 雲 中 咄

私はこの年、下のやうな創作を發表してゐる。

戯曲「最後の晚餐」(太陽) 同「土の子供」(太陽) 同「佛陀と幼兒の死」(帝國文學) 同「首を斬る瞬間」(新公論) 等。

### 大正六年(一九一七) 三十五歳

歐洲大戰はまだ續いてゐる。思想家、進歩的文學者の間に戦争に關する論議が行はれてゐる。然し、それは公然なものとしては表はれてゐない。反對に戦争に伴ふ保守主義的傾向、征服主義的傾向を帯びた出版物がぼつ／＼現はれてゐる。出版書としては、鹿子木貞信の「永遠の戦」などがその一つである。鹿子木はもと軍人で慶應の教授であつた。彼は一種の民族主義者で、優秀なる民族はその持つてゐる優秀性によつて世界を征服する権利を持つてゐると主張してゐる。「聖戦」といふ言葉を彼は用ゐてゐたやうだ。戦争ほど人間の心を純粹にするものはないと彼の著述で語つてゐた。然も、彼の民族主義は何處となくドイツ臭い、バタ臭いものであつた。この傾向はこの時代の民族主義者に共通なものであつた。民族主義者はいつでも神秘主義にその隠家を見つけるとより仕方がない。なぜならば、人間の生活を共通に支配する經濟法則を無視しようとするからである。鹿子木は、その意味で日本ファツシヨの先驅者であつた。

私は去年の十二月に父を監獄から迎へてゐる。私は苦難の一つを免れたことを喜んだ。然し、私達の友人神近市子はまだ横濱の監獄につながれたまゝ、まだ公判にも附されてゐない。彼女の友人や彼女と交遊のあつた外國人達は彼女のために出来るだけの好意を示した。

二月十九日に神近の第一回の公判が横濱地方裁判所で行はれた。私は友人の一人としてこの公判に列してゐる。朝早くなのに法廷は八分通りの傍聴者で埋められてゐた。そして、五分の一ほどは女性であつた。その内の二三人の若い女性達は、法廷で漱石の文集を讀んでゐたのが眼についた。裁判長は神保といふ私と同學の人で、何かの事件で名判官といふ名を得てゐた人であつた。神近は九時半頃看手につれられて地下から法廷に現はれて來た。ひきつめた、さつぱりした髪をしてゐたが、日光を見ないせいか血色が少し悪かつた。彼女は法廷へ出た時、私達の方に目禮を投げた。裁判長は比較的物柔かに訊問をした。彼女の答辯は、普通の日本女性に多く見るやうなセンチメンタルな要素を殆んど持つてゐなかつた。この日の裁判は一應の取調べだけで終つた。第二回の公判は三月二日に行はれた



が、その結果は四ヶ年の刑の宣告がなされた。この刑の量定は、わが國の女性の地位の低いこと、家族制度の建前によるものであると、先輩の法律學者が言つてゐた。神近はすぐに控訴したが、間もなく、事件發生以來百日餘で保釋になつた。宮島資夫（後の禪僧蓬州）は、保護者として神近を自宅に引きとつた。多くの友人達は神近を圍んで獄中の感想をきいた。彼女は事件發生前よりもずつと健康さうな態度で私達に接した。佛教思想などに對しても正しい批評眼を持つてゐた。六月十七日の控訴公判の結果、神近市子は二年の刑の宣告を受けた。彼女は入獄前に色々な執筆をして十月三日に入獄してゐる。

神近の入獄の前日は、怖しい暴風雨の日であつた。私はこの年を「颱風前後」といふ言葉で特長づけようとした。十月一日の午前一時頃から突然颱風が東京地方を襲うて來た。電氣が消え、雨戸が吹き飛ばされ、電線は切れ、二階建の家は船のやうに揺れ初めた。遠く樹が折れ、瓦やトタンの飛ぶ音がきこえる。人々は不安の内に自然の襲撃と戦つた。暴風雨は朝になつても止まなかつた。外に出て瓦に打たれて即死したものもあれば、溝に足をつつこんで濁流に吞まれて行方不明になつたものもある。月島、本所、深川の被害は眼も當てられないと報ぜられてゐる。この數時間に生命を失つたものは三百名以上に達してゐた。赤十字旗をたてた自動車は街を疾走してゐた。

「十月の嵐」が世界的に吹き荒れたのもこの年であつた。ヨオロッパの民衆が大戦の砲烟の中から、自分達の姿をはつきりと認め初めたのはこの時であつた。私は文學の方面からもこれを記録して置く必要がある。「十月の嵐」は、戰敗國のドイツから起らないで、私達に偉大な藝術を供給して呉れた帝政ロシアから起つたことは興味あることではなければならぬ。ロシアの帝政末期の藝術はアンドレイフ、クープリン、バリモント、ボリス・ザイツェフ等の象徴主義、神秘主義によつて代表されてゐた。これらの文學は帝政ロシアの政治的、經濟的行詰りを反映してゐたものであつた。この頃、ロシアの思想家達には東方主義に逃れ道を發見しようといふものと、西方科學主義によつて合理的社會を建設しようといふものとの二つの流派があつてお互に論争をつゞけてゐた。「東方主義」を主張したものはアンドレイフであり、「西方主義」を主張したものはゴリキエであり、その調和を主張して第三帝國主義を唱へてゐたものはメレジュコフであり、「十月の嵐」でボリシキヤ黨の勝利を得たのは、イデオロギー的には西方科學主義の勝利を意味するものであつた。

日本の文學は、この時代には、人道主義文學の全盛期で「白樺」に屬した若い文學者達の最も制作力を持つた時代であつたが、然し、ロシアに於ける西方科學主義の勝利は、人道主義の陣營にも分裂の徴候を與へた。また一般的にも貴族主義的人道主義に對して屢々プロテストがなされてゐた。



私はこの年の四月に、早稲田文學社主催の講演會で「戦争に關する幼年教育の誤謬」といふ演題で藝術俱樂部で講演をしてゐる。これは私の講演の意識的になされた最初といつていい。この講演は主として鹿子木員信の戦争讚美論を批判したもので、人間の闘争を讚美するやうな教育が如何に幼年者の生活を歪めて、人類の生活を不幸に導いて行くかを論じようとしたものであつた。

私はこゝで一つの小さな告白をして置かなければならない。私はその後度々講演をしてゐるが、私は講演といふものが實に嫌ひな人間である。講演をすることも、人の講演をきくのも嫌ひなのである。それならばお前は何うして度々講演をしてゐるのか。私は非常に臆病な性質で、他人の前で談話をする時、非常な不安に襲はれる。私はこの不安を除くために講演を餘儀なくされる時は充分に準備する習慣をつくつた。これが他人に私が講演に對して積極性を持つてゐる者のやうな幻想を與へたのである。私はこの時代から後の所謂「デモクラシイ時代」に互つて度々講演會に動員されてゐるが、いつも積極性をもつて臨んだことはない。私はむしろいつでも義務の感情で自分を鞭撻してゐた。私は講演に動員されたために、私は何れだけ創作力を減殺されたか知れなかつた。

今「十月の嵐」は、全ヨロッパの民衆に強い刺戟を與へてゐることが色々な地點からエスペラントの通信によつて報道されて來てゐる。然し、日本のエスペラント運動は、依然として中立エスペラントの手にあつたので、ヨロッパ民衆のこの時期の激動を反映することは出来なかつた。中央ヨロッパに於ける「労働者エスペラント協會」の運動を正しく報道し得たのは餘程後のことであつた。然し、私はこの時代に自由主義的な立場から、多くのエスペラントの會合に列席して、エスペラントの使命について語つた。Interna ideo (内部精神)といふことが、多くのエスペラントによつて主張されてゐたが、この内部精神といふ言葉を正しく説明するものはなかつた。またこの「内部精神主義」に反對してエスペラントを實用化しなければならぬと主張してゐる一派もあつた。更らに、言語を進歩的階級の闘争の武器たらしめなければならぬといふのは、第三の解釋であつた。ザメンホフ博士の「内部精神」といつた、その主張の社會的ミリュエを科學的に研究し初めたのはこの第三に屬する人々であつた。この事は一般社會には大した交渉を持つてゐないやうに思はれたが、その實、長く世界を通じて國際通信活動の二つの流れをなして行つた。

私は「劇と詩」及び自由詩運動時代に、私達と行動を共にした若き二人の詩人三富朽葉、今井白楊の死んだことを記録して置かう。二人はこの夏銚子の三富家の別墅に共同生活をしてゐたが、二人とも多少泳ぎの出来るのが禍ひをして激浪にさらはれて死んでしまつた。三富は曉星から早稲田の文科



へ入つた男で、フランス語のよく出来る男であつた。彼はある期間、私のためにフランス現代詩の講義をして呉れたこともある。一字の師といふことがあるが、彼は私にとつてはフランス文學の教師でもあつた。彼はポール・フォールの詩を愛讀してゐたので私達は二人で彼の詩を讀み合つたことがある。やがて私は民主主義的、社會主義的傾向を持つて行つたのに反し、彼はフランス文學の研究の影響から、次第に傳統主義的になり、そのために二人の間は全く絶縁状態になつてゐた。彼は死の直前には、フランス風の王統派的傾向をもつてゐたやうに記憶してゐる。

三富朽葉の周圍には、三上於菟吉、増田篤夫、福士幸次郎等もゐたが、三富の死後、思想及び生活態度の相異から、三上は増田、福士などと感情の對立を生じて別れてしまつた。三上は身體も弱く感傷的な男で、長く文學的に不遇な生活を送つてゐたが、後では大衆作物に筆を執るやうになつた。増田は文才もあり三富とよく似た性格をもつてゐたが、病弱のために殆んどその才能を發揮することが出来なかつた。福士は思想に統一をかいたエクセントリックな男であつたが、勝れた詩を書いてゐた。(彼は時代を隔て、フアツショのグループに入り、自らフアツショといふ肩書きつきの名札を持つて歩いてゐた)

この年、踏路社はエデキンドの「春のめざめ」をやり、新劇協會は日本の創作、戯曲に手をつけてゐた。私もこの劇壇のために「捕虜の妻」といふ戯曲を提供したことがある。この頃、民衆劇社といふ劇團が私達の周圍に出来てゐた。この團體に屬してゐた佐藤青夜、小林生象などは多少進歩主義的傾向の人間で、自然主義的演劇運動に反感を懷いて、オスカア・ワイルドの「ヴェーラ」といふ變つた芝居を上演した。この芝居は、ロシアの女性革命家ヴェーラ・フキグネルを主人公としたもので、ヴェーラが官憲の手に捕縛されようとした時、彼女を戀してゐたプリンスによつて救はれるといふ筋で、勿論妥協的なキヤストロフをもつたものであつたが、その時代としては、可なり進歩的な出物であつた。小林生象はプリンスの役をとり、花柳はるみはヴェーラに扮してゐた。花柳のヴェーラは立派な出来であつた。

花柳はるみといふ女優の認められたのは、踏路社及びこの民衆劇社によるものであつた。この俳優は實に魅力のある女性で、彼の周圍には絶えず多くの青年達がゐた。私は時々孵卵期の魚の群を聯想した。勿論道徳的にそれを非難する意味ではない。一體花柳はるみや、衣川孔雀のやうな素質のある俳優が何うして充分の發達をし得ないかと私は時々考へたことがある。彼等の比較的早く生活力を失ふのは、その罪が彼等自身にあるのか、それとも彼等を取り巻いてゐる環境が悪いのだらうか？ 私にはやはり女性の地位が低く、そして孤立してゐるところにその原因があると思ふ。女性が藝術家とし



て男性の世界に入つて活動するためには、女性自身の社會的背景をもつてゐなければならぬ。俳優に限らず日本の女性は失意の時には全く倚り頼むものを持つてゐなかつた。私は松井須磨子の場合にそのことを一層強く感じさせられた。

私はこの年からやゝ創作力を盛りかへして來てゐる、これは生活に對して積極性を持ち得るやうになつたことを證據だてゝゐる。私は觀念主義の洞窟の中からやうく逃れかけてゐる。

私はこの年、下のやうな創作を發表してゐる。

戯曲「父親の印象」(帝國文學) 同「天上の結婚」同「土地」(三部曲) 同「捕虜の妻」(早稻田文學) 同「東方の星」(文章世界)

### Ⅲ 「デモクラシイ」時代

(大正七年——大正十年)

大正七年(一九一八) 三十六歳

この年はロシア革命の一年目で、世界を通じて二つの力がやうやく對立の形で進みかけた時であつた。ドイツがロシアに對して武力的侵略を初め、それに對してレーニンが意識的讓歩をしたのもこの時であつた。シベリヤ出兵問題が論ぜられてゐるのもこの年であつた。

戰時利得の夢に耽つてゐた日本の社會では、勞働は強化され、物價は騰貴し民衆の貧窮化の度が急激に深まつてゆき、米騒動は自然發生的に頻發し、東京市が戒嚴の形で武装されたのもこの年であつた。日本の文學はこの社會狀勢を次第に反映し初めてゐる。一體に日本文學は、自由民權運動以後、殆んど社會性を失つてゐたが、この時代に初めてそれを恢復しかけて來てゐる。

この年一月私は、初心會で有島武郎、生田長江、橋浦泰雄、野村愛生などと逢つてゐる。初心會は初め野村愛生の懸賞當選を祝ふ會であつたが、後では、有島、生田等を中心とした座談會の性質を持つやうになつてゐた。會では、文學の問題よりも、むしろ時事問題が論ぜられてゐた。有島はきび



きびした弾力性のある印象を私達に與へた。生田は不幸にして惡病に襲はれ、次第に内省的になり、反社會的、個人主義的傾向を帯びるやうになつたが、まだこの時代には充分に進歩性を持つてゐた。

私達は下六番町の有島の書齋で夜おそくまで話しあつた。デモクラシイの問題が持ち出されたり、ソレリアといふ人の「ロシア革命と戦争」といふ著述について語りあつたりした。ソレリアは、多分ベルジエームかオランダあたりの人で、この著述はロシア革命に關する一般的著述の最初のものであつた。

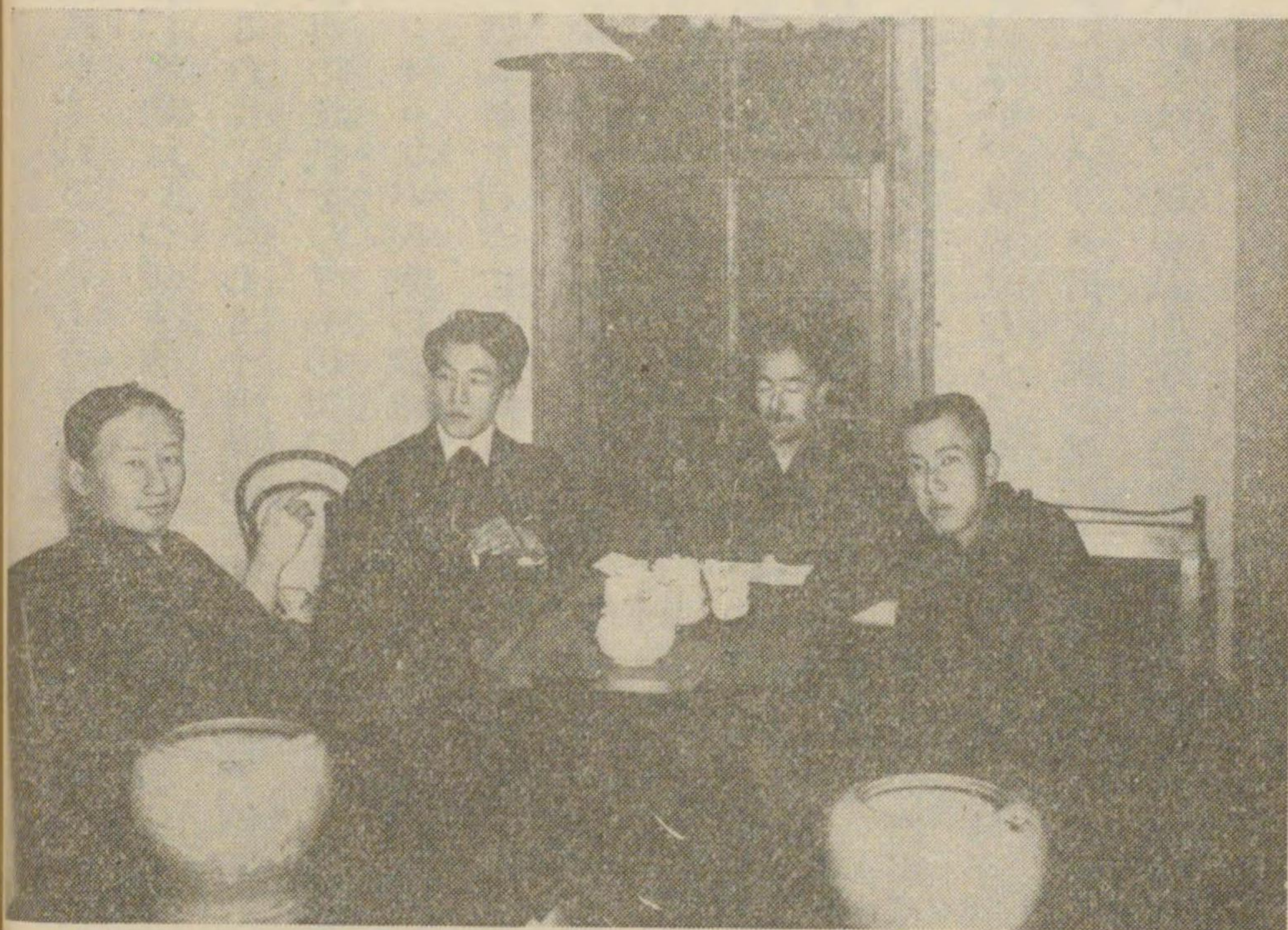
アンドレイフの「ベルジユンムの悲哀」は、人道主義的立場から世界大戰の犠牲者であるベルジユームを語つたものであつたが、その考へ方は運命主義的で、少しも積極性を持つてゐなかつた。アンドレイフは間もなく、新興ロシアから亡命して、最初のイミグラントとなつてゐる。アンドレイフの逃亡は、西方科學主義に對する東方神秘主義の現實的敗北であつた。この頃、私はスウキスのエスペラントテスト、デツクといふ青年に東京で逢つてゐる。彼はセルビア生れの男で、同國人で、全ヨオロッパ的な聲名を持つてゐる戯曲家ヨゼフ・コーソルの戯曲を私に示した。私はこの作物によつて、ヨオロッパの民衆が何によつて惱んでゐるか、殊に弱少民族の青年達が何を苦しみ、何を望んでゐるかを明瞭に知ることが出來た。然し、ヨゼフ・コーソルは結局、アンドレイフと等しく懷疑的、絶望的であるのには物足りなさを感じた。私はヨオロッパ民衆の強く起き上つた部分から、きつと、今に立派

な文學が主れるであらうと思つた。この頃エムマ・ゴルドマンの「少數と多數」といふ論文を讀んでゐた。多數はいつでも自由と新しい研究と建設との敵であるといつて、賢い少數の努力を讚美してゐる。これは、必ずしも十月革命のみ評價したものではなからうが、ヨオロッパの小ブルジョアの社會思想の根柢をなすもので、空想的アナルヒズムの支柱となつてゐるものも、この考方であつた。然し、ヨオロッパ民衆の欲求は、もつと、現實的な手近な大衆的必要性から生れて、それがすん／＼形態づけられて行つてゐるやうに思はれる。

三月、片上伸が「十月の嵐」の中から歸つて來た。私達は片上を圍んでロシアの話を書いた。片上はロシアの社會性については殆んど知識をもつてゐなかつた。彼はロシアから持つてかへつた馬糞のやうな黒パンの一片を示して、當時のロシアの食糧缺乏の状態について語つた。然し彼はロシアはこの困難の時代にも文學を失つてゐないといつて、マヤコウスキ一派の未來派の運動について語つた。片上が歸つて來て間もなく、ロシア大使の内田は、ソヴェートの社會的意向は決して不健全なものではない、世界はむしろソヴェートの仕事を見守つてやるべきであると新聞で語つてゐたが、その一面にはシベリヤ出兵説が壓倒的な勢力を得てゐた。

六月には、私の戯曲集「三つの魂」の出版記念會が麴町永樂俱樂部で開かれてゐる。長谷川天溪、





大正七年、三十六歳の著者（長田秀雄、岡本歸一、川村花菱）

有島武郎、生田長江、楠山正雄、その他の友人が五十名ほど出席して呉れた。この戯曲集の巻頭に收めた戯曲「三つの魂」は、私を作家として観念主義的世界から再び科學の世界へ取戻して呉れた最初のもので、三人の兄弟によつて、當時の三つの思想傾向を代表させようとしたもので、長兄は宗教的傾向、中兄は資本家的傾向を、末弟は社會主義的傾向を代表するものであつた。そして中兄と末弟との鬭争の間に長兄は自殺してゆくといふことを描いたものであつた。

七月、私は大正三年以來、殆んど絶交状態になつてゐた藝術座へ歸つて來た。

私は暫目で恩師島村抱月にも、松井須磨子にも逢つた。島村抱月は、この頃松竹と共同で藝術座の公演興行を計營し、一方研究所を起して眞面目な演劇研究を初めようとしてゐたが、その實、彼は興行的演劇については可なり懷疑的になつてゐたばかりでなく、ひどく疲れてゐた。

私は、長田秀雄、河村花菱などと牛込の藝術俱樂部に集つて脚本研究會のプランをたてたり上演目録をつくつて見たりした。これはまた私にとつては一つの誘惑となつて、この年も翌年の大部分をも、色々な出來事でめちやくちやにしてしまつた。（私の青春の大部分は、この前後の芝居の仕事で損はれてしまつたやうな氣がする）この時の一番最初の上演目録に上つたものは、有島の「死と其前後」と長田の「誘惑」の二つであつたが、「死と其前後」の稽古中、松井須磨子は女主人公に同感していつでもほんとうに泣き出すので私達は困らされた。松井は智性を缺いた、然し純情な女であつたことはこのことでも理解されるであらう。

十一月五日、午前二時七分、島村抱月は自分の妻や、子供から離れ、また戀人とも逢はずに藝術俱樂部の一室で淋しく死んでしまつた。流行性感冒から肺炎を併發したのであつた。私は人間の孤獨性といふことを、この時ほど強く感じさせられた時はなかつた。明治座の「緑の朝」の舞臺稽古から歸つた須磨子は聲をたて、泣きながら「注射を、注射をしてください！」と叫んでゐた。



島村は我國の自然主義文學勃興當時に、それに理論づけをして行つた最も輝かしい評論家の一人で、また早稻田大學では、英文學及び美學の方面で最も新鮮な講義をしてゐた教授の一人であつたが、晩年には殆んど讀書も執筆も廢して、たゞ「野性に富んだ一女性の愛人」としてその生命を終へてゐる。

私はこの年、下のやうな作をしてゐる。

戯曲「三つの魂」(早文) 戯曲「姉」(大學及大學生) 小説「未決監の朝」(新時代) 戯曲「雪解の喜び」(雄辯) 同「少年の死」(早文) 小説「女作家の死」(文世) 同「雪女」(中央公論)

### 大正八年(一九一九年) 三十七歳

島村抱月の死後、松井須磨子は全く「生ける屍」のやうな生活を送つてゐたが、次第に周囲との調和を失ひ、「カルメン」の五日目の夜、藝術倶楽部の納屋で正装したまゝ縊死を遂げてゐた。私はその夜、有樂座の廊下で彼女に逢つてゐるが、その時、彼女はカルメンの衣裳のまゝで、淋しさうな顔をして廊下を靜かに歩いてゐた。私は慰めの言葉をかけ得なかつたことを今でも後悔してゐる。有島は須磨子の死を無性格者の死だと評してゐた。

國木田獨歩が死んでから、もう十三年になる。私はこの年の五月十日に獨歩十三回忌に出席してゐる。田村江東、江木翼の挨拶があり、食後には坪谷善四郎、永田秀治郎、杉村從横、中澤臨川等の談話があつた。獨歩のこの時代への影響はやゝ薄くなつてゐたが、紅葉、露伴が全く讀者を失つてゐる時でも、獨歩はずつと新鮮な層に讀者を持続的に持つてゐた。この頃明治座では井上が彼の「酒中日記」を演じてゐた。

支那の俳優梅蘭芳が來てゐる。藤森成吉が梅蘭芳の印象を話して呉れたので、私は帝劇の二宮に見せてもらつた。私達は守田勘彌、初瀬浪子などと一緒に花道の横で見物したが、勘彌は、支那舞踊と日本舞踊の本質が殆んど同じものだといつた。一體舞踊は簡単な法則から出來あがつてゐるもので、何んなに複雑な手のこんだものでもおなじ法則によつて支配されてゐる。また變則的なものは、變則のまゝで一つの法則にはまつてゐるもので、支那の舞踊を見てそのことを一層確めることが出來たと勘彌は喜んで語つてゐた。

この頃から藤森成吉が私達の前に姿を現はして來てゐる。藤森は岡山の高等學校の講師をやめて専心に創作に従事してゐた。「舊先生」といふ小説は私の讀んだ最初の作物だつた。何處か表現に整理しきらないものがあつたが、ちつとり物を視つめて、それを描寫してゆく忍耐力をもつてゐる作家の



やうな印象を興へた。この頃、日本文壇ではロシア研究熱が盛んになつて、雑誌「ロシア研究」が發行されたのもこの年であつた。ロシアのポリシキズムの勝利はヨオロッパばかりでなく、全世界に強い衝動を興へてゐるが、日本の文學には、まだはつきりした影響を興へてゐない。日本文壇は白樺がまだ全盛期であり、武者小路實篤、倉田百三は盛んに小説、戯曲の筆を執つてゐる。倉田の「出家とその弟子」が有樂座で上演されたのもこの年であつた。白樺の人々は、初めロシアに於けるナロードニキ（人民派）のやうな幻想を興へてゐたが、この頃では狂信主義的傾向を帯びるやうになつて行つた。

十月に、私達は二年ぶりで八王子の監獄を出る神近市子を迎へてゐる。印度の旅行を終へて日本へ歸つて來たワシリー・エロシエンコは私と一緒に自動車に乗つてゐた。小雨の中を私達の自動車は走つて行く。日野の渡で多摩川の渡船に自動車を載せるために、私達は非常に骨を折つた。やう／＼のことで船を出て村道へ差しかゝつた頃、間もなく私達の自動車はパンクをした。二度目のパンクの時には村の人々が大勢私達を取圍んでワイ／＼騒いでゐた。四度目のタイヤで八王寺監獄に着いたのは、午前の七時頃であつた。この女監ではもう勞働が初つてゐるらしく、機織のおさの音などが聞えてゐた。

分監長、看守長、女教悔師達が私達を迎へて呉れた。年とつた女教悔師は私の前に立つていつた。

「神近さんはこの監獄内ではよく獄則を守つて大變従順ないゝ囚人でございます。また健康にもよく注意してゐられたので、身體も健康でございます。何うか出獄後は一層身體に注意して、立派な生活をなされるやうにお願いいたします」

エロシエンコはテーブルの上の茶碗をいぢりながら、にこにこして女教悔師の言葉をきいてゐた。やがて、私達の前に牢獄の中に二年間を送つた女友達の姿が現はれた。私達は強い感激に打たれたがその感情をちつとおさへつけながら話した。神近は肥つてはゐるが、日光を見ないせい、青白い顔をしてゐた。エロシエンコは神近の手を握つて、

「しばらくでした。神近さん、いかにですか？」  
といつた。

「ありがたう、よく來て呉れました。私はこんなに元氣です。」

私達は八王子の女監を出て自動車で横濱道を走つた時、新聞記者のオートバイの追跡を受けてゐるのを知つた。神近は十月の日光を眩しさに受けて、監獄内での日常生活を話したり、留守中での社會の出來事をむさぼるやうにきいた。



私は、この年から藝術の様式として童話を取りあげて見ようと考へた。私は娘の教育の材料としてトルストイの民話を讀んでゐる内に、急に童話の魅力を感じ初めた。然し、私はトルストイと反對に、児童を宗教的影響から救ひ出して、科學的な社會觀に導いて行きたいと思つた。人間の個人主義的な考へ方を、全人類的な共同意識の方へ變へてゆくために童話を役立てたいと思つたのであつた。然しレオ・トルストイの人類に對する深い愛情、一方自己を責め、自己を批判する良心の力強さには私はいつでも教へられた。殊に児童を愛する深い廣い愛情、これは同時に、ロシアの民衆に對する愛情でもあつたのだとも考へた。

私はこの年、童話の試作として「旅人と提灯」を早稻田文學へ寄稿したが、二三の批判を得たので、この年の内に四五篇の創作童話を書いて見た。また一方古事記の神話を書きかへて「日の光を見るまで」「女神の怒」といふ題で婦人公論に寄稿した。然し古事記傳の方は、鈴木三重吉がもつと大仕掛に着手してゐたので、繼續する熱情を失つた。

尙ほ私はこの年、下のやうな創作翻譯を公けにしてゐる。

戯曲「颱風前後」(早文) 同「教授の死」(文世) 童話「旅人と提燈」(早文) 戯曲翻譯、ダヌンチオ「ジヨコンダ」(早文)

### 大正九年(一九二〇) 三十八歳

私は今大きな力に押しつけられてゐるのを感じてゐる。長く觀念的世界の中におしこめられた私の魂は急に背のびを初めたやうな氣がした。私の周圍にゐた多くの若い友人達も、この年ごろから、はつきりした方向をとつて進み初めてゐる。進歩的な學者達の間には社會思想に關する論争が行はれてゐる。まだ小ブルジョア的、アナルヒズムの傾向を帯びてはゐるが、「國家」及び「權力」に關する社會學説が學校の講堂でも公然論ぜられるやうになつてゐる。森戸助教授の事件はその一つである。社會主義、進歩的な思想家、文學者及び學生によつて全日本的な結社「社會主義同盟」の創立されたのもこの年であつた。

ロシア變革、極東地方の激動のために、多くの勝れたエスペランティストが來朝して、日本に於けるエスペラント運動の實際的方面を刺戟して呉れた。セリセフ、クヅネツオフ、デツク、エロシエンコ、及びフィンランド公使のラムステット等の日本に於けるエスペラント運動を助長した功績は多大なものであつた。中央氣象臺の大石學士が「高層氣象學」Aerologio の講義をエスペラント語で立派にし終へたのもこの年であつた。



青年達の間には演劇及び文學の新しい運動が行はれてゐる。新しい演劇の運動は東京、京都、大阪、神戸その他の諸都市で行はれて、絶えず東京から文學者達が送られてゐた。私もまたこの年京都に旅行してゐる。私は京都では有島武郎に逢つてゐる。有島は、この頃同志社でイブセンの連続講義をしてゐた。

私は有島と二人で琵琶湖から疏水を下りた時のことを記憶してゐる。石山寺では、鎌倉夫人といふ有島の女友達と一緒にたつて私達三人は石山寺に一泊した。宿屋は高い山に臨んだ三階建の家であつた。私達は琵琶湖を一周して疏水を下る時、水路の中の光を見て、「あれは慈悲光だ！」と有島の叫んだのを、今もはつきり記憶してゐる。私はこの旅行中に京都に於ける進歩的なインテリゲンチヤによつて行はれてゐる演劇朗讀會「カメラオンの會」に臨んでゐる。この會では、チェホフの「犬」と私の「二十一房」とが朗讀された。有島は殺人犯人を、新村博士は看手の役をとつてゐる。このカメラオンの會は私を刺戟して「土の會」朗讀會を東京に開かせた。そのメムバアには佐々木孝丸、佐藤青夜等がゐるが、この二人は後の「先驅座」の創立者でありまた後の「トランク劇場」の創立者でもあつた。またこの頃京都には野淵昶達によつて「エラン・キタール」劇場が創立されて、最も進歩的な戯曲を演じてゐた。

社會的に見れば、この年は日本民衆の勢力的昂揚の時であつた。大正七年（一九一八）八月の米騒動を筆頭に、大正八年（一九一九）八月の東京全市の各新聞社印刷職工の總罷業、同年九月神戸川崎造船所のサボタージュにつゞいて、この年の二月には軍隊の出動を見た八幡製鐵所の總罷業があり、四月には、東京市電の總罷業が行はれて居り、また五月には、日本に於ける第一回のメーデーの示威運動が行はれてゐる。特に興味のあることは、このやうな民衆運動の勃興につれて、労働者、勤勞階級の文化的欲求を反映して、演劇運動が起されかけてゐることである。即ちこの年の川崎造船所の労働者によつて組織立てられた「日本勞働劇團」は日本に於ける労働者劇團の最初のものだといはれてゐる。

私はこの年の十二月に「A夫人に與ふる書」といふ短い文章を書いてゐる。この文章は、私達の方へ押し寄せて來てゐる社會的壓力に對して、自分の立場を何う決定していかといふ疑問がある婦人に投げたものであつた。この月には大杉榮、塚利彦を初めとして進歩的思想家達によつて「社會主義同盟」が結成され、それには多くの進歩的な若い文學者達が参加して行つた。今まで社會性、政治性を喪失してゐた日本の文學は初めて、それを取りもどしかけてゐる。著作家の權利を擁護するために日本著作家組合の結成されたのもこの年であつた。人々は一つの方向にむかつて足並をそろへて歩いてゐる。



る。窓の外にはたえずいそいで行く人の足音を感じるやうな年だった。

私はこの年、下のやうな仕事をしてゐる。「佛陀と幼児の死」(單行本) 戯曲「金玉均の死」(人間) 同「同郷の人々」同「國境の夜」童話「啞の殿様」「監督判事」「先生のお墓」(婦人公論)

### 大正十年(一九二一) 三十九歳

私は去年から娘の自由教育を初めた。私は日本の封建主義的倫理教育に對する疑ひから、子供を一般教育體系から分離して教育して見ようと思ひ立つたものであつた。私は、小數の子供達を集めて生物學的教育を土臺として、エスペラントを通じて世界主義的な感情を子供に教へ、それから情操教育としては文學、演劇、音樂の理解力によらうとした。私は二三の友人にも相談して先づ最初に自分の娘から初めて見たが、この仕事は決して樂な仕事ではなかつた。私は毎日三時間以上を子供の教育のために費した。田中朝子といふ文學愛好者が私の仕事を理解して、私の家庭の中に入つて、私を助けて呉れた。私は、生物學、社會學、英語、エスペラントの教科書を選んで、毎日三時間ほどこの二人に教へた。田中は子供の爲めに地理、數學等を教へて呉れた。この仕事は私に非常な興味を與へたが然し私はそのために創作の時間を殆んど失つてしまつた。もう一つの困難は、新しい侵入者の入つた

ために起る家庭の不和といふことであつた。私はこの困難と戦ひながら、子供と家庭教師の教育の仕事五年ほど繼續した。

私はこの年、若い自由思想家達の色々な會合に出席してゐる。この時代の青年達の思想は、個人主義と、コレクチキズムとの混合した性質のものであつたが、特別な事情から、日本のインテリゲンチヤの中に潜勢力をもつてゐた個人主義的傾向がある期間青年達をリードしてゐた。然し、この混沌とした社會思想の中に一つの方向づけをして行つたものは、やはりロシアを先頭としたヨオロツパの労働階級の掲げた旗印であつた。

この年十月には、雑誌「種蒔く人」が發刊された。この雑誌の發刊は、最初、小牧近江、金子洋文達によつて計畫されたものであつたが、當時の一般プロレタリアートの文化的要求を充すものとして東京で發刊されることになつた。この雑誌の發行は、當時の青年達の思想的河床となつて、一つの方角にそれを導いて行つた。「種蒔く人は」小牧近江、佐々木孝丸、村松正俊、金子洋文、柳瀬正夢等を同人としてゐたが、その寄稿家としては下のやうな内外の思想家、文學者の名が擧げられてゐた。

有島武郎、アンリ・バルビュス、エドワード・カーペンター、江口渙、ワシリー・エロシエンコ、藤森成吉、アナトール・フランス、長谷川如是閑、平林初之輔、神近市子、宮島資夫、小川未明、



このプランは、今から考へると、恐らく小牧近江あたりから出たものではなかつたかと思ふ。小牧は政友會代議士で秋田の名物男といはれてゐた近江谷榮治の長男で、當時、フランスから歸つて間もない熱情と奇智に富んだ青年であつた。一體「種蒔く人」の運動は、アナトオル・フランス、アンリバルビユス等によつて起された「クラルテ」運動に刺戟されたもので、この運動はフランスでは、ソヴェイト同盟に對する精神的支持を標榜したものであつた。従つて、日本に於ける「種蒔く人」の運動は、日本の青年達に對して、方向の決定を與へることに役立つたのは事實であつた。對露非干涉同盟に参加したり、ロシア革命記念日及び國際婦人デーのために講演會を準備したり、ロシア饑饉救済のために講演會を開いたり、寄金募集をしたりした。「階級の武器としての藝術」といふ言葉を最初に唱へ出したのも彼等であつた。私は過去の日本の文學の歴史で、この時ほど熱情に燃えた例を見たことがなかつた。

然し、私達は、この熱情の中で、私達によく愛されてゐたばかりでつく、日本に於ける國際語エスペラント運動に現實性を與へて呉れたワシリイ・エロシエンコと別れなければならなくされた。五月二十八日にエロシエンコは私達の手から奪はれて東京では再び逢ふことが出来なくされてしまつた。

私は有島武郎と共に、取締責任者に面會を求めて、その理由を質ねると、責任者は「悪い影響を與へるから」と簡單に答へた。「然し、エロシエンコは特定の政治思想を持つてゐるものではない。彼は單純な詩人ではありませんか。」

と私達がいふと、

「然うです。その詩人であることがいけないのです。」

と、一人の責任者が答へたので、私達は聲をたて、笑つた。

この會話の間に、私達はエロシエンコが、日本政府の手に「親切に保護」されて、既に浦鹽に向つて出帆してゐることを知つた。私達はエロシエンコに旅費を送る目的で、彼の童話集を叢文閣から出版することを計畫した。

私は六月二十六日に、浦鹽からエロシエンコの手紙を受取つてゐる。この手紙は、六月十二日に出したもので、その頃の浦鹽の政情を知る便利があるので、面倒をいとはずに左に記して置かう。

親愛なるAさん

今日、即ち六月十二日に私は浦鹽を出發して、ハバロフスク市を経て、チタ、イルクーツク、それから勞農ロシアの方へ出發します。浦鹽では、數週間ゾナゴさん（有名なエスペランティストで



日本人の世話を見て呉れる人)のお世話になつてゐました。

今、勞農ロシアの諸學校ではエスペラントを立派に教へてゐることをこゝで知りました。そして、あの人達は皆な熱心にエスペラントのために骨折つてゐるさうです。何うか、あなたも、私の愛する若い日本の學生達にエスペラントを教へてください、殊にエスペラント主義について充分教へてください。

もし、私が幸福にして無事にチタ市に着ければ、そのエスペラント協會から、ブラハで開かれる第十三回世界大會に代表員として派遣されるかも知れません。然し、チタ市まで旅行することは、非常に困難だらうといふ話です。でも私は大いに旅装を準へてゐます。糸、針、お茶、砂糖、ソーセイヂ、外套、その他食料品など、少くとも二ヶ月間保てるほど購入しました。誰も、私が一人でロシア内地を旅行出来るとは考へてゐません。

私の旅行の準備はもう出来ました。これでは、まるで北極かアフリカ内地へでも探検旅行をするやうなものです。でも私は何も怖れてゐません、落ちついてゐます。もしも、人が私を殺して、この悲惨な一個の存在を止めさせようといふ必要があるならば、私は怖れずに、その愉快を自由にその人に與へてやりませう。

浦鹽の政治状態は、この頃のお天氣のやうに變ります、そして例のS將軍もこゝにゐて、その機會を覘つてゐます。

さあ、またお目にかゝるまでのお別れです。私の知人達に私の挨拶をお傳へください。私は旅行中もなるだけ手紙を出すようにしませう。手紙は浦鹽市 Sinyoro Vonago としてください。さやうなら！

私は、この年の七月に父に死別してゐる。享年七十歳。父は、晩年輕い中風を疾ひ、酒を絶つてゐたが、死の直前頃から再びやりだしてゐた、死因は胃の出血によるものであつた。青森縣黒石町の菩提寺法眼寺に葬つた。同業者、俳人、町民等を含んだ三百餘名の會葬者があつた。

十一月四日、白頭首相原敬が若い政治青年中岡良一のために東京驛々長室前の廊下で刺されてゐる。中岡はその場で捕はれたが原敬は左肺を刺されて殆んど即死を遂げてゐる。取り調べの結果中岡の大伯父は近藤勇の反動壯士に刺された中岡慎一郎であるといふことが判かつた。陰謀政治に伴ふ暗殺は東洋特有のものだとはいへないまでも、確かに東方的であるとはいへる。原はブルジョア政治家としてはやゝ進歩的な政治家だといはれてゐたが、晩年は獨創性を失ひ、日本の政治に一種の倦怠を與へてゐた。権力の欲求者は、この倦怠に對してアジテートしてゐた。それが彼の死の原因であつた。



日本文壇の生んだ最大のリアリストであり、ロマンチズム時代から、いつでも日本文學の指導的作家であつた島崎藤村が、この年五十年記念を祝はれてゐる。藤村はその叙情詩時代からリアリズム時代への移りかはりの時に、思想的、藝術的に深い苦悶を経たのを私達は實際に目撃してゐるが、藤村はこの時代に巴里の旅行を終へて、「新生」及び「櫻の實の熟する時」を公けにしてゐる。「新生」は彼の最近の實際生活を記録したもので、そのリアリズムの深さと、勞作に對する忍耐強さとはドストイエフスキイを聯想させるものであつた。藤村はブルジョアの觀點から、封建主義的生活様式の崩壊する姿を、個人の生活を通じて丹念に描いてゐた勝れた人生記録者である。

私はこの年、下のやうな仕事をしてゐる。戯曲集「國境の夜」(叢文閣) 童話集「東の子供へ」(同) 童話「二人の兵士」(朝日) 戯曲「本能の復讐」(新小説) 童話「獅子王の死」(早文)

## V 自然の大脅威時代

(大正十一年—大正十二年)

大正十一年(一九二二) 四十歳

昨年、一昨年を通じて、日本民衆は立派に立上るだけの力を自分に感じて來てゐた。原敬の死には根柢的な意味が含まれてはゐなかつたが、たしかに支配政治に對する一つの威怖ではあつた。日本の支配的政治家達は、民衆の盛上りの力を、「民意暢達」の政治活動即ち普選運動の形にすりかへて行かうとしてゐた。そして、その交換條件として、民衆の自由を束縛する新しい法律を制定しようとしてゐた。その意味ではこの年は重大な年であつた。

この年、一月十日には大隈重信が死に、二月九日には山縣有朋の國葬が行はれてゐる。大隈は晩年個人的な野心を失つてゐたために、その死はチャーナリズム的には、一般の人々の同情を呼んでゐたが、この時代の彼は決して日本の民意を代表する側にゐるものでもなく、また通俗的な意味での進歩的な教育家でさへなかつた。彼が病んでゐた時、學生達が穴八幡に病氣平癒を祈願したといふ一事でも、この教育が何んなものであつたかほど見當がつくであらう。



山縣の死は國葬によつて飾られてゐたが、一般デヤリーナリズムの論調の蔭には、どこなく彼に對する一種の敵意が示されてゐた。山縣は封建主義に對して闘争した一闘士であつたが、この時代には閥族政治の原動力として、動すべからざる地位を獲得してゐた。彼の勢力は、この時代には新興ブルジョアの昂揚力に對して阻害をなしてゐるものだと思はれてゐた。即ち當時の一般デヤリーナリズムはブルジョアの觀點から彼の勢力を白眼視してゐたことが感ぜられた。

この年の春頃から二つの力が動いてゐた。一つは議會に對する普選案上程の運動であり、尙ほ一つの力は議會否認の思想を含んだ民衆解放の思想で、これは主として「種蒔社」一派の青年達によつて指導されてゐた。然もこの二つの運動は、殆んど時を同じくして行はれてゐた。

二月二十三日、二十四日の兩日、憲法發布以來といはれた大警戒裡に普選案が上程されてゐた。この兩日には支配政治の對立關係から、多くの檢束者を出してゐる。代議士の中にも檢束されたものがある。議會では永井柳太郎が普選派の議員として演説をしてゐた。

この同じ頃、「種蒔社」の人々によつて、ロマン・ローランの「ダントン」劇の稽古がすゝめられてゐた。進歩的な朝鮮青年達は屢々會合を開いて、民族解放のために努力してゐた。ブルジョアの運動ではあつたが、山本有三の「女親」改作問題について、劇作家協會によつて劇場資本家に對する抗

議の行はれたのもこの時であつた。

私は、三月一日に青年會館で行はれた、過激思想取締法案反對演説會に出席してゐる。定刻前に六七百の聴衆で場内が溢れてゐた。この演説會には、ブルジョア政治家の内でも、普選派の代議士星島永井の二人が参加してゐた。その他の講演者は大山郁夫（當時早大教授）末弘嚴太郎、福田徳三等であつた。講演者は、申合はせたやうに、「新法はビスマルク法案を模倣したものであつて、然も、それより一層苛酷なもの」であると論じてゐた。

また三月一日には、神田の「池國」で、「種蒔社」「熱風社」が主體となつて組織した「自由思想家組合」によつて、この同じ法案に對する反對決議文が作製され、諸外國の進歩的な思想家藝術家達に送られてゐる。會場の外には多くの警官が物々しく警戒してゐた。この時代の思想家達はこのやうな會合に泥酔して氣焰をあげる習慣があつたが、この夜も多くの泥酔者を生んでゐた。三月十五日のダントン劇は始んど何等の理由も示されずに禁止されてゐた。然し、過激思想取締法案は議會で否決されてゐる。（勿論この法案はもつと完備した形で準備を進められてゐたことはいふまでもないことだつた）

メーデー——今年のメーデーは、進展する階級、勞働者、農民及び勤勞大衆の前途を祝福するかの



やうな好天気であつた。前日までの雨が不思議に晴れて、初夏のやうな明るい太陽が地上を射てゐた。

私は、この年初めてメーデーの行列に参加した。私は「種蒔社」「熱風社」「無産社組合」「行商人組合」の人々と午前十一時頃に芝公園の前に集つた。街路の上にも、森蔭にも、強い色彩の組合旗が動いてゐた。十二時頃、私達は芝浦へ行く。私は關門を無難に通過したが、同行者の松本、佐野、橋浦等はすでに檢束されてゐた。代表演説の終了後、二千人の労働者は労働歌をうたひながら動き出した。私達の一隊は労働總同盟と芝浦技工の間に位置をとつて進んだ。地を踏む音、駆け出す音、労働歌、叫び聲が煙幕のやうな砂塵の中で沸き上つてゐた。途中多くの同志が檢束された。芝から京橋へ入る頃、それが一番烈しかった。同志を失ふ毎に、示威者の力が一層強まつて行つた。朝鮮同胞の闘争力の強いを見て私は驚かされた。そして、彼等の多くの者は戦列から強制的に抜かれて行つた。

私も亦た永代橋を渡つて中町へかゝつた頃、三名の私服警官によつて檢束され、すぐに二名の制服警官にひき渡された。この二人の警官は叮嚀な言葉で私に同行を求めた。私は騒音の中から離れて一人になつた時、何とも言ひ表はし難い寂寥を感じた。私は芝浦技工組合の高山久三と同房に留置された。同房者は全部で三人であつたが高山はその夜の十時頃に出され、私はその翌日の午後二時まで置かれた。釋放前に私はさといふ警視廳警部の取調べを受けたが、取調べの様様では、私はメーデー参

加中靴で警官を蹴つたり、その他いろいろな武勇傳を演じてゐたといふのであつた。私は思はず吹き出してしまつた。外へ出ると小雨が降つてゐた。

私は、この年仙臺、金澤、新潟、名古屋等へ講演旅行をしてゐる。文學、演劇、エスペラントに關する講演會であつたが、この時代の地方青年達の知識的欲求の烈しかったことは驚くばかりであつた。

文字通り知識に渴いてゐたといつていい。私はこれらの旅行ではいつでも有島武郎と一緒になつた。有島は決して講演を喜んでゐるなかつたが、私の場合と等しく、いつでも義務の觀點から、求められる度毎にそれに應じてゐた。

## (第六)



大正十一年、四十歳の著者（著者、有島武郎、江口渙）



この年、七月新潟地方の進歩的な教育者達によつて組織されてゐた「創生會」といふものに私は有島、江口の二人と共に招かれてゐる。この會は、恐く日本の教育者達が、教育勤勞者として自分達の使命を自覺し初めた最初の人々の集りであつたらうと思ふ。勿論、イデオロギイとして極めて漠然としたものではあつたが、反動教育に對して否定的な立場から教育を社會科學的に研究しようといふほどのものであつた。それでも當時ではこの團體は多少の犠牲を拂つてゐたやうに記憶する。

私は講演會の翌日、有島武郎と共に、新潟醫科大學を參觀した時のことをはつきり記憶してゐる。工藤といふ篤學な博士が私達を案内して呉れたが、有島は、解剖に附された女性の屍體を見て「これを見ると戀愛などは出来ないね」と嘆息を洩してゐたが、宿屋へ歸つてから、「やはり、戀愛は戀愛だね」と言ひ足してゐたのを思ひ出す。私達はこゝの大學で十年一日の如く「恙の蟲」の研究をつゞけてゐる博士や、動物實驗によつて「疲勞」の研究をしてゐる若い學者の生活を見せられて、ある種類の刺戟を與へられたことを感謝した。有島が、北海道の私有地を解放して小作人の共同管理に移したのもこの年であつた。

この月私達は日本近代文學の偉大な教師であつた森鷗外を失つてゐる。死因は腎萎縮であつた。彼は貧窮な下級士族の生れで、軍醫として日本軍隊の衛生施設に對して貢献したほか、むしろ文學者として明治文學の進展に對していつでも指導的な位置にゐた。ローマンチズムの文學運動を我國に移植したのも彼であつたし、舞臺の上に自然主義藝術を建設することに刺戟を與へたのも彼であつた。自由劇場の運動は勿論のこと、あらゆる近代劇の運動の刺戟と榮養素を供給したのも彼であつた。文學の方法論及び文章論の上に寄與する點も多く、そして、それはいつでも保守的でなく、進歩的であつた。彼は晩年維新前後の歴史的諸材料の蒐集に努力してゐた。また彼は、ブルジョアの觀點から、文學と社會との接觸を計つた最初の人であつた。西園寺の雨聲會もまた彼の創意によるものだといはれてゐる。彼は最後の武士といつたやうな風格の男であつた。

十一月十日午後十時頃、私は驚くべき事實に接した。それは片上伸の弟で、この年二月に「阿部次郎氏の人格主義を難す」といふ論文で世間の注目を惹いた若き評論家、竹内仁が自分の戀人の兩親橋本夫妻を殺害して、自分も縊死を遂げたことであつた。私は加害者の竹内仁をも、被害者の橋本夫妻をも知つてゐたので、私は玄關で新聞記者からこの報道を受取つた時、私の神経は氷のやうに鋭く透き通つてゐたやうに感じた。一體何うして斯んな悲劇が生れるのであらう？ 竹内は人を殺害するやうな人間ではなく、また橋本老夫妻は温厚なクリスチャンで、相手に怨まれるやうな性格の人とも思へない。この夜、竹内は、橋本の娘に逢ひに行つたのを橋本夫妻は拒んだものと思はれる。竹内は老



夫妻を惨殺して、自分も直ちに二階で縊死してゐた。私はこの時代に於けるこの青年の急激な左傾思想と老夫妻の觀念主義や封建的家族主義が、次第に對立矛盾を生じて來てゐたところに根本的な原因がありはしないかと思つた。もう一つは、兄の片上の性格を通じて見るやうな激情性が竹内にもあつたのではないかといふやうな想像が私の頭を矢のやうに通り返り過ぎて行つた。

私はこの年頃から創作力の減退を來してゐるが、表現主義風の主觀的な戯曲及び新し童話の創作をつゞけてゐる。

童話「凍てついた眼玉」(早文) 戯曲「南島の午後」(新小説) 戯曲「暗い扉」(太陽) 同「扉を開け」(解放) 童話「虎と狐」

#### 大正十二年(一九二三) 四十一歳

この年は自然及び社會的大脅威の年であつた。自然の脅威は社會的脅威に轉化し、社會的脅威は自然的脅威を一層強力なものとしてゐた。日本の進歩的要素が一般大衆から孤立してゐたことや民族の地理的的政治的關係は、自然の脅威に對して全く自制力を失ひ、混亂の状態を呈し、醜い自己癱瘓の幾月かを送つたのもこの年であつた。二三のブルジョア自由主義者をして、自由思想家、進歩的勞働者

及び異民族に對する社會的迫害を憤激せしめたのもこの年であつた。これを文學、思想の領野に限定して考へても、この自然の脅威時代に於いて、多くの進歩的思想家や文學の技術家、愛好者を失つたばかりでなく、この數年間にやうやう獲得した思想及び藝術の組織性を多くの點で失つてゐた。然し、その一面、觀念的にのみ論ぜられてゐた、社會構成の矛盾對立が生々しい現實として、多くの人の前に解體、分析されてゐた。

私はこの年の記録を何ういふ形で作成すべきであらうか。記録すべき餘りにも多くの事件を持つた年であつた。私の同時代の作家で、既に創作の様式でこの時代を表現しかけてゐる人々もある。私はここでは、簡単な月表の形で記録することにとどめて置かう。

(一月) 自然の大脅威を受ける前に、私達はすでに社會的な逼迫に追ひたてられてゐた。私のやうな一個の無力な存在も、廣汎な大衆の生活力のために、次第に次第に動員されてゐるのを自ら感じてゐた。私は一人の藝術家として、全く何等の用意もなく、既に方向づけられた大衆行動の中にひきこまれてゐた。高崎地方の文藝講演會のために麻生久、佐野袈裟美の諸君と共に行つてゐるのもこの年であつた。麻生は、新人會系統の男で、ロシアのナロードニキの運動に強く影響された、この時代では最も鬭争的な青年の一人であつた。この頃、高崎地方には執拗な小作争議が永續的に行はれてゐる



た。小作人側の永久三割減の主張を地主側が一旦承諾して置きながら、その約束を無視して、立入禁止を宣言したことがこの争議の繼續された理由であつた。建設者同盟に屬する若き青年達はその争議の指導者であつた。この地方でも農民解放のために働いた多くの青年達が犠牲的な苦惱をなめてゐた。

藝術の方面では、国立劇場請願運動が起されてゐたが、一體国立劇場請願運動は、支那償金（團匪事件賠償金？）を国立劇場設立の費用に當てるやうに請願運動を起すといふのが、表面の理由であつたが、その實は藝術による民衆支配の意向を、藝術家達自身に迎合させようとしたのがその真相であつた。私達は、一月十九日にカフェーライオンで行はれた劇作家協會で国立劇場設立の可否について激論したのを記憶してゐる。山本有三その他多數の賛成論者に對して、私は反對意見をのべてゐる。

「今日のやうな階級對立の激化してゐる時代に、政府の力を藉りて行はれる文化運動は、社會的に如何なる意味を持つてゐるかは、自ら明瞭である」国立劇場の存在は必要であつても、それは社會的矛盾對立のないところにこそ望ましいのであつて、「今日の状態で藝術家が政府に對して請願運動を起すことは、劇作家協會の組織を破壊し、これを二分する結果を生むであらう」といふのが私達の主張であつた。然し、この理由が多くの劇作家達に理解し難いものであつたことは、反對論者は僅かに中

村吉藏、金子洋文、大關格郎、清見陸郎及び私の五人にすぎなかつたのでも知れるであらう。

（三月）——この當時、ソヴェート同盟のヨツフェが日ソ國交恢復促進の目的で築地の精養軒に滞在してゐて、後藤新平はその折衝の任に當つてゐた。「赤化防止團」といふ反動團體が日本の保守的勢力によつて組織立てられたのもこの頃であつた。私達は三月八日に青年會館で行はれた「國際婦人デー」の日、ある進歩的な一女性が演壇に立つて、日本女性の解放を叫び、女性解放の國際的聯帶性を説いてゐた。その瞬間に、赤化防止團員と稱する××な一人の男によつて會場を混亂させられ、それを理由として中止解散を命ぜられてゐるのを知つてゐる。このやうな反動勢力の擡頭によつて刺戟されて、同月十二日に第一相互會館で行はれた堺枯川の慰安會では、（これは暴力團に襲撃されて負傷した堺を慰める會であつた）二つの力の對峙した險惡な空氣が感ぜられたほどだつた。堺はこの時代では最も人望ある時代指導者の一人であつたが、恐らく、これが彼の黄金時代だつたかも知れない。

まだ充分小ブルジョア的なものではあつたが、私達はこの月土藏劇場に「先驅座」の試演をしてゐる。土藏劇場といふのは、新宿中村屋所有の大きな土藏を劇場に利用したもので、「先驅座」に屬する俳優はもと朗讀の團體で、最初中村屋の二階で朗讀の研究をしてゐたが、この時、初めて舞臺に立つたのであつた。この團體には中村屋の娘さんも俳優の一人としてゐた。俳優の中には佐々木孝丸、佐



藤青夜、小林生象等がゐて、佐々木、佐藤は後のトランク劇場の創立者として参加してゐる。出物はストリンドベルヒの「火あそび」及び私の「手投弾」の二つであつた。

(五月)——この頃アナ、ボルの對立は個人主義的思想と集團主義的思想の對立で、この二つの思想が反動勢力に對しては共同戦線を守つて來たのであつたが、ソヴェート同盟の建設進展が、マルクス主義の進出の機運を促進させたので、ここにアナルヒストのグループとマルクシストのグループとは事毎に闘争をつづけた、然もこの闘争は別な力によつて激勢させられてゐたと見られる點もないではなかつた。三月十二日、早稻田大學の軍事研究團に屬する學生達が、暴力團の力を藉りて「文化同盟」の進歩的な學生達を襲撃して大隈の銅像の前で血を流してゐる。前者は日本に於けるファツシヨ學生のトップを切つたものであつた。このやうな二つの對立闘争の中に、日本の資本家達は日露漁業問題をヨツフェとの間に解決しなければならなかつた。然し、國交恢復の問題は未解決のままに残されてゐた。

五月二十七日に、私は有島武郎と最後の會見をしてゐる。なぜならばこの日以来私達は有島の姿を永遠に見失つてしまつてゐるからであつた。私は四月の鳥取旅行を有島と共にして、歸京以來お互に顔を合はせる機會を失つてゐるが、私はこの夜二三の友人と途中で有島に逢つたので、彼を下六番町

## (第七)



大正十二年、四十一歳の著者 (著者、中村吉藏、小川未明)

の家へ送つて行つた。彼は鳥打をかぶつて例の通り兩手を大きく振つて歩いてゐるが、何處か沈み勝であつた。私達が歸らうとすると幾度かとめて、高村光太郎の製作したブロンズの手をいぢりながら話しをしたり、シヨパンのレコードをかけたたりして、夜おそくまで私達を室にとめて置いた、そして私達のかへる時、彼は叮嚀に門のところまで送つて呉れた。これが彼を見た最後であつた。

(六月)——この頃、共産主義者の檢舉が初つてゐた。堺、山川、佐野、猪股、高津、中曾根、浦田その他八九十名の人々が檢舉されてゐる。有島武郎は「死の旅行」の間際に、ある青年にこの檢舉について述懐しながら、何



處かへ行つてしまつたといふことを後で知らされた。この月二十五日に神田ピース・サロンで行はれた「三人の會」(中村吉藏、小川未明、秋田の文壇二十年を記念するための會)で、私達は、發起人の一人である有島武郎を待つてゐるが、幾ら待つても出席しなかつた。その筈だ。彼はもうこの時には、誰にも知れずに輕井澤の別墅で死を遂げてゐたのだ。「三人の會」では、中村吉藏の戯曲「税」小川未明の童話「野薇薔」及び私の戯曲「國境の夜」が朗讀されたが、この會でも、アナ、ボルの鬭争が行はれ、若い詩人達がテーブルに載つかつて、ビール瓶を振上げたりした。この鬭争は一見癡癡的で、兒戯に類したものであつたが、わが國に於ける集團主義的思想の決定的な前進を示すものであつた。即ちアナ・ボルの共同戦線が完全に破壊されたのだつた。

(七月)——七日夜二時、私は佐々木孝丸、佐藤青夜の二人と中村屋の朗讀の會から雜司谷へかへる途中で、私の家から引きかへして來た日々新聞の自動車とばつたり逢つてゐる。記者は私を呼びとめて、有島武郎が信州の別墅である女性と情死を遂げてゐたといふことを告げた。私は電氣に打たれた人のやうに路上に直立して手を固く握りしめてゐた。何とも言ひ難い「怒りの感情」が私の身内を搔き廻はしてゐるやうに感じた。見ると、佐々木孝丸は二三軒先の小暗い軒燈の下で子供のやうに聲を立て、泣いてゐた。私は餘りの驚きに涙も出なかつた。「死ぬ筈はない……死んでゐられない筈だ……」

……と私は口の中で獨語をいひながら道を歩いた。

八日には赤化防止團の反動辯護士のために射殺された高尾平兵衛の社會葬が青山の祭場で営まれてゐる。この日二千餘の會葬者が集つて盛大な葬儀を営み、式後悲痛な哀悼歌が合唱された。この葬儀は有島武郎の死によつて一層深酷にさせられてゐたやうに感ぜられた。

この頃から、有島の死因や死の相手が次第に明瞭にされてゐた。彼の死の相手の女性は婦人公論の記者で、屢々私達を訪問して來たことのある波多野あき子であつた。私達は鳥取旅行の際、この女性から贈られたシュークリームが途中で箱の中でめちやめちやに壊はれて、溶けてしまつてゐたことを思ひ出した。然し、あき子は魅力のある美貌な女性であつた。

有島武郎と最も古い友人であり、出版事業の上でも色々複雑な關係を持つてゐた叢文閣主人足助素一は「泉」の終刊號で、有島を死に導いた事件の真相を發表した。私は「二つの手」といふ短い感想を送つた。有島の死は、戀愛に依つて生じた刑事問題的事件と、彼の虚無主義的哲學思想によつて決行されたものであるといふ結論がついた。私は「宣言」「第二文化の末路」「獨斷者の會話」「腫のない眼」等を再讀して、彼の死の直前の思想を知ることが出來た。彼の死後書齋の中で發見された十篇の和歌の中には下のやうなものがあつた。



世の常のわが戀ならばかくばかりおどましき火に身はや焼くべき

○  
蟬一つ樹をば離れて地に落ちぬ風なき秋の靜かなるかな

○  
明日知らぬ命の際に思ふこと色に出づらむあぢさゝの花

○  
命絶つ筈しあらば手に取りて世の見る前に我を打たまし

(九月)——一日、北海道の旅行を終へて歸つて來た足助素一を迎へて、私は秋田土崎の港にゐた。私達はこゝで大震災の報道を受けた。報道は甚しく誇張されてゐた。東京全滅！といふ噂さが田舎町にひろがった。私は病弱で少し氣むづかしくなつてゐた足助を伴つて秋田市へ出た。私はこゝでは、東京は火に包まれてゐること、食糧の略奪が行はれてゐること、戒嚴令の布かれてゐることを知つた。私は足助を秋田に残して、郷里黒石に立寄り、青森市では淡谷悠藏に送られ、四日夜東京に出發してゐる。沿道は全く戰鬪的混雜を呈してゐた。汽車中でも多くの流言が行はれて、自制力を失つた民衆が多くの悲劇を演じてゐた。私達の汽車は遅れて、六日の午前にやうやうに東京に着いてゐる。

家は壁は落ちてゐたが、焼けてはゐなかつた。避難民の配給は比較的よく行はれてゐた。民族的偏見、畏怖によつて行はれてゐる色々な悲劇をきくことは實に不快だつた。

七日、私は罹災者の見舞ひを終へて家に歸へると、ある粗野な風態をした男が交番まで同行を求め、私はその男と連れ立つて行つて見ると、交番では「お呼びした覚えはありません……」といふので、その男に訊問すると、返事をあいまいにして、姓名も告げずに行つてしまつた。私は狐にまつまゝれたやうな氣持で家へ歸つた。然し、このやうな男達はこの混亂の中で流言を放つたり、多くの犯罪を犯したりしてゐたのだ。毎日何處からとなく色々な噂が傳つて來る。大杉榮がやられたといふことや、小川、藤森、秋田が檢束されたといふ噂さが傳つてゐた。私は危険を避けるため、友人とも相談して巢鴨警察署の旅行許可書を得て、再び郷里に向つて出發した。大杉榮夫妻及び甥宗一少年が甘粕某のために不幸な最後を遂げたのは、その翌日の十六日だつた。この事件の發表されたのは、十六日で、同時に戒嚴司令官福田雅太郎は交迭させられ、憲兵司令官は被免され、甘粕、森等は軍法會議に廻附されてゐる。

大杉榮は、進歩的な思想家で、一種のアジテーターであつた。軍人の子供で、外國語學校の佛語科を出た語學のよく出來る男であつた。實行性の比較的乏しい人で、むしろ科學者らしい素質を持つて



るた。個人的には性格の弱さを持つた男であつたが、集團的にはいつでも自分を前に突き出さないうては置かないところがあつた。また舊道徳に對する意識的反抗の態度を誇示するやうな傾向は、保守主義者に對して彼の不道徳性を宣傳させることに便利を興へてゐた。大杉とともに生命を失つてゐる伊藤野枝は、南方的な魅力のある女性で、神近市子の戀愛の競争者であつたことは前の場所で既に記述して置いた。この不幸のあつた頃、病床にゐた島田三郎は、新聞報道を見て、「思想に對するに思想をもつてしないで、暴力をもつてするとは何事だ！」と色をなして憤激してゐたといふことを、彼の病床に侍してゐた人からきいた。良心的なブルジョア自由主義者の面目が躍如としてゐる。島田はその年に世を去つてゐる。

島田三郎は政治家としては、比較的不遇であつたが、それは、人間として可なり良心的であつたところから來てゐると思ふ。私は青年時代に彼の演説をきいてゐるが、彼がブルジョア自由主義者として、宗教上の奇蹟を否定する意味の演説をしてゐたのを記憶してゐる。彼は最後までブルジョア民主主義のための主張をすてなかつたことは、この大杉事件の批判でもその一面を知ることが出来るであらう。議會などで彼が度々技術的失敗を招いてゐたのは、今日の陰謀政治家のやうなタクテイクを缺いてゐたところから來てゐると思ふ。

(十月)——十三日、龜戸事件が發表された。この事件は大震災火災の混雜中に平澤計七、河合、近藤その他の労働運動の指導者達が不幸な死を遂げてゐることであつた。私達は今日でも、この事件の真相を正しく記述し、これを批判する自由を興へられてゐない。また實際不明な點も多い。然し、多くの記録や人の言葉によると、不幸な死を遂げた是等の人々の多くが、當時、自警團に加はり、罹災者の救ひ出しのために熱心に働いてゐたといふだけは事實であつた。この被害者の内の一人である平澤は、労働者解放のために文字通り寢食を忘れるといつたやうな男で、非常な熱辯家でもあつた。自ら労働者劇團を組織し、脚本を書下し、自分でも俳優の一人として舞臺の上に立つてゐた。私達はいつか彼の芝居を見るために、多くの演劇研究者達と本所の劇場を訪ねたことがあつた。

(十二月)——八日、大杉事件の甘粕は軍法會議の結果、懲役十年に、森は三年、他は無罪の宣告を受けてゐる。

この月二十七日に難波大助の事件があつた。難波は早稻田高等學院の學生で、政友會の代議士の息子で、コムムニステックな傾向の青年だといふことだけは解つた。彼は平沼法相に對して動機的一切を告白したといはれてゐるが、記事は解禁されずに、一種の不安を宿したまゝで、この自然的大脅威の年が暮れて行つた。何處かで絶えず人々の叫聲の聞えるやうな年であつた。



私はこの年、下のやうな仕事をしてゐた。

戯曲「手投彈」(解放) 同「アスパラガス」(早文同)「國王と乞食」(太陽) 同「偏盲禮讚」(解放)

## VI へビヤン時代

(大正十三年——昭和元年)

大正十三年(一九二四)四十二歳

關東大震災は、大きな傷あとを日本の社會に残したまゝ、一步々記憶の世界へ過ぎ去つて行つた。然し、いつでも耳を澄すと、何處かで人々の泣き叫ぶやうな聲がしてゐた。人々は、一寸した物音にも強い衝動を感じた。一旦京阪やその他の地方へ逃げのびた人々もそろそろ東京へ歸つて來た。復興！復興！といふ聲は機械的に響いてゐる。内包した矛盾をそのままにして、日本の社會は復興事業に急いでゐる。ローマの廢墟のやうな東京の焼土の上に、バラック建が一通り立ち並んでゐる。すると、安天ふら屋の店がバラック建のカフェに早變りしたり、そば屋の店が半分土間になつて、圓テイブルに椅子が並べられたり、子供洋服の店や、石油コンロの屋臺店が毎日のやうに殖えて行つたりした。そして動物の焼けたやうな臭氣が、砂ほこりと一緒になつて植民地のやうなバラック建の上を吹き捲くつてゐた。その中を人々は、血走つたやうな眼をして、その癖、何處か浮はついたりやうな足どりでぞろぞろと歩いてゐた。これが大震災の翌年の春頃の東京だつた。



然し、その間にも進歩的な思想家達や文學者達は生活のための健康な戦野を開拓するために努力してゐた。私達は思想の方面ではこの時代をヘビヤン時代と呼んでゐる。いふまでもなく、「ヘビヤン」とは、ローマの武將ヘビウス・マクスムスの名をとつたイギリスに於ける合法的社會主義運動「Fabian Society」に暗示された社會運動であつた。この運動は安部磯雄、山崎今朝彌等によつて提唱されたもので、當時の日本に於けるあらゆる流派の社會運動家が参加したものであつた。アナルヒストもコムニストもリベラリストもゐた。たゞ「反資本主義的」、「反軍國主義的」といふ二點で、共同戦線に着くといふことが約束されてゐた。

大震災火災前に、すでに個人主義的社會思想と闘争して、全く袂を別つたやうに思はれた「文線」の一部の人々も、またこの運動に参加してゐた。藤森成吉、江口渙、木村毅、今野賢三等もこれに加つてゐた。この運動は民衆の知識的啓蒙の目的で、時々講演會を開いたが、その効果が必ずしも大きかつたとはいへない。然し、この時代にヘビヤンの生れたといふことは、日本の思想運動がこの時代に何んなに困難なモーメントに遭遇してゐたかといふことを示してゐる。そして、確かにヘビヤンは後の時代の進歩的な運動の貯水池であつた。この時代の大家壯一のことを時々思ひ出す、ヘビヤンのあらゆる會合で彼は實際によく働いた。

面白いことは、この時代の日本文學は、極端に主觀主義的傾向を帯びてゐたことである。自然主義文學の亞流と思はれるブルジョア文學は、もはや當時の動搖してゐる社會面を寫し得なくなつてゐたし、つる先頃まで日本の新興文學の方面で覇を唱へてゐた人道主義文學も、大震災火災後の日本の社會生活にはもはや反應性を持ち得ないでゐた時、進歩的な文學者達は、ヨオロッパ大戦後にドイツを中心として起つた表現主義的藝術の影響を強く受け、自己の現在に持つ痙攣性を表現しようとおせつた。トラアの「轉變」や、カイゼルの「朝から夜中」までが愛讀されたばかりでなく、この頃の若い戯曲作家はこの主觀主義的藝術様式に影響された點が非常に多かつた。私も自分の藝術様式を發見する力を缺いてゐたがために、この表現主義的様式に影響されてゐたのを感じる。そして私は昭和二年にソヴェトへ旅行する頃までは、この主觀主義的影響から離脱することが出来なかつた。

詩の方面では一層ひどかつた。多くの詩人は、大震災火災後、極端に主觀的になつて、未來派的傾向からニヒリズムの色彩を帯びるやうになつて行つた。私は全く意味をなさない文字の羅列によつて、詩人と自稱してゐる「ダダイズム」のグループに時々訪問された。

私はこの年、「骸骨の舞跳」「幼兒の殺戮時代」の二つの詩の形式を持つた戯曲を書いてゐる。前者は、震災當時に於ける民族的動搖を描いたもので、後のものは、人間の無智のために新しい力の殺



戮されてゆく姿を表象的に書かうとしたものであつた。

私は、「骸骨の舞跳」では、自然の大脅威時代に演じた國民の無智に對する強い怒りを表現しようとした。この關節が音をたててゐるやうな身内の怒りを何うして表はさうかと思つた。私は甲冑や鎧に身をかためてゐる無智な××の群を骸骨にして、ワルツの音楽につれて死の舞跳をおどらせ、そして、この自然的、××のために倒れた多くの不幸な人々を慰めようとした。この着想は當時としては何うしても主觀的、瘡癩的な様式を選ばざるを得なかつた。歐洲大戰後に發生した表現主義の様式が、大震災後の日本文壇及び劇壇に迎へられた理由も、この社會的な相似性から來てゐるやうに私には思はれた。

大きな社會激動の直後に來る藝術が、詩及び演劇であることは、ロシア革命の場合によつても證據たてられてゐるが、震災直後に起つた藝術は、日本では演劇の復興であつた。

澤田正二郎は震災前から淺草で芝居をしてゐたが、この年の一月にはブラック建の劇場で「國定忠次」「日蓮上人」及び「震災餘聞」の三つの作物を上演してゐた。澤田は、前にも記したやうに、表現力の強い俳優ではあつたが、生活態度の英雄主義的傾向から、次第にファツシヨ的になつて行つた。この傾向のテムポを早めて行つたのはやはり、大震災による自然的、社會的脅威であつた。こ

の頃の澤田正二郎は、すつかり「國定忠次」になりすましてゐた。

私はこの頃、佐々木孝丸、佐藤青夜、川添利基などと先驅座の仕事をつゞけてゐた。この座は最初小ブルジョアの演劇研究者の集團であつたが、土藏劇場の試演後大震災に逢ひ、この年スコットホールにアナトール・フランスの「運まかせ」ストリントベルヒの「仲間同士」及び私の「水車小屋」をやつた。舞臺装置は柳瀬正夢であつた。この演劇研究のグループは、劇場商業主義に對する反對を標榜し、エレオノーラ・ジューゼの言葉を引用して「All or Nothing」(凡てか無か)のスローガンを掲げてゐた。然し、このスローガンのかげに既に二つの對立した力が動いてゐた。一つは社會的なものであり、他は藝術至上主義的なものであつた。前者は後ではトランク劇場、前衛座等のプロレタリア演劇の創立の一要素となつた。

小山内薫は、この年、築地小劇場の旗上げと共に華々しい活動を開始した。この劇場は、若き演出家であり、消費者である土方與志との藝術的協力によつて創立されたもので、その第一回の公演はゲーリングの「海戦」によつて初められた。これは文字通りの「海戦」であつた。小山内は、自由劇場の失敗以來、長く休火的藝術生活をつゞけてゐたばかりでなく、文壇の二三の方面に論敵を持つてゐたが、この演劇行動によつて、再びその存在を認められ、またその敵をある程度まで屈服せしめた



といふ感じがした。小山内と、當時の論敵との對立は小山内の藝術至上主義と小ブルジョアの通俗主義との對立であつたと私は理解してゐる。小山内は當時の通俗的傾向を帯びた創作戯曲を喜ばずに、ヨオロッパで評價を得てゐる戯曲の翻譯を尊重したといふ點も、二三の作家から反感をいだかれた理由になつてゐた。この「海戦」と、チエホフの「白鳥の歌」マゾオの「休みの日」の上演は、同時代に對しての一つのデモンストレーションであつたばかりでなく、またこれによつて若き演劇觀衆を動員し得たし、また多くの作家、俳優、舞臺美術家の發生のための強い刺戟を與へてゐた。

この年築地小劇場は、ロマンローランの「狼」、チャペックの「人造人間」、カイゼルの「朝から夜中まで」等を演じた。「人造人間」は不合理な労働の搾取による人間生活が一度破壊されて、その後に全く新しい人間の發生することを暗示した芝居で、やゝ觀念的なものではあるが、大きな自然的脅威を受けた後の日本の進歩的演劇觀衆には大きな喜びを與へた。この演劇は土方與志によつて演出されたものだつたと記憶する。「朝から夜中まで」で若き俳優の千田是也が主人公の出納係として立派な技術を示してゐた。千田は次第に階級的意識に眼醒めて、後では、もう一人の俳優小野宮吉と共にプロレタリア演劇の領野に走つたが、二人とも長く××××苦惱をなめてゐる。

私はこの年七月八日に、信州輕井澤に足助素一を訪ひ、あの大高原の火葬場に有島武郎とその同伴者の火葬に附された跡を見てゐる。私達は禁獵區の小鳥の鳴聲の中を泳ぐやうにして、幾つかの林を通りすぎると、道の兩側に野薔薇や山かきつばたや、秋草が私達を案内してくれるやうに咲き亂れてゐた。私達は赤い煉瓦の煙突を目あてに、澄んだ高原の上を尙も歩いて行つた。煙突の下に小さな死籠が一つ立つてゐて、すぐその横に二つの人間の形をした窪地が夏草で縁どられてゐた。こゝである二人の肉體が灰に歸つてしまつたのである。私達は長い間その窪地の傍に立つてゐた。

私達はこの日の午後、上信國境の時町で、有島が「クララの出家」を書いた家を訪うて故人の生活をしのんだ。古びた古驛からは妙義榛名の山々や、利根の白い流域が一目に見おろされた。私はこの旅行では、二人の人生の逃避者が如何にしてこの自然に包まれながら死んで行つたかを想像してゐた。私は歸京後「高原挽歌」といふ長詩を作つて中央公論に送つた。私は殆んど十年ぶりで詩を書いた。生活が藝術の様式を選択するといふことは實に興味のあることだと思つた。私は藝術のジャンルといふことが理解されずに方法論だけを機械的に論ぜられることは、何れだけ作家の活動を障げてゐるか知れないと思つた。私は「高原挽歌」を書いた時ほど、詩に對する愛着を感じたことはなかつた。

私はこの年の十二月に信州伊那地方の講演に招かれてゐる。辰野から伊那電鐵に乗りかへると、伊



勢松坂の農民組合の河合といふ青年が飯田に行くのに逢つた。二人の旅行者は寒さにふるへながら初対面の挨拶を交はした。全く煖房装置の施されてゐない伊那電車の中は、殆んど齒の根の合はないほどの寒さであつた。飯田では北原といふ進歩的な青年に迎へられた。この地方は、曉民共産黨の事件當時に二三の犠牲者を出したところで、天龍峡谷に添うた村の農村青年達は、日本の農民の内でも早く覺醒した人々であつた。この地方の農村は、半農、半勞（生絲工場）の生活で、生活に餘悠のあるところから、讀書をしたり、講師の招聘をしたりするだけの力を持つてゐた。然しこの地方の青年達は、一般に知識的ではあるが、組織力を缺いてゐた。それは半自半作が多く、貧農が少いのが根本的な理由であつたらしい。

飯田の町から見た伊那の溪谷はすてきた！ この大溪谷は世界的に知られてゐる溪谷だといはれてゐる。私は飯田の町を足場として、青年達に案内されて村々の青年達に逢つた。私は到るところで生活力に溢れ、知識欲に燃えてゐる青年達を見た。

私はこの年は比較的創作力を持つてゐた。

戯曲「幼兒の殺戮時代」（我觀）、同「新しき太陽」（文藝と宗教）、同「骸骨の舞跳」（演劇新潮）、同「牢獄の誕生」（週刊朝日）、同「棺を圍む人々」（新小説）、同「アイヌ族の滅亡」、同「女」（女性

改造）、詩「高原挽歌」（中央公論）

### 大正十四年（一九二五）四十三歳

思想的には日本はまだヘビヤン時代に屬してゐる。一旦戦線を破壊されつくしたやうに思はれた労働者への働きかけの運動も、各地域、各職場の労働者、勤勞者の執拗な活動によつて再建されかけて來た。思想及び労働運動に關する啓蒙的な出版物もそろそろ出揃つて來てゐる。

また一方、日本の經濟的必要性は、長く懸案になつてゐた日本とソヴェトとの國際的接近を促進して來てゐる。二月には日露國交恢復紀念會が、上野精養軒で行はれてゐるが、この會には二千人以上の參會者があつた。若いソヴェトの通信代表スレパツクは、この時初めて大衆に對つて發言を許されたのであつたが、彼の熱烈な演説は聴衆に強い感動を與へた。然し、日本の代表者の一人は、日露國交恢復の結果「シベリヤの廣野に日本の米が實るやうになるでありませう。」といつたので、滿堂の失笑を買つたのを記憶してゐる。これらの代表者達は所謂「利權屋」といはれてゐる種類の人々であつた。この日露國交恢復と同時に、嘗つて議會で否決された民衆の××××××法案が、急速に修正され、準備されてゐた。これこそ即ち治案維持法案と稱されるものであつた。この法案は進歩的







つてゐたらしかつたが、次第にその苦痛が強まつて行つた。母は苦痛に耐へきれないやうに、疊の上  
に打ち臥せになつてしまつた。母は苦しみながら「たゞの病氣でへんぢや！」と聲をたててうなり  
初めた。私はかゝりつけの醫師の診察を求めると、醫師は暫く首をかしげてゐたが、彼はすぐに他の  
醫師の來診を求めた。間もなく私達は二人の醫師から悲しむべき宣告を受取つた。母の病氣は「陽閉  
塞」であつた。二人の醫師は切開手術を希望してゐたが、母はその手術に耐へ得るか何うか、一つ  
の疑問として残された。その間も母の苦痛が一刻ごとに増して行つた。應急治療によつて少しく眠つ  
たかと思ふと、すぐに覺醒して苦痛を訴へた。母の小さな腹部が瓦斯の停滯のために、蛙の腹のやう  
に膨れて來た。母は臥床してゐることも、起きてゐることも出来なかつた。私は母の身體を抱きかゝ  
へて、その首を私の肩に倚せかけさせた。その時母は初めて樂さうにして言つた、「われだば幸福者  
だぢや、自分の抱いだ子供に抱かれて死んで行くんだもの！」といつて、歪んだ顔で笑つた。家内の  
者はわざと聲をたて、笑つた。私は母が覺醒する度に、母の身體を抱きかゝへてゐたので、右の肩が  
腫れあがつてゐた。母は二十一日の午後二時頃に最後の呼吸をひきとつた。私は非常な平安な氣持で  
母の顔を見た。私はこの時位「虚無」といふものを讚美したことはなかつた。

この頃、私達のグループの中に、フリジアと綽名された一人の女性が入つて來てゐた。フリジアは  
銀座のある商家の娘で、ガンダラ佛のやうな顔をした女であつた。商人の娘らしくなく、大杉榮の讀  
者の一人で、ヘビヤン協會の聽講者で、日露藝術協會の同情者の一人であり、また築地小劇場の熱心  
な觀客の一人であつた。私は彼女を中心とした「フリジヤの會」といふものに時々出席したことがあ  
る。青年達は、文學の研究會を開いたり、ピクニックをしたりしてゐた。然し、フリジヤの家庭は特  
別な事情から可なり暗いものであつた。従つてフリジヤ自身も表面明い面貌をもつてゐたが、殆んど  
二重人格に近いほどの矛盾性を持つてゐた。彼女が私達のグループに入つて來たのは震災直後であつ  
たが、この年の八月頃、彼女は二科會に出品して有望視されてゐた若い畫家の恒川との結婚と同時  
に、彗星のやうに私達のグループから去つてしまつた。フリジヤのやうな女性が東京の町家から飛び  
出して來たといふことも、大震災の興へた社會的激動の結果であつた。然し、彼女はその同伴者の  
恒川の死によつて、生活を一變し、再び生家の帳場格子の中に座ることになつた。

社會的には、日蘇の關係は益々接近して來て、それが藝術的な反映としては、日露藝術協會の創立  
の機運を刺戟したり、日露交響音樂會の開催を促したりした。殊に日露交響音樂會は、四月二十八日  
に歌舞伎座で華々しく開かれてゐるが、ロシア側の音樂者は可なり優秀な技術家達でゼロのペツケル  
の如きは十九歳の青年であつたが、すでに世界的に評價されるほどの名人であつた。この交響音樂會



は、日ソの國交を促進させたといふ社會的效果よりも、日本の音樂に實際的な刺戟を與へたといふ點で特筆さるべきであつた。これ以來、日本に於ける西洋音樂の技術は、急速の進展をしたといはれてゐる。

六月五日には、コツプ大使の歓迎會が帝國ホテルで開かれてゐる。初代大使のコツプはスパルキン博士と同席してゐる。この會ほど私達に歡喜と昂奮を與へたものは少かつた。當日後藤新平が日蘇國交恢復の斡旋者として、コツプ大使と快談してゐた光景を私達は愉快に眺めてゐた。當時後藤新平はブルジョア政治家としては最も進歩的な點に立つてゐた。ソヴェト聯邦共和國の國歌、「インタナシヨナル」が日本軍樂隊によつて合奏されたのは恐らくこれが最初であつたらう。私はこの日講演者の一人として「日本文學に影響したロシア文學」について語つた。

然しこの年の十一月三十日、十二月一日の二日に渡る日本における最初の無産者の政黨である「農民無産政黨」は政府によつて禁止されてゐる。政府は右翼を標榜した無産黨の出現するまで、すべての無産政黨を禁止する意向らしかつた。總同盟は「農民無産黨」に對して最初から不参加を宣言してゐた。このやうにして、無産者の對立、分裂が助長されて行つた。この勞働者及び農民の對立が明瞭になつた時、ヘビヤンの存在は全く無意味になつたので、十二月十五日に總會の決議によつて協會は

解散を宣言した。日本におけるヘビヤンの生命は、僅かに二ヶ年間であつた。

私はこの年、下のやうな創作をしてゐる。

戯曲「初期のエロシエンコ」(早文)、同「二つの太陽」(中公)、同「悲しみのオキクルミ」(改造)

### 昭和元年(大正十五年改元、一九二六) 四十四歳

私はこの年までに娘の教育のプログラムを一通り終へた。その結果、人を教育することは何んなに困難であるかを知つたばかりであつた。

三月十七日、ソヴェトの作家ピリニヤーク夫妻が東京に着いた。私は日露藝術協會の茂森、金田、尾瀬の諸君とともに歓迎會の準備をしてゐた。この日はよく晴れた明い日であつた。タス通信のスペックやソヴェト大使館の二三の青年達と東京驛のプラットホームに並んで汽車を待つてゐた。このやうな時でも、私達は「名譽ある××」に包圍されてゐた。

ピリニヤークは背の高い元氣さうな男で、その妻君のオリガはモスクワ小劇場の女優で美しい女であつた。私達はプラットホームでは會話を禁ぜられてゐたので、無言で握手を交はしたばかりであつ



た。私達はピリニヤーク夫妻を旅館に送つてほつと安心した。ピリニヤークは革命後の最初の作家で、イデオロギイ的には小ブルジョア的で、アナルヒステックで、自殺を遂げた農民主義的詩人エセイニンの友人であつた。ソヴェトは彼を「同伴者」と呼んでゐた。私達はソヴェトの批判に束縛されずに、單純に最初に訪問して來たソヴェト作家として彼を歓迎した。私達はピリニヤークと同じ頃、東京でユデア作家のヒルシベン夫妻に逢つてゐる。

ユデア作家ヒルシベンは、一般日本人に殆んど知られてゐなかつたが、ユデア文學の發展の上で見逃すことの出来ない人であつた。近代ユデア作家達は「近代ユデア語」によつて、小説戯曲の創作をしてゐたが、それらの作物はアメリカ及びヨーロッパ各國語に翻譯されて既に世界的な批判を受けてゐるものであつた。ヒルシベンは、有名なユデアの戯曲家ピンスキイなどの友人で、ユデア演劇運動の指導者の一人であつた。この演劇運動は、モスクワでは立派な劇場を持つて居り、その俳優達は技術的に一流の域に達してゐた。私達は、ピリニヤークやヒルシベンの在京中、屢々會合や觀劇で彼等と話す機會を持つたが、彼等の思想や藝術的態度は何うであらうとも、私はすでに、ヨーロッパの開かれた世界には、もう新しい文化が展開し成長してゐることをはつきり感ずることが出來た。私はピリニヤークの在京中にロシア語の勉強を初めた。私達はその頃極端な主觀主義の藝術運動に惱まされ

てゐた。私自身も極端に主觀的自己癡癡的な藝術形式の中から一步も踏み出し得なくなつてゐた。私はこの境地を離脱するためには、生活を一變するよりはかはないと確信した。私は毎日ロシア語の自修をつゞけた。この頃私の周圍にゐた青年達は、共同印刷の爭議應援のために奔走してゐた。彼等は皿、小鉢を叩き喇叭を吹いて珍妙なオーケストラを組織してゐた。然し私は何うしてもすべてを投げ打つて、その中に身を投ずることは出來なかつた。靜かに讀書をしたり、執筆をしたりしてゐても、すぐ窓の外で誰かゝ高い聲で叫んでゐるやうな氣がした。その頃「新小説」に書いた「先生抹殺」といふ戯曲は、その頃の心境を書いたものであつた。「六月の幻想」といふニヒリステックな戯曲もまた、この頃の私の生活を反映したものであつた。

十一月には、私達のグループは一人の才能ある女性を失つてゐる。それは淡谷いよといふ同郷の女であつた。彼女は結婚後夫の母と不和の状態をつゞけてゐたが、その苦痛に耐へかねてとうとう自殺を遂げてゐる。淡谷いよは、日本女子大學の卒業生で、文學、音樂及び演劇に對して理解を持つた女であつたが、一貫した目的に向つて進む忍耐力を缺いた女性であつた。美貌な女であつたが、幼年期に家人の不注意から頭部に大火傷を負ひ、生涯、西洋鬘で前頭部を隠してゐた。このことが、すでに彼女の生涯に暗いものを投げてゐたやうに思はれた（淡谷いよは聲樂家淡谷のり子の従姉妹であつ



た。

私はこの年北海道及び大阪地方に旅行をしてゐる。北海道の旅行は私に大きな喜びを與へた。私はこの旅行で去年あたりから自分の上に襲ひかゝつてゐる痙攣的な雰圍氣から初めて離脱させられたやうな氣がした。私は札幌大學の講演を終へた後、青年達に案内されて定山溪に遊んでゐる。こゝはかつて有島武郎の度々來たところだといはれてゐるが、こゝの大溪谷にはまだまだ原始的な自然が残されてゐた。十一月の初めで、紅葉が溪谷の紺色の水に落ち散つて來る様は、南畫的な風景であつた。私は汽車や、宿屋では近代ロシア史の知識を得ることに骨折つた。ロシア語の文法や會話の稽古も私に子供らしい喜びを與へた。私は少年の時のやうな新鮮な知識欲で、語學の勉強に没頭した。「ソヴェトへ！」先づ「ソヴェトへ！」の叫び聲が、私の血を沸き立たせて呉れた。十二月には「日本プロレタリア文藝聯盟」が結成されてゐる。改元、昭和元年となる。

私はこの年、下のやうな作を公けにしてゐる。

戯曲「父の假面」(早文)、同「モーゼの殺人」(テアトル)、同「スダラの泉」(早文)、同「先生抹殺」(新小説)、同「六月の幻想」(演劇新潮)、同「山の言葉」(早文)、同「馬と人の群像」(解放)。

(この項終り)

## Ⅶ ソヴェート時代(其二)

(昭和二年——三年)

昭和二年(一九二七年)四十五歳

ソヴェートへの旅行の月が次第に近づいて來た。私は娘の教育を一通り完了させるために、近代哲學史と社會科學の講義をつゞけながらも、自分のためにロシア語の勉強と、近代ロシア史の知識の獲得のために努力した。その頃、尾崎義一(上田進)は私のためにトゥルゲエネフ、チエホフ等の原文を読んで呉れた。新しい言語の知識は私に大きな喜びを與へた。勿論私はロシア語についてはほんの少しの知識しか持ち得なかつたがこの旅行を前にして感じたやうな言語に對する愛情は、二十年前エスペラントを學び初めた時以來味ふことの出來ないものであつた。一體言語に對する愛情は、人類の知識に對する原始的な執着心の一つであり、同時にそれは人類自體に對する愛情の表現でもある。

尙ほ私はこの旅行の準備中に感じたことは、日本に於けるインテリゲンチヤとしての文學者の知識的貧困といふことであつた。私はこの二十年の間何んな知識を獲得し得てゐたらうか? 自然に對して、社會に對して私は何んな認識を持つてゐたらうか? 私はこの旅行に先立つて、知識の第一歩か



ら出發しなければならぬといふことを感じた。私はこの時代に労働者生活の中から生れて、既に立派に社會觀を獲得して、脇目もふらずにプロレタリア××のために働いてゐる二三の青年に接して、インテリゲンチヤの知識的貧困といふことを一層深く感じさせられた。

また、この旅行前に大使館のスパルキン教授は私の戯曲「幼兒の殺戮時代」を露譯してカーメネバ夫人に送つて呉れたことや、ロシヤ美術展のために日本へ來られたプーニン、アルキン等との接觸などは私のソヴェートに對する憧憬を一層深いものにした。

私は七月、日本政府のパスポートを得て間もなく芥川龍之介の死に接した。私はこゝで彼の死について記して置く必要を感じる。私は芥川については殆んど知識を持つてゐなかつた。彼は私達と同時代の人間でありながら、全く別な道を歩いてゐた。然し、私はこの年の五月二十日に青森市の旅行で彼に逢ひ、同じ旅館で一日を送り、また同市の公會堂で一緒に講演もしてゐる。この旅行は、改造社の圓本宣傳のためになされたもので、私はこの時、芥川、片岡（鐵兵）等と新潟行きの汽車に同乗した時のことをはつきり思ひ浮べることが出来る。片岡鐵兵が作家としてプロレタリア側に轉向したのもこの年であり、芥川の死んだのもこの年であつた。この時代の日本は思想的に大きな激動の時であつた。芥川、片岡が立つて講演をした青森地方の聴衆の大部分は、農村の最も自覺的な青年達及び都

市の進歩的インテリゲンチヤであつたから、芥川、片岡の演説が何のやうなものとして彼等に受入れられたかほど想像がつく。

芥川はこの時には、強度の神經衰弱で、殆んど生活に對する反應力を失つてゐた。味覺がなくなつて行くやうな氣がする、と彼は私に語つてゐた。持續的な睡眠不足で、絶えず睡眠劑を持つて歩いてゐた。アダリンかベロナルの藥嚙が、芥川の寢臺の下にころげてゐたのを私は記憶してゐる。その頃の東北の文學青年達は文學フアンの生活をすて、農民解放運動などに合流してゐる時であつた。芥川は、私の友人で農民組合の仕事をしてゐる淡谷悠藏にむかつて、

一君は實に立派な身體をしてゐますね、君のやうな健康な身體を見ていると、銃殺して見たくなりますね。」

と笑ひながらいつたといふことを、私は淡谷自身からきいたことがある。芥川は七月二十四日に死んでゐる。正確な量の睡眠劑を飲んで文字通り永遠の眠りについてゐる。

私はこの年の九月の十九日に徳富蘆花の死に接してゐる。私は二十二、三歳の頃この文學者を演壇の上に見てゐるが、その時代は彼の著述の「思ひ出の記」「不如歸」「黒潮」などが當時の青年達によつて熱狂的に愛讀されてゐる頃であつた。蘆花がその兄の蘇峯と絶交した時の文章を讀んで、私達は



非常な熱情をもつて彼を精神的に支持したものであつた。彼は一九〇六年（明治三十九年）に單身エルサレムの巡禮の途に就き、歸途ヤスナヤポリヤナにレオ・トルストイを訪うてゐるが、晩年の蘆花は「日本から日本へ」「富士」等を書いて次第にファツシヨ的傾向を持つやうになつてゐる。私は日本の先覺者達が、その晩年に何うしてこのやうなファツシヨ的になり、反勞働者になつて行くのか解釋に苦しむ。

私は出發間際までに文學者の會合、エスペランテスの會合及び私の旅行を紀念するために行はれた築地小劇場の特別公演等の諸會合に出席した。私は何んの權利によつてこのやうな好意を受けるのか自分では解釋出来なかつた。私はルンペン的で、不勉強で無精で他人に對して何等の親切を示してゐないのに、多くの友人達は私の旅行に對して身に餘るほどの好意を示して呉れた。私は長い間、日の光を見ない土鼠のやうな生活をしてゐたと考へてゐたのに、今の自分は小鳥のやうに空に舞ひ上つてゐるやうに感じた。小山内薫、土方與志の好意で、私の小さな戯曲「埋れた春」「國境の夜」及び「手投彈」が築地小劇場で脚光を浴びてゐるのを後にして、九月三十日の夜、ソヴェートの旅に立つた。同行者はメイエリホリドの助監督ガウズネル及び鳴海完造の二人であつた。鳴海は私の同郷の人でロシア文學の専攻家であつた。

私達は十月十二日の夜、午後八時頃に列車の右手に美しい極光を見たが、これはシベリヤ旅行の最後の夜で、十三日の午前十一時頃には長い間夢想してゐたモスクワ驛に着いてゐた。長い旅行を終へた人々とそれを迎へる人々との間に行はれる盛んなキスの音の中を、私達は最初のモスクワの土地を踏んだ。文化聯絡協會（БОКК）の代表者達、ピリニヤーク夫妻、黒田乙吉等の人々は私達を温い手で迎へて呉れた。私達は自動車で赤の廣場に近いバリシヤヤ・モスカウスカヤ（グラランド・ホテル）に入つた。私はその夜、ホテルの食堂で開かれた歡迎會に出席した。この會にはカーメネバ夫人を初め、第二大學總長のピンケキツチ教授も列席した。この日はモスクワの初雪であつた。バルコニーに出ると、クレムリンの澤山の尖塔が煙つてゐるやうに立つてゐた。然し、この雪は根雪ではなく、一度消えたり積つたりした。

私は十月十四日からプランを立て、ソヴェートの新社會の視察をしなければならなかつた。私は今ソヴェートの第一の印象を記録して置く必要を感じる。なぜなれば、こゝには全く異つた社會の組織が建設されて、それが強力に進展してゐるからである。何んと辯護しても、私は一般の日本文學者と等しく政治的に訓練されてゐない人間である。また廣い意味でイデオロギー的にも教育されてゐない人間である。一言でいへば非組織的の人間である。そのやうな人間の眼に映じたソヴェートの社會、



文化、教育、演劇の第一印象、これは興味のあることである。私はそのことに關しては旅行記などでも充分記すことは出来なかつたが、この記録にはその必要を感じる。

私にとつて、ソヴェートの第一印象は、烈しく回轉してゐる大きな球體に接するやうな感じがした。一つの組織體が、そのまゝで動いてゐるやうな感じである。統制されたもの、統制されようとする、統制されないものがごつちやになつてゐるが、その中に一つの運動だけが強力に一つの方向をとつて動き出してゐる。もし、少しでも忘れてゐると、その運動を知る事が出来ない。教育、文學、演劇について見ても、それは靜止した状態としては少しも知ることが出来ない。それを學ぶためには自分も急テムポで動いて行かなければならない。私はその意味でソヴェートの旅行を自分にとつて有益なものであつたと考へてゐる。その頃、フランス代表のアンリー・バルビユスは、多くの統計を得てウクライナ地方の實地視察に行つてゐる。私はバルビユスのソヴェート視察の勤勉さに強い刺戟を受けたものゝ一人であつた。私は十一月七日の××紀念日までの間に、非常なテムポで一般施設、託兒所、學校、演劇、クラブに關する視察をつづけた。私はイデオロギイによる統制社會に行はれてゐる新しい文化の性質方向がぼんやりながら理解されて來たやうに感じた。

私は「友の會」の準備會で初めてアンリー・バルビユスに逢つてゐるが、バルビユスは詩人風の瘦せた

長身の人で、その容貌からいへば野口米次郎を聯想させるやうな人であつた。バルビユスの聲はやさしくて、ウクライナ地方の統計を讀み上げてゐる時、ドイツ側の代表者達は居眠りを初めたほどであつた。十一月に入つてから人類の歴史の上でも紀念すべき多くの會合が行はれてゐるが、その内の重なるものを擧げると下のやうなものであつた。

- 一、モスクワ・ソヴェート大會（十一月六日大劇場）
- 二、シベリヤの會（同日、ソヴェート中央會館）
- 三、革命紀念祭（十一月七日、クレームリン「赤の廣場」）

（第八）



昭和二年、四十五歳の著者（尾瀨、アルキン、秋田、鳴海、小山内、米川、カメネバ夫人）



- 四、民族救援運動の會（十一月九日、パリシヤヤ・モスカウスカヤ・ホテル）
- 五、ソヴェート友の會（十一月十日、職業組合會館）
- 六、文學展覽會（十一月十日、ゲルツェンの家）
- 七、プロレタリア作家大會（十一月十四日、「印刷の家」）

十一月十六日に、私はカフカズ旅行の一行に加つてゐる。この一行には、私の他日本の代表者として米川、尾瀬の二人が加つてゐる。この旅行記は「若きソヴェート・ロシア」に記録して置いたから、ここには精しく記載する必要を見ない。然し、たゞ二三の見落した事實を記録して置かう。このカフカズ旅行に加つた一行二十餘名は各國の進歩的な大學教授、文學者及び勞働運動の教育的指導者で、殆んど二十年、三十年の間、民衆解放のために働いた人々であつた。私はそれらの代表者の經歷を知つて、自分は同じ資格で旅行する権利を持つてゐるか何うか疑つたほどである。勿論これは單に政治的意味でいふのではない、廣い意味の文化的業績の上からいふのである。

私はウクライナのハリコフ市郊外の大寺院（モナステリー）を訪問した時のことを旅行記に記して置いたが、あの大寺院はツアーリズム時代に大僧正のゐた有名な寺院であるが、今はマクシム・ゴリキイの名譽校長をしてゐる浮浪兒學校になつてゐる。マクシム・ゴリキイが伊太利の療養所からソヴェートへ歸らうとした時に、その決心をさせたものは、この學校の生徒からの美しい手紙であつたといふ事は餘りに有名な物語になつてゐる。最近ソヴェートで製作された有名な映畫「人生案内」はこの寺院を舞臺にしたものである。私達は浮浪兒達の學校生活を實際に目撃したので一層深い感動を與へられた。

ウクライナ地方は、全ソヴェート聯邦でも最も豊饒な地方で、所謂「黒土」地方といはれてゐるところであるが、従つて昔からこの地方特有の文學、演劇、民謡を持つてゐた。今日でもウクライナは多くのソヴェート作家を出して居るばかりでなく、ウクライナの演劇は、世界的な興行價値を持つてゐるといはれてゐる。私達の見た「ドラマ劇場」の演劇の如きも立派な演出であつた。またハリコフの「産業會館」は、その設計者を世界的に募集したといはれるほどのもので、この建築物自身が一つの市街乃至は小都市を形式するといつていゝやうなものであつた。この建築物は、ソヴェートの新建築物の先驅をなすものであつた。これによつても、ウクライナ地方はソヴェートの全生産の上で重要な位置を占めてゐることが解るわけである。従つて西ヨーロッパの諸勢力が、いつでもこの地點に着眼してゐるといふ理由も私達に理解されるのである。ウクライナの若い詩人や、劇作家達は一行をハリコフ驛に送つて呉れた。彼等は片言のフランス語やドイツ語で別れを告げてゐた。



十一月二十日私達の汽車はハリコフ市を立つて、裏海沿岸の石油港バクーに向つてゐた。この汽車の中でオーストリアの代表のクライン老人は、私が震災直後に書いた「骸骨の舞跳」のエスペラント譯を持つて私達のゐる車室に入つて来て、

『君が、この本の著者と同一人だといふことを知らなかつた。私はこの中の小さな戯曲「スダラの泉」をギリシヤの詩人カザン・ザツキに翻譯してやつたところだ。今新たに君と握手をしよう。』といつて私の手を握つた。

私はこの時、自分の作物に對して少しの自信も自負心も持つてゐなかつたが、この言語及び言語の創始者に對して深い感謝の情をいだかされた。

私はカフカズ地方の旅行では、この地方の風土の美しく、また日本のそれによく似てゐることや、その民族的な特長について深い興味を感じた。この地方は雑多な人種の集つてゐるところで、純スラブ系、トルコ系、タタール系の人種は從來全く別々な生活を營んでゐたが、ソヴェート政權の確立と共にソヴェートの政治の統制のもとに新しい社會生活を營んでゐた。從來各民族は、民族の信仰、習慣、言語、文化の關係で、決して共同生活をする事が出来なかつた。従つてソヴェートはこの地方の教育のために、何れだけ力を傾注してゐたかといふことは、學校教育の方針やその設備などでもよ

く理解された。例へば各都市とも自然科學、醫學、産婆學の普及に對して意を用ゐてゐるのもその一つである。私はバクーその他の諸都市の學校で、グルジンやタタールの娘達が産婆學の講義を受けてゐるのを度々參觀して強い感激を受けたことがある。この地方では、昔から出産に關して澤山の迷信的な行爲が行はれてゐた。この新しい娘達によつて、それらのものが次第に解消されて行くといふことを考へるだけでも私には嬉しかつた。

また、この地方では女は一樣に薄い布の面紗(チャードラ)を頭から冠つてゐた。街を歩く時でも水を汲む時でも、學校へ行く時でもいつでもそれをかぶつてゐる。一見すると大變美しいものであるが、これは同時にこの地方の女性の奴隸的地位をよく示してゐるものでもあつた。オーストリアのクラインは、一この地方の娘達はヴェールを投げ棄る運動を起してゐるさうだが、旅行者にとつてはヴェールをかぶつてゐる娘達も美しいものだ。』といふ意味のことを私に言つて笑つたことがあつた。

この地方の女性解放の運動では、ツァーリズム時代のプロステチユートが組織化されてゐるといふ點で注目されていゝと思つた。何處の國でも、人生で最も不幸な位置にあるプロステチユートが、社會的に目醒めるといふことは、先づ不可能なものだとされてゐる。ところが、バクー市の婦人俱樂部の指導者は、ツァーリズム時代のプロステチユートであつたといふことは私達の注意を喚び起した。



私は今でも、その女指導者の印象的な顔を忘れることが出来ない。丈の高いグルジン風の細い鼻をして、少し暗色の皮膚をした女で、髪の一部だけが白くなつてゐた。私は旅行記にも記して置いたがベルデニームの代表者が、この地方の賣娼婦について質問した時、「そんなものはこの地方にないしまた必要ありません！」と言つた時のりんとした態度を私ははつきりと思ひ浮べることが出来る。

アジャルバイヂヤンスカヤ共和國の首府バクーは、裏海に面した人口十四五萬の都市で殆んど無盡藏に包含されてゐる石油地層の上に建てられた近代的都市であつた。こゝで生産される石油は今日では輸送管で黒海沿岸のバトムに送られてゐる。五ヶ年計畫の第二年目に、石油の生産額だけは既に豫定額を超過してゐたといふことが報ぜられてゐた。

私達は十一月二十三日にこゝの文學俱樂部でこの地方の音樂演奏會に招かれてゐるが、こゝでは八弦のターラや胡弓に似たケマンチャといふ樂器の演奏を聞いた。この後の方の樂器は明かに支那の胡弓と同じ系統に屬したもので、鼻のひくいウズベキスタンの娘がその樂器につれて踊つた。その踊り方に日本の踊りと餘程似かよつたものがあつた。例へば、ある形のところで、急に靜止して見へを切るやうなのがそれである。

十一月二十四日にバクー市を立つてチフリス市に向つてゐる。こゝは裏海と黒海の大きな海にはさ

まれたカフカズ山脈の溪谷を流れてゐるチフリス河を跨いだ人口二十萬ほどの美しい古都であつた。この邊の山には中世トルコ人によつて建てられた圓筒形の城が到る處にあつた。それは丁度、日本の各地に残存してゐる古城と同じ歴史的意義を持つたものであつた。こゝの大學には東西兩文化の融合を語るやうな文献や、蒐集や、發掘物が澤山にあつた。中でもこの邊から全ロシアにかけて生息してゐた先住民族スキテン（スキタイ）に關する材料は貴重なものであつた。この民族は今のスラブ民族が現在の土地を所有する以前に全土に生活して、ある種類の文化を持つてゐたことは、發掘された壺の繪や器物などで知ることが出来るのであつた。この民族は果して何んな種類の人種であつたか、世界の人類學者の大きな課題になつてゐる。

然し、私は今もつと重大な事を記録しなければならぬ。それはツァーリズム時代のこの地方の青年達の思想運動のことである。この地方の青年達はツァーリズム時代に最も早く眼を醒した人々であつた。その青年達は勿論最初は人道主義的であつたが「ナロードニキ」の運動の消滅後、多くの青年達はサンヂカリズム的思想に影響されて民族解放のために働いた。私はバクー、チフリス、バトムにかけて、勝れた才能の青年達がツァーリズム時代に多く捕へられて牢獄に投ぜられたやうな歴史を讀んだことがある。スターリンのやうな勝れた政治家もこのチフリスの人であつたし、今のアジャルス



タン共和国の副議長をしてゐるヨゼフ・ブリガーゼなども、バクー・サンデカリストの一員であつたといふことである。

十一月二十七日に私達はパトム市に着いてゐる。こゝでは私達はヨゼフ・ブリガーゼの案内で、彼の長く投獄された監獄の視察をした。これがソヴェートの監獄を視た最初であつた。ソヴェートでは「監獄は労働の再教育」をやる所であるといはれてゐるが、私はこゝの監獄附屬の劇場を見て強い興味を感じた。こゝの小劇場では最初有名な戯曲を選んで演出してゐるが、次第に囚人自身の創作戯曲を上演するやうになつた。戯曲も、演出も、装置も、配光も悉く囚人の手によつてなされてゐるさうである。

監獄を出て廣々とした黒海の岸に出た時、人々は申合はせたやうにすべくした小石を取つて黒海に向つて投げた。最初は誰か徒らに投げたのが感染的に傳はつたものらしい。黒海の廣い胸の上で小さな飛沫の上るのは私達に子供らしい喜びを與へた。

十一月三十日には、私達の一行は深い紺色の黒海の波の上にある。圓い厚いガラス戸から見ると、私達の船は海の底にゐるやうに思はれた。この地點は一番波の荒いところらしい。私達は三日の航海を終へて、十二月一日にグラトコフのゐたといふ有名なセメント工場のあるノボリススクの港に上陸した。

十二月三日私達の列車はモスクワの燈火の見える地點に達した時、私達は初めてカフカズの旅行の終へたことを感じた。人々はチエホフの芝居の科白を真似て、「モスクワへ！モスクワへ！」と叫んだ。

私はこの夜、モスクワへ來てゐた小山内薫と逢つた。小山内は少し疲勞してゐるやうではあつたが、ホテルの一室の大きなデスクの上にソヴェート演劇に關する澤山の文献をのせてゐた。小山内はイーシヤといふ英語の出來るモスクワ第一大學生を秘書として毎日演劇巡禮をしてゐた。小山内薫のソヴェート演劇觀には、重要な點で私は不滿ではあつたが、私は彼によつてソヴェート演劇の發達して來た歴史的過程を學ぶことが出來た。私はまたモスクワの見學プログラムに歸つた。

(この項つゞく)



## VIII ソヴェート時代(其二)

(昭和二年——三年)

昭和二年(一九二七) 四十五歳(つゞき)

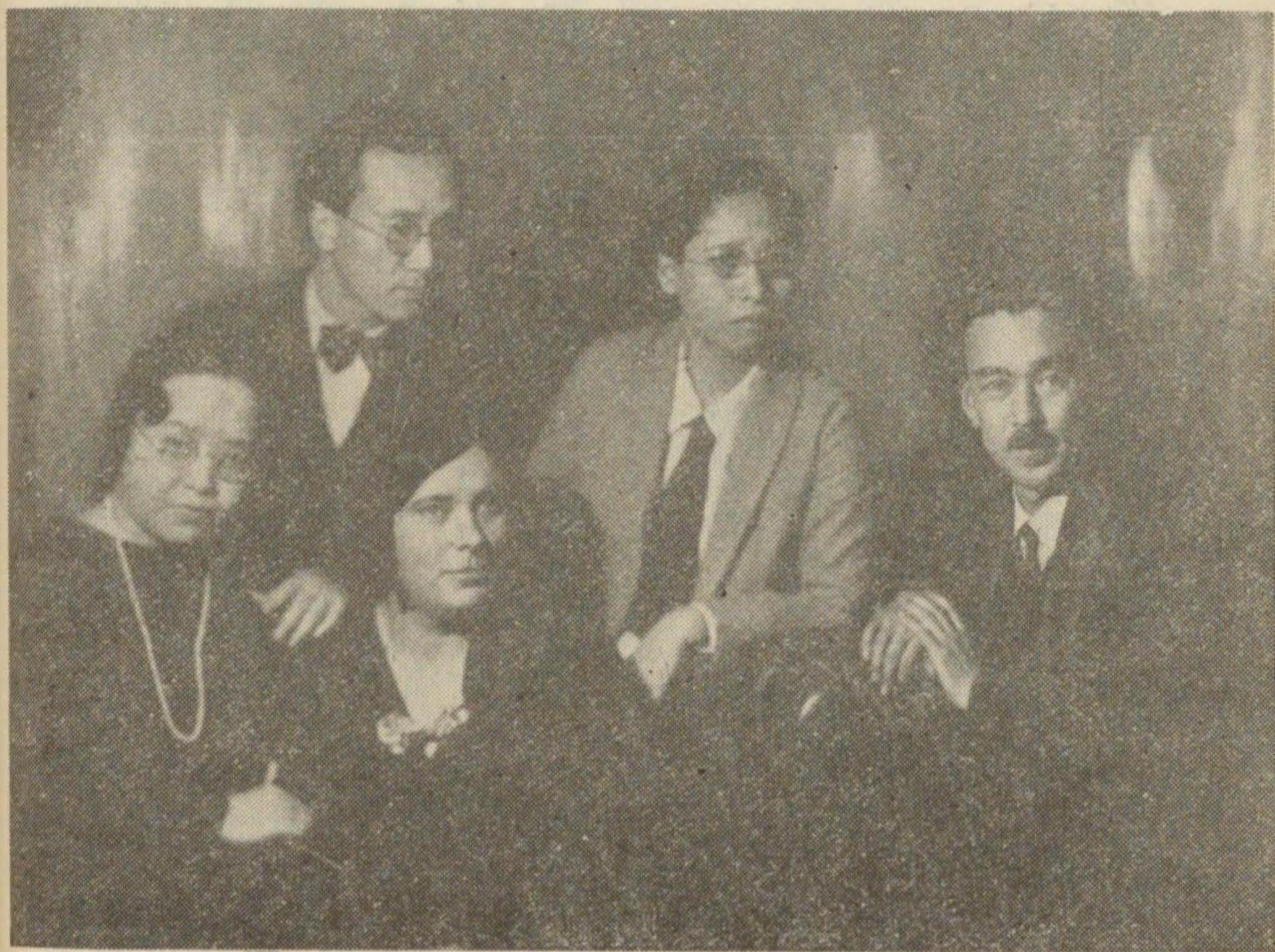
小山内薫がモスクワへ來てから、私達は演劇の世界からソヴェートの生活を見る機会を一層多く持つた。これは私にとつては幸福であつた。なぜならば、ツアリズム時代からソヴェートへの演劇の發展は、社會機構の發展を最もよく反映してゐるといはれてゐたからであつた。ツアリズム時代の進歩的演劇人は、××前既に新しい時代の進歩のために準備してゐた、とある演劇批評家の書いてゐたのを私は讀んだことがある。××前にモスクワの藝術座を見た小山内薫は、「青い鳥」を私達と一緒に見てゐて、その觀客の種類の變つてゐるのに驚嘆してゐた。××前には労働者や労働者の子弟が藝術座の客席に入るといふことは絶対にないことであつた。「例へ、料金を拂つても服装の制限等から入場が許されなかつた」と小山内は語つた。私はモスクワの労働者の子供達が「青い鳥」を見て盛んに拍手をしてゐるのを見て非常な喜びを感じた。然し、小山内は、觀客の服装が亂雑で、態度が粗野になつたといふ意味で非難してゐたが、そこにこそソヴェートの社會進展の意義があるのだつた。彼は知識

的にはそれを理解してゐても、生活としては受取ることが出来なかつた。彼のソヴェート演劇についての批判の根本的缺陷は、そこから來てゐるやうに思はれた。

十二月六日には私達はメイエリホリド座で、メイエリホリド夫妻及び一座の俳優に會見してゐる。この日小山内は日本演劇の特質について語つたが、メイエリホリドは非常に喜んで、小山内の日本に於ける新劇の上の位置が、私のソヴェトに於ける位置と酷似してゐるといつて同情的な挨拶をした。然し、メイエリホリド夫人は、小山内に日本演劇の「型」を示してもらふことを期待してゐたので、可なり不機嫌であつた。メイエリホリド夫人はもと詩人エセーニンの同伴者であつた人で檢察官の市長婦人に扮して特異な技術を示した人であつた。この日小山内はひどく疲れてゐたらしく時々居眠りをしてゐた。この習慣は餘程以前からであつたらしい。

また十二月十日には小山内薫は藝術座の事務室でスタニスラウスキーに會見してゐる。「フィガロの結婚」が上演されてゐる時で、白髪のスタニスラウスキーは幾度か觀客席に出入してゐたが、幾幕目にか私達を事務室に招いて呉れた。私達が出版物の上で青年期からその顔に親しんでゐた美貌なスタニスラウスキーは、もう昔の面影はなく、白髪の老人になつてゐた。スタニスラウスキーと小山内の會見は、私達のやうに日本の新劇の歴史に添うて歩いて來たものには、眞に劇的なものであつた。ス





昭和三年、四十六歳の著者（中條、鳴海  
ニキーチナ教授、湯淺、秋田）

タニスラウスキーは英語の出来る女秘書を介して小山内と語つた。彼は小山内の再びモスクワへ来たことを喜び、「ソヴェトの演劇の印象」を語つて呉れといった。小山内は「技術の點で藝術座の演劇を最も尊敬してゐる」といふ意味のことを答へると、彼は喜んで、「演劇の技術は長い間の訓練によつてのみ得られるものである。藝術座は今ソヴェトの演劇に多くの教師を送つてゐる。」といつてメイエリホリドの演劇や革命劇場の技術も、また藝術座に學んだものであると言つた。小山内は十二

月十二日のコーガン博士のアカデミーでの「日本藝術の夕」を終へて歸國の途についた。「日本藝術の夕」では、小山内は「日本演劇の將來について」、私は「日本左翼文藝について」、米川、尾瀬の二人は日本に於けるロシア文學の影響及び文獻についてロシア語で講演をした。この夜の聴衆はモスクワ一流のインテリゲンツィア及び、また日本文化について特別な興味を持つ人々であつた。トロヤノフスキー大使もこの夜の聴講者の一人であつた。この講演會を機會に、コーガン博士の主宰するアカデミーでは、日本文化研究會を新たに設置することになつた。このことは日ソ文化聯絡のために重大な意味を持つものであつた。

十二月十四日午後四時五十分の列車で中條百合子、湯淺芳子の二人がモスクワに着いた。二人は長い旅行に餘り疲労もせず、元氣に列車からとび出して來た。中條は髪を斷髪のやうに後頭部に行方不明に結つて、丸々と肥つた身體に弾力性のある態度で、旅行中の物語などをしてゐた。支那青年のやうな感じを興へる湯淺芳子はこの時代では唯一のロシア語通で、當時ソヴェトを批判的に見ようといふやうな意氣込みを示してゐた。この日からパツサージホテルは、この二人の女性を加へて一種の色彩を添へることになつた。二人の室には大きなソヴェトの地圖が掲げられ、二つの電氣スタンドが明るく輝いてゐた。このやうにして二人の日本の女性は、ソヴェトの社會施設及び文學研究のスタート



を切つたのであつた。

私はこの月の二十二日に鳴海完造と共に、レニングラードの視察旅行に出發した。オクチャプリ驛では、これもレニングラードへ行く「東洋事情研究所」員のメリー・ツインと一緒にあつた。メリーは東洋語學大學の卒業生で、日本語のよく出来る女性で、私の語學の教師であつた。ソヴェトの知識的女性は色々な政治的文化的機關に入つて、その知識を新しい組織のため活用させてゐるのであるが、メリーもそのやうな女性の一人であつた。メリーはこの年の終りから翌年の五月まで、私のためにロシア語やエセーニンの詩を講義して呉れた。私達はこの列車の中で、文豪ゴーゴリの正系に當るゴリ夫人と、今コロレンコ學校に通つてゐる娘さんと一緒になつた。この列車は翌日の朝十時半にレニングラードについてゐる。ピオトル大帝が、巴里に模して、ネバ河畔の沼澤地を埋めたと、建設したといふ大都市が私達の前に横はつてゐる。ステーションには對外文化聯絡協會の代表者デルジャーキン(有名なデルジャーキン教授の息子)レイフェルト、ボズニヤーク等が出迎へて呉れた。レイフェルトはレニングラード東洋語學大學の卒業で日本文學の翻譯者であり、ボズニヤークは對外文化聯絡協會の關係者で親切な青年であつた。

私達は冬宮の隣、もとウラジミル大公の官殿であつた「學者の家」(ドーム・ウチョンヌイ)に入つた。こゝはネバ河に臨んだ建築物で、ここからは帝政時代の監獄であつた昔のセント・ペテルボルクスの黄金色の尖塔が見られた。學者の家にはレニングラードの大學教授などが住んでゐたが、その中には有名な女作家セーフリナの室もあつた。私達はレニングラードの最初の夜、子供のための劇場で「アングル・トムスケピン」の觀劇をした。この演出は實に立派なもので、奴隸賣買の場面の如きは、モスクワの演劇でもそんなに見ることの出来ないほどのものであつた。

ボズニヤークとレイフェルトの二人は、私達のためにレニングラードでの日程をつくつて呉れた。私達は翌日雪の中をデルジャーキン教授の館長をしてゐる有名な「國立圖書館」(パブリーチナヤ・ビブリオテーカー)を參觀した。この圖書館はその圖書の所有量で世界第二位の圖書館として知られてゐるものであるが、また、ケレンスキー臨時政府軍が、この屋上からネフスキイ街の示威行列を砲撃したといふ歴史的事實によつても有名なものであつた。私達はこの同じ日に、セント・ポールスク要砦にクロポトキンの幽閉されてゐたといふ五十一號室をのぞいたり、レニングラード「キム」の記念祭では、私達はレニングラードの生産に従事してゐる一千人に近い組織的な青年男女の群の美しい集團生活を見ることが出来た。

二十五日には、私達はレニングラード郊外の「皇帝村」(ツァールスコエ・セロ)即ち今の「兒童の



村」(デーツコエ・セロ)を訪うて、昔の宮殿を見てゐる。雪の中を青味を帯びたイエカテリン宮殿、アレクサンダー宮殿が龍のやうに走つてゐた。その宮殿の横に、昔ブーシキンの學んだといふ、白い中世紀風の華族學校が昔のまゝに残つてゐた。二十六日には私達はブーシキンの死んだ家を訪ひ、その夜にはマクシム・ゴーリキイの文壇三十五年祭に臨んでゐる。この記念祭にはマクシム・ゴーリキイが出席するといふ豫定であつたが、イタリーからの出發がおくれたので間に合はなかつた。然し、この會にはゴーリキイの友人である學士會長のオリデンプルグ教授や、デルジャーキン教授が講演をした。またレニングラードの文士、アレクセイ・トルストイ、フェージン、チャプイギンその他の人々が「夜の宿」の朗讀をした。私は日本の代表者として、日本に於けるマクシム・ゴーリキイの影響について短い講演をした。

二十八日の夜、東洋語大學の教授コンラード博士の盡力により、「演劇研究所」で私のための招待會が開かれた。コンラード教授は東京帝國大學國文科に學んだ人で、日本語及び日本文學に精通した人で、その夫人はフェリドマンといつて、これも日本文學に精通した人で、細井和喜藏の「女工」中西伊之助の「義民仁兵衛」、島崎藤村の「破戒」等の翻譯者であつた。この夜、コンラード博士の紹介演説の後で、「演劇研究所」の俳優により私の小さな戯曲「首を斬る瞬間」(コンラード譯)が朗

讀された。その後で、私は近代日本の演劇について短い講演をして、それをレーフェルトが通譯した。この講演中に私が歌舞伎を過少評價したといふので、プレットネル教授から質問的抗議が出された。(プレットネルは日本封建時代の農民運動の研究者で、東京在住中は歌舞伎の愛好者であつた。彼には「日本農民一揆史」の著述があつたが、不幸肺患のために夭死してゐる)私は歌舞伎の技術は認めるが、その封建イデオロギイと俳優の封建ギルド制度には極力反對しなければならぬと答へた。この夜、東洋博物館員グルシキナ女史も出席した。グルシキナは日本名を清水浪子と呼んでゐた。

私は十二月三十日にレニングラードの「クラスナヤ・ガゼータ」の記者にメツセージを送り、一週間のレニングラードの視察を終へて、九時三十分の列車でモスクワに向つて出發した。デルジャーキン、レイノエルト、ポズニヤークの他にレニングラード・エスペラント協會の人々がステーションに送つて呉れた。私は政治の都市モスクワに對して、學問の都市、藝術の都市としてのレニングラードの健全な發展を希望しながら、この古い都市に別れを告げた。



私達はモスクワの新年を迎へて間もなく、日本のブルジョア進歩主義者後藤新平の一行をモスクワに迎へてゐる。後藤はブルジョアの觀點から日ソの經濟的提携を主張してゐる政治家の一人であつた。彼がヨツフェを東京に迎へて、日露國交恢復のために働いたことは前の章に記して置いた。多くの日本のブルジョアがソヴェトとの交渉を恐れてゐるのに、彼のみは何うして進んでソヴェトとの交渉を欲してゐたかといふことを、私は彼の顧問の森孝三に質ねた時「子爵は醫者として、ソヴェト國民の血が若いといふことを言つてゐられました。血の若いものほど新しい文化を創造する可能性があると云ふのが子爵の持説です。そしてそれが子爵の日露國交恢復論の根據でした」と答へたことがあつた。この言葉には經濟的理由を生理學的理由にすりかへた形はあるが、ブルジョアの觀點からのソヴェト觀としては、これだけでも一種の進歩性を持つてゐるものといつていゝ。

一月三日「デーラボ・クルーボ」(俱樂部の名)の演壇にカーメネバ夫人や、ルナチャルスキイ、田中大使等と並んで腰をかけた後藤新平の顔を見た時は、私達も一種の昂奮を感じたものであつた。この歓迎は實に文字通りの國賓待遇で、この會合にはモスクワの一流の政治家、學者、勞働者代表が參加してゐた。後藤はこの頃心臓を痛めてゐたので少し血色が悪かつたが、顔から來る印象は兎に角世界的な政治家らしかつた。この時ルナチャルスキイは、日本から贈られた自分の著述の翻譯を演壇で

キスをしたりした。後藤は例の「政治道德論」を一席辯じたが、その言葉は東北辯丸出しで私達をはらはらさせた。然し、この東北辯は八杉教授の立派なロシア語に純化されて傳へられたらしいので、私達は幾らか安心させられた。然し、例の政治道德論の内容の貧弱さは如何ともしようのないものであつた。こんな時に起る自然發生的な愛郷心も到底辯護し難いものであつた。それに對してルナチャルスキイは「ヨオロッパ滅亡論」の反駁をもつて答へた。ルナチャルスキイは當時世界的に行はれてゐた、ヨオロッパ滅亡説によつて、人類の進歩性を否定しようとする、小ブルジョア奴隸主義的學説を論難して、「ヨオロッパは滅亡するのではなく、ヨオロッパのブルジョアの文化が滅亡するのである。」といふ結論を下した。ルナチャルスキイの雄辯を聴くと、後藤の東北辯は一層貧弱なものとして私達の頭に残つた。然し、この會合は輝かしい餘興によつて飾られた。グラント・オペラの踊子がロシヤンバレーを踊り、一流のヴァイオリニストの獨奏があり、その他に日本に馴染みの深い民謡家のヤウンゼンは、日本民謡「鷗」「月見草」等を歌つた。また聴衆の中にはスタニスラウススキイの義妹に當る「子供のための劇場」の主宰者ナタリヤ・サツツの姿も見られた。ナタリヤ・サツツは××直後から子供のための劇場の經營に當り、今日ではソヴェトの演劇活動で缺くべからざる女性であつた。彼女の演劇活動の主なる功績は、一、子供を搾取する演劇活動に反對した點、二、子供自身に演



劇リパートリイを選択させてゐる點であらう。小山内薫はこのナタリア・サツツの演劇的業績を高く評價してゐたことも一般に知られてゐる。

後藤新平はこの夜十一時の汽車でレニングラードに向つて出發した。

一月のモスクワは毎日よく晴れてゐる。私はロシア語の勉強のない時は、毎日のやうにモスクワの町を歩いた。ウアスクリエセンスカヤ・ワロータ（クレムリンの門）を出ると、「赤い廣場」が日光に輝いてゐた。赤衛軍の士官はいかめしい服装をして、左手でつかみつ鼻をして道をいそいで行くのが眼についた。一體ロシアではつかみつ鼻は平氣らしく、時々この巧妙な方法にぶつかつた。赤い廣場といふところは、日本ならば××といつたところであるが、昔は刑場がこゝにあつて、刑死者がそこへ引かれて来て「額の場所」（ロブノイ・ミエスト）で所刑される時、僧侶は囚人にむかつて説教をして瞑福を祈つたといはれてゐる。トレチャコフ畫廊や、革命博物館などには、よく所刑の繪を見るのではあるが、その「額の場所」は今でもそのまゝ残されてゐる。石に疊まれた圓筒形の場所で、その中には太い錆びた鎖が繋がれてゐた。「赤の廣場」といふ言葉はこの刑場の名から來てゐるらしい。十八世紀の頃までは、この邊はモスクワの中心地であつたさうだ。この市場はローマの市場を型どつたもので、そこへ集まる市民達はツァーリの命令を傳へたりしたものであつた。民衆の喧嘩にツ

ァーリが仲裁に入つたといふ有名な話さへある。この中世紀的な刑場の對ひ側クレムリンの城壁に沿うて、構成派的様式をもつたレーニン廟がある。レーニン廟と城壁との間には數列の墓地があつて、そこにはロシア解放の戰士達が眠つてゐる。この墓地は日光に輝いてゐる時も美しいが、雪の降つた朝は一層美しい感じを興へる。幾列かの墓石は白い經帷子をかついだやうに見える。

私は二月の初め頃、このクレムリン近くの放送局でエスペラントの放送をしたことがあつたが、その結果私は多くのエスペラントの友人を得た。このことは私に意外な利益を興へた。私は今まで片言のロシア語や英語などでロシア人に接してゐたが、エスペラントの友人を得てからは、この言語の助けを借りて、モスクワの實際生活（日常生活）の中に入つて行くことが出來た。ジャヴオロンコフといふエスペラントの教師によつて、私は労働者の日常生活、家庭、工場、クラブの生活に接することが出來た。またマケローバといふモスクワ郵便電信局に勤務してゐる一婦人は、エスペラントを通じて日本の研究を初め、一方私にモスクワ労働者の生活に接する機會を興へて呉れた。モスクワでは、郵便、電信、電話、ラヂオの仕事に従事する労働者の組合を「聯絡機關の労働者組合」といつて特別に重要視してゐた。この人々は最も健實な組合を結成して、エスペラントの講習會、文學、演劇、音楽、スポーツのクラブを持つてゐた。ジャヴオロンコフはもと辯護士であつたが、××當時には寫真



師、靴屋などをしたこともあつたが、今では労働組合の中に入つて労働者の教育に従事してゐた。ジヤヴォロンコフやマケローバのやうに、労働者の中へ入つて行つて彼等の知識を高めて行く活動は、ソヴェトの新社會では最も有益な仕事の一つであつた。

私が白ロシア、ミンスク地方へ旅行したのもやはりエスペラントのお蔭であつた。ミンスク地方にはミンスク醫科大學生で、スネシコといふ有名なエスペラントがゐて、この人は對外文化聯絡協會のカイメネバ夫人を通じて、私をミンスク地方に招待して呉れた。スネシコは醫科大學生でありながら、この地方の労働者の組織者であり、教育者でもあつた。私のミンスクへ行つたのは二月二十四日であつたが、白ロシア、ユデヤ、ポーランドの青年男女は、心から私を歓迎して一週間の視察に充分の便利を與へて呉れた。殊にこの地方のユデヤの青年男女は特別な好意を示して呉れた。彼等は長い間自分の土地を持ち得なかつたし、自分自身の言語を自由に語ることも許されなかつたのに、今ではこの地方には、すでにユデヤ人の立派な労働組合が出来、世界的な評價を得てゐるユデヤ劇場まで所有してゐた。私はリーピンの戯曲を読み、ヒルシベインを個人的に知つてゐるといふので、彼等の喜びは一層大きかつた。ラポポルトといふユデヤの青年は私のホテルの一室を借りて、絶えず私に話しかけて來た。ユデヤ人の知識慾の旺盛であることは全く特長的であつた。

私はミンスクの旅行では下のやうな三つの利益を得た。

- 一、民族的感情を超越した文化建設の可能性
- 二、共同耕作の實際を目撃したこと
- 三、ユデヤ人の性情及び實際生活を知り得たこと

殊に、この地方の農民はポーランドの侵入軍を農民自身の手で喰ひ留め、そこに立派な共同農場(コルホーズ)を建設してゐるといふ點は特筆されていゝことであつた。個人農業が集團農業に推移する過程をこの地方の農民は最もよく示してゐた。またヤンカ・クパーラといふこの地方の有名な詩人があつて、彼の文學的運動によつて、この地方の三つの流派が統一されかけてゐたのも、ちやうどこの時であつた。三つの流派といふのは、一、國民主義的詩人、二、未來派的詩人、三、プロレタリア詩人であつた。

私は五月一日のメーデーの示威行列をモスクワ、赤の廣場で迎へた。××記念日には百萬の民衆が示威行列をしたが、この日は八十萬のモスクワの民衆が赤の廣場に集つた。「स्पスカヤ・ワロータ」の時計が十時を告げると、砲聲が天にとどろいて八十萬の民衆の行列が開始された。

五月一日! 萬歳!(ペールヴォエ・マールヤ・ダ・ズドラストウエト)



労働者農民組合萬歳！（サユーズ・ラボーチフ・クリスチャン・ダ・ズドラストウエト）

私はこのメーデーの聲を耳に残したまゝ、一九二八年五月五日に、新しい政治と藝術と労働の都市モスクワを出發した。對外文化聯絡協會の人々、エスペラント協會の人々、國立工藝學校の男女の學生達、ピリニヤーク、ヒルンベーン夫人、メリー・ツイン、ロマン・キン、中條、湯淺、鳴海の諸君に送られてモスクワ驛を出發した。

ドスギダーニヤ！

チーオン・ポーナン！

さようなら！

（この項終り）

## Ⅷ 國際文化時代

（昭和三年—四年）

昭和三年（一九二八年）四十六歳（つゞき）

五月十日頃、私達の列車がバイカル湖畔を走つてゐる頃、私は私のゐた車から三輛目ほどのところに、ベルリン、モスクワなどから歸へる支那留學生達の一團のゐることを發見した。私達はシベリヤの春光の下で暗綠色に波打つてゐる半月形のバイカル湖の姿を見失ふまで殆んど二日間かゝつたが、その間に私は各驛でこの支那の青年達と接觸する機會を持つた。私達は、同じ人種であり、一番密接な利害關係を持つた人間でありながら、言語上の制約のために自由にその意志を交換することの出来ないといふ不合理を體驗した。然し、私はその不自由さの中からも、彼等は今祖國の危難のために赴く人々だといふことを知つて大きな驚きと敬意とを感じた。彼等の中の二三のものは民族主義的なところもあつたが、誰もかれも熱烈な改革的精神の所有者であつた。モスクワ中山大學（孫逸仙夫人の經營する大學）の學生で、私の顔を見たことのあるといふ、あばた顔の一青年は度々私の車室を訪ねて、東方の危機について自分の意見を熱心に述べて行つたが、この青年達の姿を私はマンデユリア



驛で見失つてしまつた。(これらの改革的青年の大部分は、今現在この地上にゐないといふことを二年後東京で知ることが出来た。) 私はこの支那青年達との會合によつて、強い反省を自分の胸に打ちこまれたやうな氣がした。この時機は、良心的な人間には、強い反省を要求しないで置かない時であつた。

五月十八日の朝、私は八ヶ月目で東京驛に着いた。多くの友人達が私をプラットホームに迎へて呉れた。晴れたいゝ日で、見る物すべてが珍しく感ぜられた。友人達が私のため心配して呉れたやうな「災厄」もなく、私は多くの友人や娘達とテーブルを圍み、東京のお茶を喫んだ。然し、私はこの時友人達の言葉によつて、去年私の出發を見送つて呉れた多數の友人達が、すでに私の迎へられた領野にはゐないといふことを知つて少からず驚かされた。勿論私は自分を政治的活動の領野にゐる者とも思つてゐなかつたし、文化運動者に機械的な政治活動を要求すべきものではないとは知つてゐたが、殆んど十年に近い間行動を共にして來た若い友人達が、他の領野に走つてゐるといふことは何といつても淋しかつた。

私が去年東京を去つた頃、「日本プロレタリア藝術聯盟」が分裂を來して、雑誌「文藝戦線」に屬した同人達、藤森成吉、青野季吉、林房雄、藏原惟人、前田河廣一郎、村山知義、山田清三郎等が聯盟を脱退して、新たに「勞農藝術家聯盟」を組織してゐたが、この後のものは左翼社會民主主義者の政治運動に動かされ、聯盟内に内在してゐた社會民主主義的要素の策動となり、その結果マルクス主義的藝術家の一團は「勞農藝術家聯盟」を脱退して、「前衛藝術家同盟」を組織してゐた。この時の脱退派の人々は藤森成吉、林房雄、村山知義、藏原惟人、小川信一、山田清三郎、佐々木孝丸、永田一修等で、殘留組は青野季吉、前田河廣一郎、金子洋文、葉山嘉樹、黒島傳治、平林たい子その他であつた。そして更に、この三つの藝術團體内の、マルクス主義的藝術團體、即ち「前衛藝術家同盟」と「日本プロレタリア藝術家同盟」とが一九二八年の三月の××に合同して「全日本無産者藝術聯盟」(略稱「ナツプ」)を組織して、社會民主主義的藝術團體である「勞農藝術家聯盟」と烈しく對立してゐた。

私はこの二つの對立の最中にソヴェトから歸つて來たのであつた。私は理論的にはこの分裂を理解することは出来たが、實際としてはこれを受け取るためには可なりに骨を折つた。私は間もなく勝れた頭腦の所有者であつた藏原、小川等の指導によつて、自分の働くべき領野を發見してゐた。私は一個の藝術家としてソヴェトの新建設、即ち教育、文學、演劇、一般社會施設の忠實な報告者として活動をつゞけることにした。この時代は日本のあらゆる方面でソヴェトの新文化に對してデマゴグの



行はれてゐた時で、私は自分の實際に見たものについて、一々その蒙を啓くことに努力した。私は全、反動の領野でない限り、あらゆる集團の招きに應じてソヴェトの談話をした。私は人々と強めて争はずに、その人々の持つてゐる内部的矛盾を自覺させるやうな方法を取つた。

私はこの年九月三十日の朝日新聞主催の講演會を最初として、早稻田大學、商科大學、慶應義塾大學、明治大學、日本大學等の講演、地方としては盛岡、青森等の公開講演でソヴェトの視察談をつけた。この私の小さな活動は、自然の結果として、私達に國際文化研究所を創立させる原因となつた。國際文化研究所は、藏原惟人、小川信一、川口浩、林房雄、村山知義、片岡鐵兵等によつて組織されたもので私もこの創立の一員となつた。研究所の創立は一九二八年十月で、「ナツプ」(全日本無産者藝術聯盟)の創立に遅れること約半年であつた。私はこの組織の中では、殆んど何事もなし得なかつたが、私はこの時初めて組織的な文化運動に参加し得たといふ自覺を感じた。

この頃、左團次一行がソヴェトの招聘に應じてモスクワへ行くことになつたが、私達は一行の中の進歩的俳優である河原崎長十郎の送別會を開いてゐる。私はその席上で下のやうなことを述べて送別の言葉に代へた。

「今ソヴェトには、半世紀の間ロシア演劇の發展のために働いて來た勝れた藝術家達が質朴な形をしてゐます。その形の質朴なのを見て、その人達を見落してはいけません。あらゆる機會にその人達の教へを請ふ必要がありません。」

この私の言葉を長十郎は何う受取つて呉れたか知らないが、長十郎の俳優としての成長は、ソヴェト訪問後著しいものゝあるのを知つて、私はいつでも愉快を感じてゐた。(私は、左團次がモスクワで一行の俳優達を集めて、「赤化してはいけない」と訓示したといふ話がある人から聞いて微笑したことがある。)日本の演劇の世界に残存してゐる封建ギルド制度の中から、長十郎や翫右衛門のやうな人間の生れて來たことは珍しいことであつたが、また現實としては當然生るべくして生れたものといへるであらう。

然し、私達はこの年の十二月二十六日に小山内薫の死に接してゐる。小山内は死の二日ほど前、當時問題になつてゐた日本全無産者の政黨活動である新黨準備會(勞農黨)の解散について人々に語つてゐたといふことであつた。小山内はモスクワへ出發する前に氣管支加答兒を疾つてゐたが、連日の演劇見學や長途の汽車旅行等で病勢が充進し、次第に動脈硬化の症狀を呈し、上田文子の「晩春騒夜」の上演慰勞會の席上で危篤の状態に陥り、歸宅後夫人、子供達、岡田八千代その他劇場員達に看護されながら死んで行つた。行年四十八歳であつた。



私は二十八日築地小劇場で多くの若き友人や劇場員達にかつがれて来る小山内の棺を迎へたが、悲壯な劇場代表者の弔詞には涙をおさへきれなかつた。日本の封建イデオロギイに對して勇敢に戦つたローマン主義運動の實戦者でもあつた二人の先輩島崎藤村、馬場孤蝶の姿をも私達は見る事が出来た。各藝術團體、劇場關係の弔詞の中に、モスクワ對外文化聯絡協會長カメネバ夫人の弔詞もまじつてゐた。日本ローマン主義運動に養はれ、舞臺の上に自然主義運動を移植した演劇先覺者は劇場を埋めるほどの花輪に包まれて死んでゐた。

私はモスクワから歸つた後の半年間は地鳴りしてゐる地殻の上にも立つてゐるやうな一種の不安を感じたが、その間にも自分に與へられた使命を自覺したゆゑに、やゝ定着した信念を得たのを嬉しく思つた。然し、この仕事のために、私は再び創作の世界から遠ざかつて行つた。

#### 昭和四年（一九二九年）四十七歳

私は「國際文化」の仕事をつゞけながら、自分自身と娘の再教育のために、やゝ組織的に資本論の研究を初めたり、プレハーノフ、ブハーリン、ゴリキイ等の著述を耽讀したりした。日本のプロレタリア藝術運動は次第に激化して行く××××進展につれて、ますます明瞭に政治性を帯びるやうに

なつて來た。私はこの年二月に進歩的な美術家の團體である「造型」と「アール」（日本プロレタリア美術家同盟）との合同問題の座長として毎回出席したが、私はこの當時既に清算しつくされてゐた筈の福本イズムの殘滓の、案外根深いものであることを感じた。

三月には澤田正二郎は中耳炎から急性化膿性腦膜炎を併發して倒れてゐる。私の見舞つた時は、彼は病院の一室で白眼を大きく開いて昏睡状態の中にある。私はあの「大菩薩峠」の机龍之助の顔を聯想して涙さへ出なかつた。そして酸素吸人の水のおどる音だけが淋しく響いてゐた。澤田は、前にも記したやうに、その社會觀が不明確であつたゆゑ、××××激化して來るにつれて次第にファツシヨ的傾向を持つやうになつてゐた。

この同じ頃、三月六日無産黨代議士山本宣治は七生義團といふ反動團體に屬する黒田といふ者の無智な凶刃に倒れてゐる。彼は濃厚篤學の人で、日本の労働者、農民、勤勞大衆の××××殆んど寢食を忘れてゐた。その彼は一個のブラック・ハンドの下に血を流して永久に私達の前から去つてゐる。

三月八日の佛教會館の告別式には、尾崎行雄、河上肇、大山郁夫を始めとして、あらゆる無産團體が悲壯な弔詞を送つた。三月十五日の青山の労働葬には數千の労働者が葬儀に列した。私はこの日「國際文化」を代表して弔詞を讀んだ。



この年は次ぎから次ぎと出来事の多い年であつた。その内でも私の生活に最も密接な關係を持つたのは、築地小劇場の分裂問題であつた。初め小山内薫及び土方與志によつて創立された築地小劇場は、チエホフ的イデオロギイによる演劇實驗室の性質をもつたものとされてゐたが、小山内の死後、經濟的不安と思想的對立のために次第に分裂を初めた。最初小山内の死後、劇場は臨時に土方、青山友田、北村(喜八)等を選んで主事代理委員會を組織してゐたが、土方と他の委員達の感情の對立の結果、果土方は不健康のため靜養を要するといふことを理由として劇團を辭任して、劇場主事たるに止まらうといふ意志を表現した。劇團は總會に於いて土方の劇團部脱退を承認し、新たに主事に青山杉作を劇主事に北村喜八を推し、各部から代表委員を選出し、代表委員會を組織して劇場活動を運行させようとした。

この對立の當初に、友田恭助は別個の理由で劇團を脱退し、更らに丸山定夫、山本安英、薄田研二、伊藤晃一、高橋豊子、細川知歌子の六人は、劇團がその創立者の一人である土方の脱退を承認したことを不合理として、連袂脱退して新たに「新築地劇團」を組織し、残留組は劇團「劇團築地小劇場」として演劇活動をつづけた。この二つの劇團は最初は對立の形をとつてゐたが、當時既に強力な指導力を持つてゐた「日本プロレタリア劇場同盟」の批判の結果、二つとも進歩的劇場として當分平行的

に活動をすゝめることになつた。然し、「築地小劇場」は雑多な人々を包含して、統一を缺いてゐたのに反して「新築地劇團」は新進氣鋭の人々によつて組織され、統一した活動をつづけたがために、長く演劇的生命を持續し、後では、「プロット」(日本プロレタリア劇場同盟)所屬の一劇團として輝しい歴史を持つことになつた。

更らにこの二つの進歩的劇團の何れにも参加しなかつた青山、汐見、友田、御橋、東屋、東山千榮子、田村秋子等は、別に劇團「新東京」を組織したが、所謂チエホフ的中間イデオロギイによる演劇活動であつて、プロレタリアートの全面的な擡頭時代には全く活動力を持ち得ずに、やがて有名無實なものとして滅んでしまつてゐる。(然し、この中間イデオロギイの演劇活動は、時を置いてプロレタリア演劇の空位時代に、新劇復興の氣勢に乗り再び生活力を恢復して「築地座」「創作座」の活動となつてゐることをこゝに記録して置く必要がある。)

私はなぜこのやうな年譜の中で、特別に小劇場の分裂問題のために不均衡に多くの行數を費したかといへば、この劇場分裂は、當時の一般知識階級の思想上の分裂を反映してゐると思はれるからである。

このやうにして日本の進歩的文化運動の活動が強力に行はれるにつれて、多くの社會的、生理的犠



犠牲を生むやうになつたことが、一般進歩主義者の間には自然に問題とされるやうになつて來た。多くの若いプロレタリア文化運動者は、突如として自由を失つたり病氣のために倒れたりした。私はこの年の四月に、石原（修）、安田の二博士、岩井、小岩井その他の人々によつて發起された山本宣治を記念するための診料所の創立準備會に列してゐる。これは後の「無産者診療所」にまで進展したものであつた。また進歩的な辯護士牧野充安や社會民主主義者、自由主義者達の間に行はれてゐた犠牲者救援の運動にも参加してゐる。これは後の「××救援會」にまで進展したものであつた。もと／＼、この二つの運動は、プロレタリアートの××××××によるものではあつたらうが、日本の一般勤勞階級の直面した動かしがたい現實に立脚したものであつた。また、それなればこそ、この運動はあれほど堅實な成長を遂げ得たのであらう。

私はこの年四月十日頃、娘をつれて關西旅行の途についてゐる。この旅行はブルジョアの觀點からではあるが、熱心な傳説研究者である藤澤衛彦、自然主義的觀點から童話を書いてゐる濱田廣介、及びニヒリステックな詩人の尾關等の講演旅行に動員されたもので、私は主として、ソヴェトの兒童教育の現状について話した。この旅行では、私のラジオの放送には特別に視聴者がついてゐたが、一度も注意を受けたことはなかつた。

關西旅行から歸へると間もなく、私は東京のメデーを見てゐる。この年のメデーは、その参加人数の上では全く先例のないほどのものであつた。新聞では二萬人だと報じてゐた。モスクワのメデーを見て來てから最初に見る日本のメデーであつたから、私は特別の注意をもつてこのメデーを観察した。私は二つの世界の相違といふことを今更らのやうに感じさせられた。私は、勞働者の示威運動があらゆる××××××これが同じ世界の出來事であらうか？この日は小雨が降つてゐたが行列が、初夏の雨に洗はれて進んで行くのは、盛んといふよりは悲壯な感じがした。コムソムール、コムソムルカの美しい行列や、立派なバンドを先頭とした八十萬の勞働組合の示威を見た眼には、この貧弱な不統一な示威行列を何と見ていゝのか。これは私に與へられた課題であつた。

六月二日には私は上野自治會館の「無産者の夕」に出席してゐる。この會では私は布施、細迫、藤枝、片岡等と講演をしてゐる。私はソヴェト婦人に關する談話をして中止を命ぜられてゐる。盛んな××××××行はれた。私はこの夜久振りで細迫の演説をきいたが、繊細な感情の所有者ではあつたが談話は可なり煽情的であつた。この年の八月、大山、河上等によつて合法的な新勞農黨の提議がなされてゐるので、私は八月、九月の青森地方の講演旅行では絶えず地方の青年達の質問を受けた。農村地方にとつてはこの問題は現實的な問題であつた。この提議以來、私達の郷里の青年達の間に盛んな



理論闘争が行はれたが、私はその事に關して全く意見を述べる力を持たなかつた。また述べることの出来なかつたのは自然であつた。

十月、「國際文化研究所」が「プロレタリア科學研究所」に進展した。前者は従來主としてソヴェトの文化の研究、紹介の任に當つてゐたものであつたが、プロレタリアートの一般的進展につれて、科學戰線統一の必要が生じて來た。この當然の結果として、プロレタリア科學研究所が創立され、從來の國際文化研究所は解散された。そして、この研究所は新たに雑誌「プロレタリア科學」を創刊し、組織の内部に下の四部門を持つことになつた。

第一部——政治、經濟、法律、社會。

第二部——哲學、歴史、教育。

第三部——文學、藝術、言語。

第四部——精密科學、自然科學。

私はこの頃までにソヴェトの新建設に關して「國際文化」及びその他の出版物の上で發表した文章を輯録して「若きソヴェト・ロシヤ」として叢文閣から出版することが出來た。私はこの著述を出版するについても、自分に與へられた活動の範圍を逸脱しないやうな注意を拂つた。私は先づ「對外

文化聯絡協會」の活動の性質及びその限度によつて自分の表現方法を規定づけて行つた。これに對して二三の批判がなされたのを私は知つてゐるが、私の態度は決して誤つてゐなかつたと今でも信じてゐる。

「若きソヴェト・ロシヤ」は、私にとつては一つの創作活動と思はれるほどのものであつた。私はこの三年間全く創作の世界から遠ざかつてゐたが、その間に得た唯一の收穫がこの質朴な一冊の著述であつた。この著述は案外成功した。出版と同時に三版を重ねた。若い人達が電車などで、この著述を耽讀してゐるのを見ると、私は子供のやうな喜びを感じた。これは、ソヴェトの建設を知らうとしてゐたこの時代の要求以外の何ものでもないことは勿論であつた。

私は十一月レオ・トルストイの娘トルスタヤを東京に迎へて、間もなく四國九州の旅行に出發してゐる。トルスタヤはヤスナヤ・ポーリヤナにトルストイ學校を經營してゐた人であつたが、トルストイの『幻影』を背負うて歩いてゐるやうな感じを私達に與へた。トルスタヤは、「ソヴェトではトルストイは藝術家と思想家とに二分されてゐるのに、日本では完全な統一された者として理解されてゐる。」といつたが、日本でも既にトルストイがトルストイヤンとマルクシストの間に二分されてゐることを彼女は理解してゐなかつた。

(この項終り)



## Ⅹ 文化闘争と逆流時代

(昭和五年—六年)

## 昭和五年(一九三〇) 四十八歳

私は此年一月四日、四國九州の講演の一行と共に大分縣臼杵の町にゐた。こゝは美しい静かな、中世紀的な幻想を興へる城下町で、大友宗麟や稻葉の居城で、四百年前から葡萄牙の居留地(唐人堀)のあつたところだ。フランシスコ・ザビエルの宣教したところで人々は昔の教會やコレギョのあつた跡などを指示して教へて呉れた。大友宗麟の居城は島全部を築城したもので、石垣の切石の一つに、ローマ字がはつきり刻みこまれてゐた。その本丸と思はれるところにホルトの樹(橄欖)といふものがあつて、樹の下には暗緑色のオリヅの實が澤山に落ちてゐた。こゝは野上白川、野上彌生子の生れた土地であつた。

講演の一行は野口雨情、福田正夫、横山美智子、柴田武福等であつたが、私はこの旅行では主としてソヴェートの學校教育及び青少年の社會教育の狀態について話した。この地方は大分縣でも最も保守的な地方といはれてゐるが、それだけに青年の知識的欲求が却つて純粹であつた。劇場の講演會では五百人以上の聴集があつた。青年の中には二三の進歩的な要素があつて、青年會の性質を再認識しようとしてゐた。

私はこの旅行で、大分、福岡、熊本地方の進歩的な青年や、組織的な労働者に接する機會を持つたが、この時代の進歩的文化運動が何んなに早く地方の青年達に浸透して行つたかを知つて、驚かされたほどであつた。その中でも若い教育者のイデオロギー的動搖は最も激しく、そして痛々しいものであつた。然し、その一面には既に反動的な逆流が地方文化の底に流れかけてゐることを感じない譯には行かなかつた。

私は四國九州の旅行を終へて東京へ歸つたのは一月の末であつたが、この旅行では、私は日本の既成藝術家達がすでに思想的にも道德的にも全く行きづまつてゐることを感じた。私はある事情から一行の二三の人々には烈しい怒りをさへ感じた。私は全く孤立した感情で旅をつゞけてゐた。

私は東京へ歸つて間もなく、二月五日に、築地小劇場に徳永直の「太陽のない街」を見てゐる。私は再び自分の故郷へ歸つて來たやうに感じた。「太陽のない街」の演出はそんなに成功したものとは思はなかつたが、演劇のテーマが我が國の労働者の實際活動を反映してゐる點で強い印象を興へた。殊に當時やうやく強力な組織を持ち得て來た消費組合の實際活動を描き出してゐた場面や、闘争的勞



働者が争議のスキヤツプを論破する場面は、演劇的といふより、むしろ教育的意義を持つてゐた。

私はこの頃、娘と二人で、エスペラント文献によるソヴェート青少年の教育、社会施設に關する諸材料の整理にとりかゝつてゐた。この頃、私達は毎月、ヨオロッパ各國からエスペラントの印刷文献を受取つてゐたが、その内で最も興味のあることは、ソヴェート青年男女の性の問題、ピオニーロの指導組織化の問題、スポーツによる闘争の問題等であつた。これらの諸問題の中でも私に最も眞面目な關心を起させたものは、青年男女の性の問題であつた。私はザルキンドの書いた文献によつて、ソヴェートの青年男女は、「世界觀」、「同志感」によつて、あれほど困難な性の問題をもう克服しかけてゐるのを知つて大きな驚きを感じた。

一方日本のプロレタリア藝術方面では、「藝術運動のボルシェヴィキ化」の問題が前面に押し出されてゐた。これは一九一九年アメリカを先頭とした資本主義第三期の一般的危機に基く世界恐慌、及び日本資本主義の勞働強化、失業者の飛躍的増大、農業恐慌等による××の實際的事實を藝術運動の上に反映したものであつた。この年三月、私は山田清三郎と松江、今市、濱田の講演旅行に赴いてゐる。日本海岸に沿うた村々には櫻が美しく咲いてゐた。四月は全日本無産者藝術團體協議會(ナツプ)に所屬してゐる「日本プロレタリア劇場同盟」及び「日本プロレタリア作家同盟」の二つの第二回大

會に出席してゐる。この二つの會合では、私は初めて小林多喜二に接してゐる。小林多喜二は田山花袋の主宰してゐた文學雜誌「文章世界」時代からの投書家の一人で、その頃から優れた文學青年の一人であつたが、この頃の彼は自分の屬してゐる職場(銀行)をすて、プロレタリア作家として、小樽地方の勞働者の組織及び教育的仕事に従事してゐた。色の少し青ざめた、然し何處か小さな動物を聯想させるやうな慄悍な感じを與へる青年であつた。私達は四月二十一日に吉祥寺の江口渙の宅で彼の歓迎會を開いてゐる。白い藤の花の美しく垂れてゐる庭に面した室に二三十人の人々が集つた。私達は固苦しいあいさつを一切抜きにして愉快に談笑しながら會食した。この時、小林は良心的な、然し粗朴な感じを私達に與へた。

四月二十日に開始された市電従業員の同盟罷業は、市當局と右翼派との妥協で益々勞働者側に不利に展開されてゐる。ブルジョア新聞は盛んに逆宣傳を飛ばしてゐる。二十四日には市電従業員の右翼派は豫定の如く罷業を裏切つて就業することになつた。青年團は電車や自動車に乗り込んで得意さうに操縦してゐる。勞働者の争議破りは、××××にとつて職業化する傾向がある。このことだけでも日本の××××の本質がよく暴露されてゐる。

この同じ頃、私達はプロレタリア科學研究所主催の「プロレタリア文化講習會」を開催してゐる。



この頃私達の講習會に對して、色々な妨害が加へられてゐるが、その最も大きなものは××××の教官からなされたものであつた。私は日本文化の底を流れてゐる逆流の本質を見届けたやうな氣がした。然し、私達の講習會はいつでも非常な成功を收め得た。

私はまた同じ頃、未來派の詩人であり、ソヴェートの新興文學に大きな貢獻をなしたウラジミール・マヤコフスキイの死報に接してゐる。マヤコフスキイはある夫人との戀愛のために自殺したのであつた。「戀愛の桎梏のために死んで行く」とその遺言に書いてあつた。ソヴェートの文壇では、マヤコフスキイの文學的功績を賞讃し、「生けるマヤコフスキイ、萬歳！」といつて、彼の死を無視しようとしてゐた。ソヴェートの大衆がマヤコフスキイの戀愛の對象を暴露して、これに社會的妨害を與へるやうなことをしなかつたのは學ぶべきことだと思つた。私達はマヤコフスキイの死後、ブノフ女史についてマヤコフスキイの長詩「プロシーニエ・ナ・イイミヤ」の講義を連續的に聴講した。

メーデーの日、私は芝公園でベンチの上に腰かけてゐる藏原惟郭老人の姿を見た。老人は何うしてもベンチの上を動かさなかつた。深酷なデモが到るところで行はれてゐる。今年のメーデーは左翼の組合は全部参加出来なかつたので、不参加者は列外行進をつづけたので幾列もの行列が同時行進を初めるといふやうな不思議な現象を呈した。今年のメーデーは國際的に「××××メーデー」といふ名で呼

ばれてゐた。到るところに××が行はれてゐるといふ噂が何處からともなく傳はつて來た。

私達は五月十六日に田山花袋の告別式に臨んでゐる。去年小山内薫の死んだ時、「だん／＼順番が廻つて來るやうな氣がするね！」といつてゐた人が今私達の告別の對象となつてゐる。植込の中には島崎藤村、柳田國男、正宗白鳥、上司小劍、武林夢想庵、前田木城、中村星湖等が整列してゐた。田山花袋は、自然主義の文學運動を性問題の暴露といふ點からのみ強調したので、日本に於ける自然主義運動をやゝ狹義なものにしたといふ點が指摘されるが、それでもリアリズムの手法で、平凡な日常生活を丹念に描寫して行つた作家的態度は充分尊敬さるべきであつた。花袋は硯友社時代から暗中模索をつづけてゐた日本に於けるリアリズムの欲求を、それと對立した世界から形體づけて行つた業績は充分記録さるべきだと思ふ。ローマンテストとしての花袋の業績は、島崎藤村の場合よりもずっと小さいものであつたが、リアリストとして生活の中から藝術のテーマを産み出して行つたことはこの人の強みであつた。晩年は全く時代の進展に對して没交渉であつた。

私はこの頃から私の周圍で働いてゐた多くの若い文化闘争者の姿を二重の意味で見失つて行つた。私達の文化活動が旺盛に行はれ、ば行はれるほど多くの人々を失つた。このことは殆んど循環論法的に進んで行つた。私は早くから藏原惟人の姿を私達の世界から見失ひ、つゞいて小川、片岡、村山、



中野、三木、永田等の姿を反對の側に見失つてしまった。小川、片岡、村山の諸君は起訴されるであらうと傳へられてゐた。その他、多くの青年達がつきつきと私達の前から姿を一時的に消して行つた。

十月には有島武郎の親友で進歩的出版業者でもあつた叢文閣の足助素一が、舌ガン切開手術以來入院してゐた帝大分院で死んだ。舌ガンの方は治療的には成功してゐたが、頸部のガン腫が次第に肥大して致命的なものとなつたらしい。彼は非常な皮肉屋で、小言屋であつたが、死ぬ三日ほど前から始終にここして笑つてばかりゐたさうだ。流石の足助も人生に見切りをつけたものらしい。戒名は雷光院藏華素一居士といふのであつた。行年五十一歳であつた。

十一月十四日には濱口首相が東京驛でファツシヨ的青年のために狙撃されてゐる。犯人はその場に捕縛されてゐる。首相の容態は比較的良好であると報ぜられてゐたがこの出来事は決して孤立的なものではなく、日本に於けるファツシヨ的勢力の前觸れであつた。同じ月の初めには臺灣生蕃事件が報道されてゐる。事件は生蕃人が大舉して内地人を襲撃し、多くの他種族の蕃人及び内地人を殺戮してゐるといふのであつた。内地人が蕃人に賦役を課して賃銀を拂はなかつたりしたのが直接の原因らしいが、小泉鐵の文章によると、この種族は原始共產體のやうな特殊の生活様式、習慣を持つてゐて、人類學、社會學的研究對稱であつて、内地人が、その生活様式及び習慣を無視したところに烽起の原因があるのであらうといふことであつた。

十二月十九日には猿之助の松竹脱退が問題になつてゐる。杵屋佐吉が猿之助の一座に加盟したとジヤーナリズムが騒いでゐる。然し猿之助が松竹の手から離れて他の資本家の手にかゝられるだけでは全く意味をなさない。俳優制度の改革、賃銀制度の合理化、リパトリの作製、觀客層の組織化を行ふのでなければ結極無意味に終るであらうと思つた。

私達はこの月の六日に進歩的な教育學者の山下徳治の姿を一時的に見失つてゐるが、年の暮に迫つた二十八日に私達は、片岡、中野、村山、永田の四人を江口渙の宅に迎へてゐる。四人の友達は保釋をゆるされて私達のところへ歸つて來たのであつた。七、八十名の友人がこの四人を圍んで愉快に談笑した。その時、中野が刑務所内での生活の感想をのべた中で、祝祭日にもらつた××菓子について「この花のやうに純潔で、この花のやうに忍耐強くありたいと思つたね……」と例のやうな調子で語り出したので思はず皆で拍手した。

#### 昭和六年（一九三一）四十九歳

この年は私にとつては大事な年であり、またあわたゞしい年でもあつた。



一月十五日には私達はソヴェート大使館の新築落成式に招かれてゐる。晴れた美しい朝であつた。あの傳説的な麻布狸穴の坂の上に、近代的な明い様式を持つた大使館の新しい建物が日光に照り輝いてゐた。ある自由主義の學者は、門の前で私の肩を叩いて、こゝにも「五ヶ年計畫」の成果が立派に示されてゐるではないかといつた。館内にはスバルキン博士を初めとして多くの若い館員達が私達を案内して、五ヶ年計畫に關する出版物や統計やその他の諸材料を示して呉れた。建築家の技師は人々に圍まれながら嬉しさをしてゐた。長くソヴェートの生活をして歸つて來た中條、湯淺も來てゐた。多くの進歩的な大學教授や自由思想家達、左翼の文學者や社會民主主義者の堺、青野、金子の連中も來てゐた。平日は相當激しく鬭争をしてゐると思はれる人々も吳越同舟で喜びの酒杯を舉げた。漫畫家の柳瀬正夢とレイフェルトは盛んに漫畫の筆を動かしてゐた。私は、左のやうな俳句を徒書きした。

春の町にソヴェートの船浮びけり

この年は私に對して重大な文化活動を課した。それは宗教に對する××××××。然し、この鬭争の方法に關して、私の平素の主張と日本の現實的活動との矛盾が次第に明瞭になつて行つたが、それに對する正しい批判が少しも與へられてゐなかつた。私は宗教に對する×××、極めて廣汎なものとして、自由主義者、社會民主主義者をも包含した文化運動としなければ、その運動は殆んど不可能であ

らうといふ持論を持つてゐた。然し、實際に於いては、反宗準備委員會では、委員の大部分は、最初から民主主義者と對立を生じてしまつてゐた。

尙ほ悪いことには、反宗準備委員會は、理論的には勝れてゐても文化運動に對しては最も不適任者と思はれるやうな人々によつて指導されてゐたので、委員會が早くからセクト的、機械主義的な傾向を持ち、委員の内、公職を持つたり、他の啓蒙的文化運動の組織の中にある人々は、その活動の均衡を失つて、次第に出席不可能になつて行つた。然し、この運動はセクト的になればなるほど、一見その鬭争力を強めて行つてゐるやうに思はれた。そのことは他の文化運動からは絶えず批判されてゐたが、委員會はそれを受け入れなかつた。私達は反宗準備會の講演を終へて歸つた頃には、色々なデマゴグの口實を世間に與へてゐた。例へば反宗鬭争運動は、寺院の襲撃を企圖してゐるものだというのが、その最も大きなものであつた。このデマゴグは、實際に於いて反宗鬭争の直接に受け取るべき性質のものではなかつたが、この口實を與へたところに、この運動の最初の失敗があつた。

私は、××××××反宗運動の原則を根據として一、信教の自由。二、説得。三、宣傳。四、組織化の四つの方法によつてイデオロギー的啓蒙運動として活動をすゝめなければならぬと主張したがこの主張は寧ろ敗北主義的なものとしてしか受取られなかつた。私は京阪旅行から歸つて事務所を訪



ねると反宗の事務所は全く文字通り蜂の巣をついたやうな混乱に陥つてゐた。私はこの時、日本に於ける反宗運動の組織が既に、致命的な負傷を受けてゐることを知つて、可なりな失望を感じた。

この反宗の運動と殆んど平行して私達の上に課された運動は、「ソヴェート友の會」の創立準備活動であつた。長谷川如是閑、安田徳太郎、山下徳治、山内一郎等と共に日ソ文化交流機關として「ソヴェート友の會」の創立を企てたのは、去年の暮であつたが、私達は六月十七日にやうやう白十字で創立準備會を開催する運びになつた。安田、高山、茂森、小川、中根、柏木、山内、加藤、土井、稲葉、杉山その他の人々が集つた。私が座長として議事に入らうとすると、突然、四谷署員によつて無届集會を理由として解散を命ぜられ、加藤、稲葉、杉山と私の四人は四谷署に検束されてしまつた。

この出来事は却つて「ソヴェート友の會」の性質を一般に説明することに役立つて、「ソヴェート友の會」の發會式が六月二十七日堂々として本郷明治製菓の三階で行はれることになつた。この發會式には藏原惟郭を初めとして、學者、藝術家、實業家等を含んだ八十餘名の人が出席した。つゞいて七月七日には「友の會」の大使招待會が行はれてゐるが、この會にはソヴェート側の賓客としては、トロヤノフスキイ大使、タス通信のナギ、代理大使メリニコフ、通商代表代理フレイマン、ガリコウイツチ、ジユコーフの諸氏を初めとして百數十名の出席者があつた。この會では私達はスパルキン博

士の申出でによつて、一切の辭禮的挨拶の交換を廢することが決定されたが、藏原惟郭とトロヤノフスキイ大使との古典的な英語の會話が實に興味のあるものであつた。藏原は「四十年前にアメリカでマルクスの文献を読んで人に笑はれたことがあつた」といつたのに對して、大使は、「ロシアでマルクスの初めて讀まれたのも同じ頃でせう」と答へた。

九月二十日には長い間準備活動をつゞけて來た反宗教闘争同盟は築地小劇場で結成大會を開くことになつた。劇場へ行くと、場の内外は數十名の制服警官によつて警戒されてゐた。署名させられて、舞臺の方へ行くと、既に議案が沒收され場内は險惡な空氣で一杯になつてゐた。解散、檢束が豫想された。準備委員が幾度か辯護士團と協議した末、十時五十分開會することに決した。押されるまゝ私は立つて、司會の挨拶を述べると、同時に臨監が中止解散！と叫んだ。同時に檢束が初まつた。私もまた一時的檢束された。本部員及び地方代議員も殆んど全部檢束された。つゞいて九月二十二日の反宗講演會も解散させられた。

この頃、突發的に滿洲地方で日支軍の衝突が行はれてゐた。十一月十八日には日本軍が黑龍江軍に對して攻撃を初めてゐる。馬占山に對する日本軍の態度は徹底的であつた。國際聯盟が動き出してゐるらしいが、態度をはつきりさせ得ないでゐる。私達はもはや日本の新聞では殆んど滿洲事變の真相



を知ることが出来ないやうになつてゐた。私達は上海エスペラント協會からの檄文によつて、やゝ精細に事變の経緯を知ることが出来た位であつた。上海の檄文は支那の大學教授、藝術家、教化團體等の署名になつたもので、日本の學者、思想家、文學者の良心に訴へ、如何にして諸君が日本××××對して××××としてゐるかといふ質問を發したものであつた。

また同じ頃、日本の文化運動は統一的な中央部結成の必要に迫られ、(1)ブルジョアジー、ファシスト及び社會ファシストによる文化反動××××。(2)労働者、農民、その他の勤勞大衆の政治的經濟的任務の系統的啓蒙、(3)労働者、農民、その他の勤勞者の文化的、生活的欲求の充足、(4)××××主義の上に立つプロレタリア文化の確立をその基本的任務として、日本プロレタリア文化聯盟(略稱「コツプ」)を所謂「滿蒙事變」をモメントとした大きな逆流の中に結成してゐた。

「文化聯盟」の結成は、日本のプロレタリア文化運動のためには大きな前進ではあつたが、私個人にとつては、仕事の上で大きな牴觸を感じさせるものであつた。例へば「ソヴェトの友の會」の會員であること、<sup>1</sup>「文化聯盟」の會員であることは、その高さで職能の上で明かに大きな牴觸であつた。これを友人達に理解させることは私にとつては可なり困難な仕事であつた。これと類似した牴觸は、各文化運動の性質や高さの上から感じられてゐたが、牴觸は牴觸のまま、で大きな力に引ずられて、こ

(この項終り)

の多難な年が暮れて行つた。



## XI 逆流時代

(昭和七年——八年)

### 昭和七年(一九三二) 五十歳

この年譜も、もう五十年の點に達した。五十といふ數字は、殆んど習慣的に人間に一種の恐怖感を與へる。然し、今でも私は二十八歳頃のテムペラメントを殆んど失つてゐない。私は今やう／＼自然及び人生を見る眼を開きかけてゐるのだ。知らなければならぬこと、爲さなければならぬことが私の前に山積してゐる。「日暮れて道遠し」であらうか？ いや、私達は自分の生活を孤立したものとして考へてはならないのではないか。私はもし、自分を發達して止まない「人生」と共に生きるといふ信念を失はなかつたならば、個人生活は縦にも横にも無限の流動を持つてゐることが感ぜられるであらう。そしてその信念こそ、私達の生活及び藝術活動によつて體得されなければならぬものではないからうか。

然しこの逆流時代に處する進歩的なインテリゲンツィアの仕事は、決して生やさしいものではない。文化闘争の強力な進展の底を逆行して流れてゐるやうに感ぜられた逆流は、去年の暮の滿洲事變の勃

發によつて一層強力なものとして、全日本の文化形態の底を渦を卷いて流れ初めてゐる。その逆流は半世紀以上を費して建設されたブルジョア政治の機構をさへ×××××。私達は一月三日には日本軍が錦州を占領したといふ報道を受けてゐるが、一方國內的には、爆弾事件の責任を負うて一旦總辭職をした犬養内閣は、一月二十一日には野黨に對しては一言の發言をも許さず、議會を解散してゐる。二月八日には前藏相井上準之助は、ファツシオ青年のために暗殺されてゐる。井上は當日午後七時頃本郷駒込小學校に於ける民政黨候補者駒井重次の應援に行つたのを、ファツシオ青年はブローニング拳銃を井上の身體につけたまゝ、三發を發射してその場に倒したものであつた。この事件は先の濱口事件とも聯關性を持つたものであつたことは、取調べ及び裁判の進行中に一般に知れ渡つたものである。

三月六日には、大衆作家三上於菟吉、直木三十五達が軍部の一部の者と會見して、國民的文學運動を起すであらうといふことが傳へられてゐる。この事は決して偶然な思ひ付きなどではなく、大衆作家の持つイデオロギイと、軍部の一部の者の持つイデオロギイとの一致を物語るものであつた。大衆作家の持つイデオロギイは明かに封建主義的であつて、當然現在の社會段階ではファツシオ的役割をつとめる他道のないものであつた。然も大衆作家は、自分達は日本的立場から活動を起すので、決し